

古 町 遺 跡

—一般県道板野川島線住宅地関連公共施設
整備促進事業関連埋蔵文化財発掘調査報告—

2002

徳 島 県 教 育 委 員 会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

古 町 遺 跡

—一般県道板野川島線住宅地関連公共施設
整備促進事業関連埋蔵文化財発掘調査報告—

2002

徳 島 県 教 育 委 員 会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター



銅鏡小片 (00年度 SD3001出土)



石帯 (00年度 SK3001出土)



石帯 (01年度 SD3017出土)



柄頭 (01年度 第2包含層出土)



01年度 土墳墓 ST2001人骨出土状況



古町遺跡出土遺物 (00, 01年度)

序 文

本書は、一般県道板野川高線住宅地関連公共施設整備促進事業に伴い、平成12～13年度に実施した古町遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

当遺跡は板野町の中心部に位置し、旧吉野川、宮川内川、黒谷川等の河川により形成された氾濫源の低湿地に所在します。この地域は律令時代の南海道のルートにあたり、古くから交通の要所として栄えてきた場所であります。今回の調査では古代から中世にかけての遺構や遺物が数多く出土しました。特に、銅鏡や石帯、赤色塗装土器の出上、比較的大型の掘立柱建物の存在が確認されたことから、官衙と きわめて関係の強い遺跡と判断することができます。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、多くの関係機関及び地元の皆様にも多大の御援助・御協力をいただきましたことに深く感謝の意を表します。

2002年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
理事長 松村 通治

例 言

- 1 本書は一般県道板野川島線住宅宅地関連公共施設整備促進事業に伴って、平成12～13年度に実施した古町遺跡（板野町大寺橋ノ本所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は嶋門土木事務所（道路建設課）より依頼を受けた徳島県教育委員会文化財課が平成12年度に試掘調査を行い、古代、中世の遺構面等が存在することを確認したことから、平成12年度～13年度に、文化財課から委託を受けた財徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。
発掘調査期間 第1次調査 平成13年1月4日～平成13年3月31日
第2次調査 平成13年4月1日～平成13年9月30日
報告書作成期間 平成13年4月1日～平成14年3月31日
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。
凡例
SA 掘立柱建物跡 SD 溝 SK 土坑 SL 池・沼
SP 柱穴 SR 流路 ST 埋葬施設（墓） SX 不明遺構
- 5 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1989年版によった。
- 6 遺構番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 7 第4図の地形図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「大寺」を使用した。
- 8 調査にあたっては、次の機関の御協力・御指導を得た。
徳島県教育委員会 徳島県嶋門土木事務所（道路建設課）
- 9 発掘調査・整理期間を通じて次の方々に御協力・御教示を得た。
植地 岳彦 岡山真知子 大北 和美 日下 正剛 久保藤美朗 栗林 誠治
幸泉 満大 近藤 玲 下窪 光俊 泊 強 藤川 智之 鳥野 美子
(五十音順・敬称略)
- 10 本書の執筆・編集は、斎藤 剛が行った。写真は、遺物のエックス線撮影を植地岳彦、遺物撮影を島巡賢二、金森映人、斎藤 剛が、遺構は調査担当者が撮影した。

序 文

本書は、一般県道板野川島線住宅地関連公共施設整備促進事業に伴い、平成12～13年度に実施した古町遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

当遺跡は板野町の中心部に位置し、旧吉野川、宮川内川、黒谷川等の河川により形成された氾濫源の低湿地に所在します。この地域は律令時代の南海道のルートにあたり、古くから交通の要所として栄えてきた場所であります。今回の調査では古代から中世にかけての遺構や遺物が数多く出土しました。特に、銅鏡や石帯、赤色塗装土器の出土、比較的大型の掘立柱建物の存在が確認されたことから、官衙と きわめて関係の強い遺跡と判断することができます。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、多くの関係機関及び地元の皆様に多大の御援助・御協力をいただきましたことに深く感謝の意を表します。

2002年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
理事長 松村 通治

本文目次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	3
2	調査の経過	5
3	調査日誌抄	8
II	遺跡の立地と環境	9
1	地理的環境	11
2	古町遺跡周辺の地理的環境	11
3	古町遺跡周辺の歴史的環境	12
III	調査成果 第1次調査(2000年度調査)調査成果	17
1	基本層序	19・20
(1)	奈良・平安時代の遺構と遺物	23
	掘立柱建物	23
	溝	28
	土坑	34
	柱穴	38
(2)	鎌倉時代の遺構と遺物	42
	掘立柱建物	42
	溝	45
	土坑	46
	柱穴	49
(3)	室町時代の遺構と遺物	52
	土坑	52
	柱穴	56
(4)	遺構外出土の遺物	58
	古代包含層(第3包含層)出土遺物	58
	中世包含層(第2・第1包含層)出土遺物	68
III	調査成果 第2次調査(2001年度調査)調査成果	79
1	基本層序	81・82
(1)	奈良・平安時代の遺構と遺物	90
	掘立柱建物	90
	溝	92
	土坑	104

柱穴	130
自然河川	141
土壇墓	143
(2) 鎌倉時代の遺構と遺物	145
掘立柱建物	145
溝	147
土坑	149
柱穴	158
土壇墓	166
不明遺構	170
(3) 室町時代の遺構と遺物	174
掘立柱建物	174
溝	175
土坑	179
池・沼	181
柱穴	181
(4) 遺構外出土の遺物	184
古代包含層（第3包含層）出土遺物	184
中世包含層（第2包含層）出土遺物	185
2 まとめ	186
(1) 遺構	186
(2) 遺物	189
IV 考察	193

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位茨国	3	第 32 図	SK3001実測図	35
第 2 図	調査区位置図	6	第 33 図	SK3001出土遺物実測図	36
第 3 図	グリッド配置図	7	第 34 図	SK3002実測図	37
第 4 図	古町遺跡周辺の遺跡分布図	13	第 35 図	SK3003実測図	37
第 5 図	第 1 次 (2000年度) 調査区 基本層序図	19・20	第 36 図	SK3004実測図	37
第 6 図	第 1 次 (2000年度) 調査区 第 3 遺構面遺構配置図	21・22	第 37 図	SK3002出土遺物実測図	37
第 7 図	第 1 次 (2000年度) 調査区 第 2 遺構面遺構配置図	21・22	第 38 図	SK3003出土遺物実測図	37
第 8 図	第 1 次 (2000年度) 調査区 第 1 遺構面遺構配置図	21・22	第 39 図	SK3011実測図	38
第 9 図	SA3001実測図	23	第 40 図	SK3004出土遺物実測図	38
第 10 図	SP3050実測図	24	第 41 図	SK3011出土遺物実測図	38
第 11 図	SP3053実測図	24	第 42 図	SP3002実測図	39
第 12 図	SP3057実測図	25	第 43 図	SP3002出土遺物実測図	39
第 13 図	SP3068実測図	25	第 44 図	SP3033出土遺物実測図	39
第 14 図	SA3001各柱穴出土遺物実測図	27	第 45 図	SP3033実測図	39
第 15 図	SD3001上層断面実測図	28	第 46 図	SP3035実測図	39
第 16 図	SD3001銅鏡小片実測図	28	第 47 図	SP3035出土遺物実測図	39
第 17 図	SD3001出土遺物実測図	28	第 48 図	SP3048出土遺物実測図	39
第 18 図	SD3001銅鏡小片出土状況図	29	第 49 図	SP3018実測図	39
第 19 図	SD3002土層断面実測図	29	第 50 図	SP3049実測図	41
第 20 図	SD3002出土遺物実測図	29	第 51 図	SP3067実測図	41
第 21 図	SD3003土層断面実測図	30	第 52 図	SP3086実測図	41
第 22 図	SD3003出土遺物実測図	31	第 53 図	SP3049出土遺物実測図	41
第 23 図	SD3004土層断面実測図	32	第 54 図	SP3067出土遺物実測図	41
第 24 図	SD3006土層断面実測図	32	第 55 図	SP3086出土遺物実測図	41
第 25 図	SD3007上層断面実測図	32	第 56 図	SA2001実測図	42
第 26 図	SD3007出土遺物実測図	32	第 57 図	SA2001柱穴出土遺物実測図	42
第 27 図	SD3007土層断面実測図	33	第 58 図	SA2002柱穴出土遺物実測図	42
第 28 図	SD3009土層断面実測図	33	第 59 図	SA2002実測図	43
第 29 図	SD3010土層断面実測図	33	第 60 図	SA2004柱穴出土遺物実測図	43
第 30 図	SD3011上層断面実測図	33	第 61 図	SA2003実測図	44
第 31 図	SD3010, SD3011出土遺物実測図	33	第 62 図	SA2004実測図	44
			第 63 図	SA2005実測図	45
			第 64 図	SD2002土層断面実測図	45
			第 65 図	SD2003土層断面実測図	45
			第 66 図	SK2001~SK2005実測図	46

第 67 图	SK2002、SK2004 出土遗物实测图	46	第 105 图	SP1032 实测图	57
第 68 图	SK2002 实测图	47	第 106 图	SP1005 出土遗物实测图	57
第 69 图	SK2004 实测图	47	第 107 图	SP1025 出土遗物实测图	57
第 70 图	SK2010 实测图	48	第 108 图	SP1031 出土遗物实测图	57
第 71 图	SK2014 实测图	48	第 109 图	SP1032 出土遗物实测图	57
第 72 图	SK2010 出土遗物实测图	48	第 110 图	第 3 包含层出土遗物实测图(1)	59
第 73 图	SK2014 出土遗物实测图	48	第 111 图	第 3 包含层出土遗物实测图(2)	60
第 74 图	SP2020 实测图	50	第 112 图	第 3 包含层出土遗物实测图(3)	62
第 75 图	SP2036 实测图	50	第 113 图	第 3 包含层出土遗物实测图(4)	63
第 76 图	SP2062 实测图	50	第 114 图	第 3 包含层出土遗物实测图(5)	65
第 77 图	SP2088 实测图	50	第 115 图	第 3 包含层出土遗物实测图(6)	66
第 78 图	SP2089 实测图	51	第 116 图	第 2 包含层出土遗物实测图(1)	69
第 79 图	SP2116 实测图	51	第 117 图	第 2 包含层出土遗物实测图(2)	70
第 80 图	SP2020 出土遗物实测图	51	第 118 图	第 2 包含层出土遗物实测图(3)	71
第 81 图	SP2036 出土遗物实测图	51	第 119 图	第 2 包含层出土遗物实测图(4)	73
第 82 图	SP2062 出土遗物实测图	51	第 120 图	第 1 包含层出土遗物实测图(1)	75
第 83 图	SP2088 出土遗物实测图	51	第 121 图	第 1 包含层出土遗物实测图(2)	76
第 84 图	SP2089 出土遗物实测图	51	第 122 图	第 1 包含层出土遗物实测图(3)	77
第 85 图	SP2116 出土遗物实测图	51	第 123 图	第 2 次(2001 年度)调查区 基本层序图	81·82
第 86 图	SK1001 实测图	52	第 124 图	第 2 次(2001 年度)调查区 1 区·2 区 第 3 遺構面遺構配置图	83·84
第 87 图	SK1003 实测图	52	第 125 图	第 2 次(2001 年度)调查区 3 区·4 区 第 3 遺構面遺構配置图	85
第 88 图	SK1001 出土遗物实测图	53	第 126 图	第 2 次(2001 年度)调查区 2 区 第 2 遺構面遺構配置图	86
第 89 图	SK1003 出土遗物实测图	53	第 127 图	第 2 次(2001 年度)调查区 3 区·4 区 第 2 遺構面遺構配置图	87
第 90 图	SK1004 实测图	53	第 128 图	第 2 次(2001 年度)调查区 2 区 第 1 遺構面遺構配置图	88
第 91 图	SK1005 实测图	53	第 129 图	第 2 次(2001 年度)调查区 3 区·4 区 第 1 遺構面遺構配置图	89
第 92 图	SK1004 出土遗物实测图	54	第 130 图	SA3001 实测图	90
第 93 图	SK1005 出土遗物实测图	54	第 131 图	SA3001 各柱穴出土遗物实测图	91
第 94 图	SK1006 出土遗物实测图	54	第 132 图	SA3002 实测图	92
第 95 图	SK1007 出土遗物实测图	54	第 133 图	SD3001 土層断面实测图	92
第 96 图	SK1008 出土遗物实测图	54	第 134 图	SD3001 出土遗物实测图	92
第 97 图	SK1006 实测图	55	第 135 图	SD3004 土層断面实测图	93
第 98 图	SK1007 实测图	55			
第 99 图	SK1008 实测图	55			
第 100 图	SP1005 实测图	57			
第 101 图	SP1016 实测图	57			
第 102 图	SP1016 出土遗物实测图	57			
第 103 图	SP1025 实测图	57			
第 104 图	SP1031 实测图	57			

第136图	SD3004出土遺物実測図	93	第174图	SK3034出土遺物実測図	112
第137图	SD3009出土遺物実測図	93	第175图	SK3035実測図	112
第138图	SD3009土層断面実測図	94	第176图	SK3035出土遺物実測図	113
第139图	SD3010土層断面実測図	95	第177图	SK3037実測図	113
第140图	SD3010出土遺物実測図(1)	95	第178图	SK3037出土遺物実測図	113
第141图	SD3010出土遺物実測図(2)	96	第179图	SK3038実測図	114
第142图	SD3012出土遺物実測図	96	第180图	SK3038出土遺物実測図	115
第143图	SD3012上層断面実測図	96	第181图	SK3040実測図	115
第144图	SD3014上層断面実測図	97	第182图	SK3040出土遺物実測図	115
第145图	SD3014出土遺物実測図	98	第183图	SK3041実測図	116
第146图	SD3015土層断面実測図	99	第184图	SK3041出土遺物実測図	116
第147图	SD3015出土遺物実測図	99	第185图	SK3042実測図	117
第148图	SD3016土層断面実測図	100	第186图	SK3042出土遺物実測図	117
第149图	SD3016出土遺物実測図	101	第187图	SK3044実測図	117
第150图	SD3017上層断面実測図	101	第188图	SK3044出土遺物実測図	117
第151图	SD3017出土遺物実測図	102	第189图	SK3045実測図	118
第152图	SD3018土層断面実測図	102	第190图	SK3045出土遺物実測図	118
第153图	SD3018出土遺物実測図	102	第191图	SK3047実測図	119
第154图	SD3020土層断面実測図	103	第192图	SK3047出土遺物実測図	119
第155图	SD3020出土遺物実測図	103	第193图	SK3050実測図	119
第156图	SD3021上層断面実測図	103	第194图	SK3050出土遺物実測図	119
第157图	SD3021出土遺物実測図	103	第195图	SK3051実測図	120
第158图	SD3023土層断面実測図	104	第196图	SK3051出土遺物実測図	120
第159图	SD3023出土遺物実測図	104	第197图	SK3052実測図	121
第160图	SK3002実測図	105	第198图	SK3052出土遺物実測図	121
第161图	SK3009実測図	105	第199图	SK3055実測図	122
第162图	SK3002出土遺物実測図	105	第200图	SK3055出土遺物実測図	123
第163图	SK3009出土遺物実測図	105	第201图	SK3059実測図	124
第164图	SK3019実測図	106	第202图	SK3059出土遺物実測図	124
第165图	SK3019出土遺物実測図	107	第203图	SK3060実測図	124
第166图	SK3030実測図	107	第204图	SK3060出土遺物実測図	125
第167图	SK3030出土遺物実測図(1)	109	第205图	SK3062実測図	126
第168图	SK3030出土遺物実測図(2)	110	第206图	SK3062出土遺物実測図	126
第169图	SK3032実測図	111	第207图	SK3063実測図	126
第170图	SK3032出土遺物実測図	111	第208图	SK3063出土遺物実測図	126
第171图	SK3033実測図	111	第209图	SK3065出土遺物実測図	127
第172图	SK3034実測図	112	第210图	SK3065実測図	127
第173图	SK3033出土遺物実測図	112	第211图	SK3066実測図	127

第212图	SK3066出土遗物实测图	128	第250图	SP3155出土遗物实测图	137
第213图	SK3067实测图	128	第251图	SP3157实测图	137
第214图	SK3067出土遗物实测图	128	第252图	SP3157出土遗物实测图	137
第215图	SK3069实测图	128	第253图	SP3155实测图	137
第216图	SK3069出土遗物实测图	129	第254图	SP3155出土遗物实测图	137
第217图	SK3072实测图	129	第255图	SP3168实测图	139
第218图	SK3072出土遗物实测图	129	第256图	SP3168出土遗物实测图	139
第219图	SK3080实测图	130	第257图	SP3169实测图	139
第220图	SK3080出土遗物实测图	130	第258图	SP3169出土遗物实测图	139
第221图	SP3027实测图	131	第259图	SP3170实测图	139
第222图	SP3027出土遗物实测图	131	第260图	SP3170出土遗物实测图	139
第223图	SP3062实测图	131	第261图	SP3177实测图	139
第224图	SP3062出土遗物实测图	131	第262图	SP3177出土遗物实测图	139
第225图	SP3069实测图	131	第263图	SP3180实测图	140
第226图	SP3069出土遗物实测图	131	第264图	SP3180出土遗物实测图	140
第227图	SP3073实测图	131	第265图	SP3183实测图	140
第228图	SP3073出土遗物实测图	131	第266图	SP3183出土遗物实测图	140
第229图	SP3080实测图	133	第267图	SP3184实测图	140
第230图	SP3080出土遗物实测图	133	第268图	SP3184出土遗物实测图	140
第231图	SP3087实测图	133	第269图	SR3001上层断面实测图	142
第232图	SP3087出土遗物实测图	133	第270图	SR3001出土遗物实测图	142
第233图	SP3088实测图	133	第271图	ST3001实测图	143
第234图	SP3088出土遗物实测图	133	第272图	ST3001出土遗物实测图	143
第235图	SP3092实测图	134	第273图	ST3002实测图	144
第236图	SP3092出土遗物实测图	134	第274图	SA2001实测图	145
第237图	SP3113实测图	134	第275图	SA2002实测图	146
第238图	SP3113出土遗物实测图	134	第276图	SA2003实测图	146
第239图	SP3117实测图	135	第277图	SA2004实测图	147
第240图	SP3117出土遗物实测图	135	第278图	SA2004柱穴出土遗物实测图	147
第241图	SP3128实测图	135	第279图	SD2001上层断面实测图	147
第242图	SP3128出土遗物实测图	135	第280图	SD2002土层断面实测图	147
第243图	SP3130实测图	135	第281图	SD2004土层断面实测图	148
第244图	SP3130出土遗物实测图	135	第282图	SD2004出土遗物实测图	148
第245图	SP3133实测图	135	第283图	SD2005土层断面实测图	148
第246图	SP3133出土遗物实测图	135	第284图	SD2005出土遗物实测图	148
第247图	SP3142实测图	137	第285图	SD2006上层断面实测图	148
第248图	SP3142出土遗物实测图	137	第286图	SK2003实测图	149
第249图	SP3155实测图	137	第287图	SK2003出土遗物实测图	149

第288图	SK2004出土遗物实测图	149	第326图	SP2167实测图	164
第289图	SK2004实测图	150	第327图	SP2167出土遗物实测图	164
第290图	SK2007实测图	151	第328图	SP2175实测图	164
第291图	SK2007出土遗物实测图	151	第329图	SP2175出土遗物实测图	164
第292图	SK2008实测图	152	第330图	SP2177实测图	164
第293图	SK2008出土遗物实测图	152	第331图	SP2177出土遗物实测图	164
第294图	SK2015实测图	152	第332图	SP2182实测图	165
第295图	SK2015出土遗物实测图	152	第333图	SP2182出土遗物实测图	165
第296图	SK2020实测图	153	第334图	SP2185实测图	165
第297图	SK2024实测图	154	第335图	SP2185出土遗物实测图	165
第298图	SK2024出土遗物实测图	154	第336图	SP2186实测图	165
第299图	SK2020出土遗物实测图	155	第337图	SP2186出土遗物实测图	165
第300图	SK2027实测图	155	第338图	SP2192实测图	165
第301图	SK2027出土遗物实测图	155	第339图	SP2192出土遗物实测图	165
第302图	SK2030实测图	156	第340图	ST2001实测图(1)	166
第303图	SK2030出土遗物实测图	156	第341图	ST2001实测图(2)	167
第304图	SK2032实测图	157	第342图	ST2001出土遗物实测图	168
第305图	SK2032出土遗物实测图	157	第343图	ST2002出土遗物实测图	169
第306图	SK2035实测图	158	第344图	ST2002实测图	169
第307图	SK2035出土遗物实测图	158	第345图	ST2003实测图	169
第308图	SP2059实测图	159	第346图	SX2001实测图	170
第309图	SP2059出土遗物实测图	159	第347图	SX2001出土遗物实测图	172
第310图	SP2065实测图	159	第348图	SX2002实测图	173
第311图	SP2065出土遗物实测图	159	第349图	SX2002出土遗物实测图	173
第312图	SP2067实测图	159	第350图	SA1001实测图	174
第313图	SP2067出土遗物实测图	159	第351图	SA1001柱穴出土遗物实测图	174
第314图	SP2080实测图	160	第352图	SD1001出土遗物实测图	175
第315图	SP2080出土遗物实测图	160	第353图	SD1001土层断面实测图	175
第316图	SP2090实测图	160	第354图	SD1002土层断面实测图	176
第317图	SP2090出土遗物实测图	160	第355图	SD1002出土遗物实测图	176
第318图	SP2107实测图	161	第356图	SD1003十层断面实测图	176
第319图	SP2107出土遗物实测图	161	第357图	SD1003出土遗物实测图	176
第320图	SP2114实测图	161	第358图	SD1004土层断面实测图	176
第321图	SP2114出土遗物实测图	161	第359图	SD1005土层断面实测图	177
第322图	SP2124实测图	161	第360图	SD1005出土遗物实测图	177
第323图	SP2124出土遗物实测图	161	第361图	SD1006土层断面实测图	178
第324图	SP2146实测图	162	第362图	SD1006出土遗物实测图	178
第325图	SP2146出土遗物实测图	162	第363图	SD1008土层断面实测图	178

第364図	SD1008出土遺物実測図	178
第365図	SD1009十層断面実測図	179
第366図	SD1010土層断面実測図	179
第367図	SK1001出土遺物実測図	179
第368図	SK1002出土遺物実測図	179
第369図	SK1001実測図	180
第370図	SK1002実測図	180
第371図	SL1001実測図	181
第372図	SL1001出土遺物実測図	181
第373図	SP1004実測図	182

第374図	SP1004出土遺物実測図	182
第375図	SP1009実測図	182
第376図	SP1009出土遺物実測図	182
第377図	SP1014実測図	183
第378図	SP1018実測図	183
第379図	SP1014出土遺物実測図	183
第380図	SP1018出土遺物実測図	183
第381図	第3包含層出土遺物実測図	184
第382図	第2包含層出土遺物実測図	185
第383図	板野郡板野町の小字界と条里	196

目 次

第1表	第1次(2000年度)調査 奈良・平安時代 遺構一覧表, 掘立柱建物一覧表	205
第2表	溝状遺構一覧表	205
第3表	土坑状遺構一覧表	205
第4表	柱穴遺構一覧表(1)	205
第5表	柱穴遺構一覧表(2)	206
第6表	柱穴遺構一覧表(3)	207
第7表	第1次(2000年度)調査 鎌倉時代 遺構一覧表, 掘立柱建物一覧表	208
第8表	溝状遺構一覧表	208
第9表	土坑状遺構一覧表	208
第10表	柱穴遺構一覧表(1)	208
第11表	柱穴遺構一覧表(2)	209
第12表	柱穴遺構一覧表(3)	210
第13表	柱穴遺構一覧表(4)	211
第14表	第1次(2000年度)調査 室町時代 遺構一覧表, 土坑状遺構一覧表	212
第15表	柱穴遺構一覧表	212
第16表	第2次(2001年度)調査 奈良・平安時代 遺構一覧表, 掘立柱建物一覧表	213
第17表	溝状遺構一覧表	213
第18表	土坑状遺構一覧表(1)	213
第19表	土坑状遺構一覧表(2)	214

第20表	土坑状遺構一覧表(3)	215
第21表	柱穴遺構一覧表(1)	215
第22表	柱穴遺構一覧表(2)	216
第23表	柱穴遺構一覧表(3)	217
第24表	柱穴遺構一覧表(4)	218
第25表	柱穴遺構一覧表(5)	219
第26表	流路遺構一覧表	219
第27表	土塚墓遺構一覧表	219
第28表	第2次(2001年度)調査 鎌倉時代 遺構一覧表, 掘立柱建物一覧表	220
第29表	溝状遺構一覧表	220
第30表	土坑状遺構一覧表(1)	220
第31表	土坑状遺構一覧表(2)	221
第32表	柱穴遺構一覧表(1)	221
第33表	柱穴遺構一覧表(2)	222
第34表	柱穴遺構一覧表(3)	223
第35表	柱穴遺構一覧表(4)	224
第36表	柱穴遺構一覧表(5)	225
第37表	土塚墓遺構一覧表	225
第38表	不明遺構一覧表	225
第39表	第2次(2001年度)調査 室町時代 遺構一覧表, 掘立柱建物一覧表	226
第40表	溝状遺構一覧表	226

第41表	土坑状遺構一覽表	226	第69表	第2次(2001年度)調査	
第42表	池・沼状遺構一覽表	226		出土遺物觀察表(土器・土製品) 1	247
第43表	柱穴遺構一覽表(1)	226	第70表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 2	248
第44表	柱穴遺構一覽表(2)	227	第71表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 3	249
第45表	第1次(2000年度)調査		第72表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 4	250
	出土遺物觀察表(土器・土製品) 1	228	第73表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 5	251
第46表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 2	229	第74表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 6	252
第47表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 3	230	第75表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 7	253
第48表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 4	231	第76表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 8	254
第49表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 5	232	第77表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 9	255
第50表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 6	233	第78表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 10	256
第51表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 7	234	第79表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 11	257
第52表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 8	235	第80表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 12	258
第53表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 9	236	第81表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 13	259
第54表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 10	237	第82表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 14	260
第55表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 11	238	第83表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 15	261
第56表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 12	239	第84表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 16	262
第57表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 13	240	第85表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 17	263
第58表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 14	241	第86表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 18	264
第59表	出土遺物觀察表(石器・石製品) 1	242	第87表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 19	265
第60表	出土遺物觀察表(金属器) 1	243	第88表	出土遺物觀察表(土器・土製品) 20	266
第61表	出土遺物觀察表(金属器) 2	243	第89表	出土遺物觀察表(石器・石製品) 1	266
第62表	出土遺物觀察表(金属器) 3	244	第90表	出土遺物觀察表(金属器) 1	267
第63表	出土遺物觀察表(金属器) 4	244	第91表	出土遺物觀察表(金属器) 2	267
第64表	出土遺物觀察表(金属器) 5	245	第92表	出土遺物觀察表(金属器) 3	268
第65表	出土遺物觀察表(金属器) 6	245	第93表	出土遺物觀察表(金属器) 4	268
第66表	出土遺物觀察表(金属器) 7	246	第94表	出土遺物觀察表(金属器) 5	269
第67表	出土遺物觀察表(金属器) 8	246	第95表	出土遺物觀察表(金属器) 6	269
第68表	出土遺物觀察表(銭貨) 1	246	第96表	出土遺物觀察表(銭貨) 1	269

卷頭図版目次

図版 1	00年度出土遺物 銅鏡小片, 石帯
	01年度出土遺物 石帯, 柄頭
図版 2	01年度 上横塚 ST2001人骨出土状況
	00, 01年度 古町遺跡出土遺物

図 版 目 次

図版1	00年度 調査前全景 ……………273	図版17	01年度 SD3009遺物検出状況(2) ……………289
	00年度 人力掘削状況 ……………273		01年度 SD3015遺物検出状況(1) ……………289
図版2	00年度 西壁土層堆積状況 ……………274	図版18	01年度 SD3015遺物検出状況(2) ……………290
	00年度 第1遺構面完掘状況 ……………274		01年度 SD3016遺物検出状況 ……………290
図版3	00年度 第2遺構面完掘状況 ……………275	図版19	01年度 SD3018遺物検出状況 ……………291
	00年度 第3遺構面完掘状況 ……………275		01年度 SK3002遺物出土状況 ……………291
図版4	00年度 SA3001全景 ……………276	図版20	01年度 SK3019遺物出土状況 ……………292
	00年度 SP3057 (SA3001のピット) 断面 状況 ……………276		01年度 SK3037断面状況 ……………292
図版5	00年度 SP3068 (SA3001のピット) 断面 状況 ……………277	図版21	01年度 SK3060遺物出土状況(1) ……………293
	00年度 SD3001検出状況 ……………277		01年度 SK3060遺物出土状況(2) ……………293
図版6	00年度 SA3001銅鏡小片出土状況 ……………278	図版22	01年度 ST3001遺物出土状況 ……………294
	00年度 SD3003遺物検出状況(1) ……………278		01年度 3区第3包含層 石帯 出土状況 ……………294
図版7	00年度 SD3003遺物検出状況(2) ……………279	図版23	01年度 2区第3包含層 刀の銅 出土状況 ……………295
	00年度 SD3011土層堆積状況 ……………279		01年度 SK2006断面状況 ……………295
図版8	00年度 SD3010, SD3009, SD3008全景 ……280	図版24	01年度 SK2007遺物出土状況(1) ……………296
	00年度 SK3001遺物出土状況 ……………280		01年度 SK2007遺物出土状況(2) ……………296
図版9	00年度 SK3003遺物出土状況 ……………281	図版25	01年度 SK2017遺物出土状況 ……………297
	00年度 上坑列 SK2001, SK2002, SK2003 SK2004, SK2005 ……………281		01年度 SK2020遺物出土状況 ……………297
図版10	00年度 SK2010断面状況 ……………282	図版26	01年度 SP2032断面状況 ……………298
	00年度 SK1002検出状況 ……………282		01年度 SP2067断面状況 ……………298
図版11	00年度 SK1008断面状況 ……………283	図版27	01年度 SP2124遺物出土状況 ……………299
	00年度 SP1031遺物出土状況 ……………283		01年度 SP2148遺物出土状況 ……………299
図版12	01年度 調査前全景 ……………284	図版28	01年度 ST2001, ST2002人骨出土状況 ……300
	01年度 2区 第1遺構面完掘状況 ……………284		01年度 SX2001EP-7遺物出土状況 ……………300
図版13	01年度 3区 第1遺構面完掘状況 ……………285	図版29	01年度 4区第2包含層 柄頭 出土状況 ……………301
	01年度 4区 第1遺構面完掘状況 ……………285		01年度 SD1001土層堆積状況 ……………301
図版14	01年度 2区 第2遺構面完掘状況 ……………286	図版30	01年度 SK1001遺物出土状況 ……………302
	01年度 3区 第2遺構面完掘状況 ……………286		01年度 SL1001土層土層堆積状況 ……………302
図版15	01年度 4区 第2遺構面完掘状況 ……………287	図版31	00年度 出土遺物(1) ……………303
	01年度 2区 第3遺構面完掘状況 ……………287	図版32	00年度 出土遺物(2) ……………304
図版16	01年度 2区 SA3001全景 ……………288	図版33	00年度 出土遺物(3) ……………305
	01年度 SD3009遺物検出状況(1) ……………288	図版34	00年度 出土遺物(4) ……………306

図版35	00年度	出土遺物(5)	307	図版42	01年度	出土遺物(3)	314
図版36	00年度	出土遺物(6)	308	図版43	01年度	出土遺物(4)	315
図版37	00年度	出土遺物(7)	309	図版44	01年度	出土遺物(5)	316
図版38	00年度	出土遺物(8)	310	図版45	01年度	出土遺物(6)	317
図版39	00年度	出土遺物(9)	311	図版46	01年度	出土遺物(7)	318
図版40	01年度	出土遺物(1)	312	図版47	00・01年度	出土遺物・金属器(1)	319
図版41	01年度	出土遺物(2)	313				

写真目次

写真1	調査風景 (00年度)	5
写真2	調査風景 (01年度)	5

I 調査の経緯

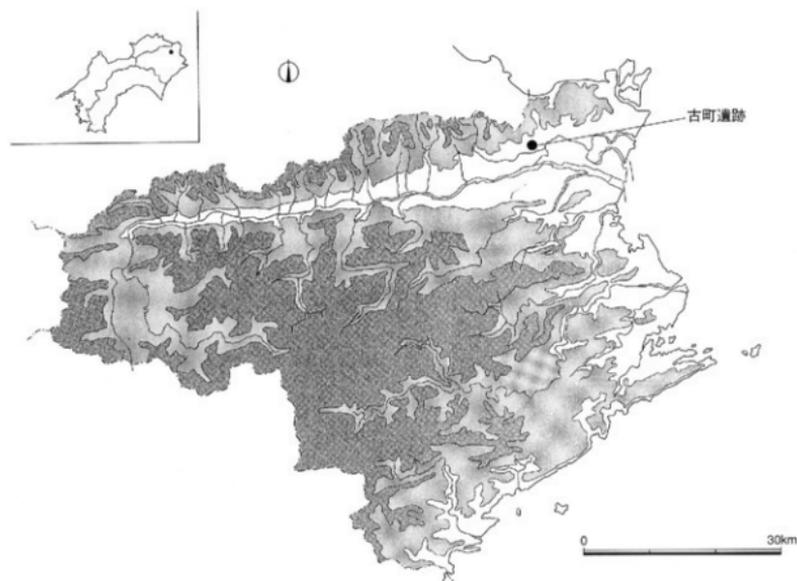
1 調査に至る経緯

当該地は、宮川内谷川北岸の自然堤防上に位置し、北東約300mに古城遺跡、約700mには黒谷川郡原遺跡、また北西約700mの地点には板西城跡が所在する、板野町内でも有数の遺跡集中地帯の一角を占める。しかし、当地域一帯は旧吉野川や宮川内谷川などの度重なる氾濫や河道変更により、遺跡の立地する微高地が埋没しており、地表観察のみでは遺跡の存在把握が難しい地域でもある。

宮川内谷川以北の遺跡の取り扱いについては、鳴門土木事務所の照会に対し「宮川内谷川から県道板野川高線までの区間は、集落部分において一部試掘が必要」との回答をしている。

今回の試掘調査は、以上の経緯をふまえた上で平成12年7月26日と12月22日の2回、文化財課が実施し、幅2m、長さ3～4mのトレンチを、1回目は2箇所、2回目は3箇所を設定し、掘り下げて確認する方法を採用した。その結果、第1トレンチでは地表下約1.6mのシルト質土上面で焼土の広がり、土坑を検出、直上の層から中世土器が出土していることから、これを第1遺構面とした。そして、土層観察により地表下1.6～2.2mにかけて4面の遺構面が確認された。時期は平安時代後半から室町時代にかけてのものと考えられる。なお、地表下2.6mの層以下では無遺物の細砂層となり、遺跡の存在する可能性は低い。

第2トレンチでは、地表下約1mで、幅2m、深さ1mに及ぶ溝状遺構の一端を検出した。検出面は、第1遺構面と考えられる。以下、それぞれ第1トレンチに対応する3面の遺構面を確認している。



第1図 遺跡位置図

試掘調査により、平安時代後半から室町時代にかけての遺跡の存在を確認した。遺構面（生活面）は3面に及び、遺物・遺構の内容等から集落跡に相当すると考えられる。よって、試掘調査範囲内における工事に伴う掘削影響範囲については発掘調査が必要であると判断するに及んだ。

その後、発掘調査実施の協議を重ねていき、平成13年1月4日～3月31日に第1次、4月1日～9月30日に第2次発掘調査を行った。調査は財団法人埋蔵文化財センターが担当した。

なお、この発掘調査の終了に伴い調査報告書を発刊する運びとなり、当埋蔵文化財センターが平成13年4月1日～平成14年3月31日に遺物整理及び報告書作成にあたることとなった。

調査体制及び整理体制は以下のとおりである。

〈総括、総務担当〉

○財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

事務理事兼 所長	寒川 光明 (平成12年度)
	本淨 敏之 (平成13年度)
常務理事兼 事務局長	伊丹 康裕 (平成12・13年度)
総務課 課長	高野 明 (平成12・13年度)
調査課 課長	菅原 康夫 (平成12・13年度)
整理普及課 課長	烏巡 賢二 (平成12・13年度)
調査係 係長	光山 忠幸 (平成12・13年度)
整理係 係長	西谷 泰幸 (平成12年度)
	貞野 保仁 (平成13年度)

〈発掘調査担当〉

○徳島県埋蔵文化財センター

平成12年度・第1次調査

研 究 員	下内 新吾	喜多 啓二	須崎 一幸	梶河 智江
調 査 補 助 員	川真田隆子	宮井 孝幸	坂東 美幸	木那 令子

平成13年度・第2次調査

研 究 員	須崎 一幸	梶河 智江	喜多 啓二	高橋 栄子
調 査 補 助 員	宮井 孝幸	杉本 道子	京寛 裕子	中村 太

〈整理担当〉

○徳島県埋蔵文化財センター

平成13年度 研 究 員	齋藤 剛			
調 査 補 助 員	川野 知子	川村 昌子	小那 恵美	杉野 貴子
	山根 秀子			

2 調査の経過

(1) 調査の経過

調査は用地取得のなされた地区から順次行い、第1次調査580㎡を平成13年1月4日～3月31日に、第2次調査1,044㎡を平成13年4月1日～9月30日において、それぞれ実施した。総面積は1,624㎡である。(第2図)

(2) 調査区割

調査区は、町道を挟んで5ヵ所に分けられる。遺跡内の調査区区分は、町道よりすぐ南東側の調査区の、北より約2/3までが第1次調査(平成12年度)の部分である。そして、それ以外の部分が2次調査(平成13年度)のものであるが、町道より北西側の区域を北より1工区、2工区と区分する。また、南東側の第1次調査区に隣接する区域が3工区、少し離れた最南東区域を4工区と区分した。

グリッド配置は第4系国土地標を基準とし、全調査区をX軸・Y軸線上に5m間隔のグリッドを設定し、東西方向はアラビア数字(1, 2, 3……)で、南北方向は英大文字(A, B, C……)で表し、それらの組み合わせによってA1, A2, A3……のようにグリッド名として表している。(第3図)

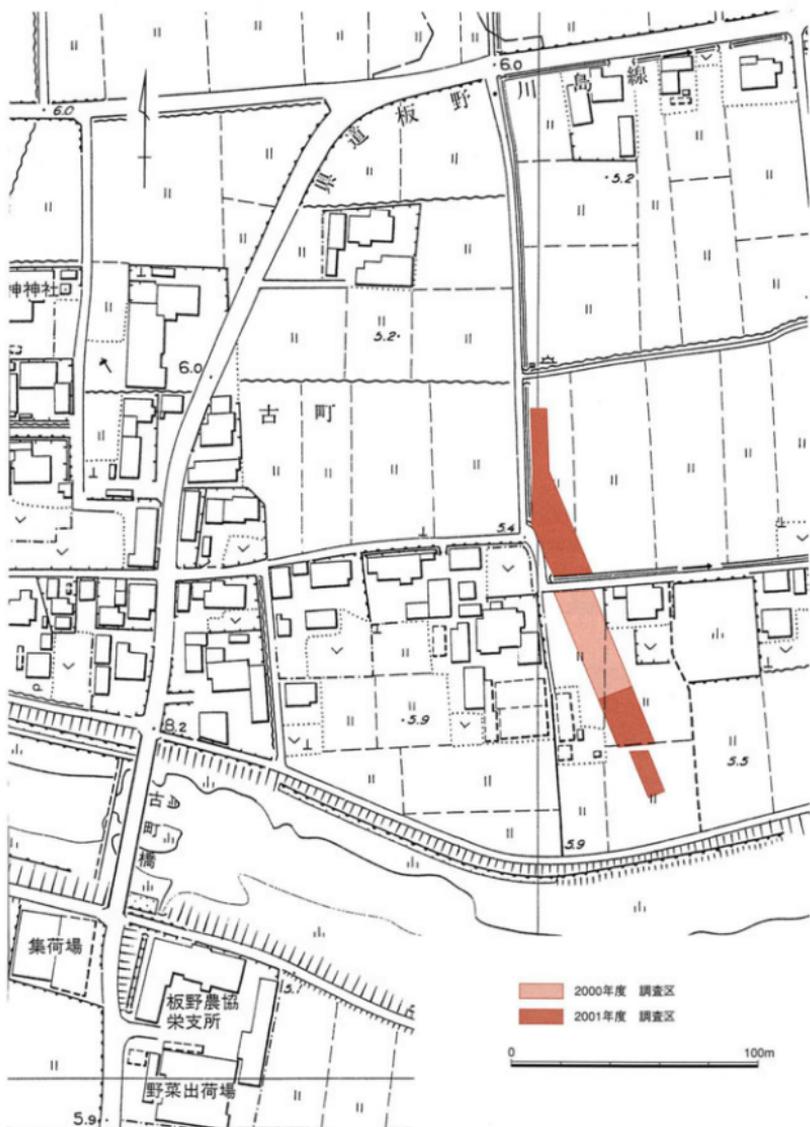
調査地は沖積地に位置し、層序は調査区全域にわたり、基本的に平行堆積である。礫をほとんど含まない、やや粘性のあるシルト質土が、ほぼ安定して堆積している。調査区南部で、地表面から約1.0m下方に第1包含層、約1.2m下方に第2包含層、約1.6m下方に第3包含層が存在するが、調査区北方に行くにつれ、層位が下がる傾向がある。中でも第3包含層は、多くの遺物を含む。



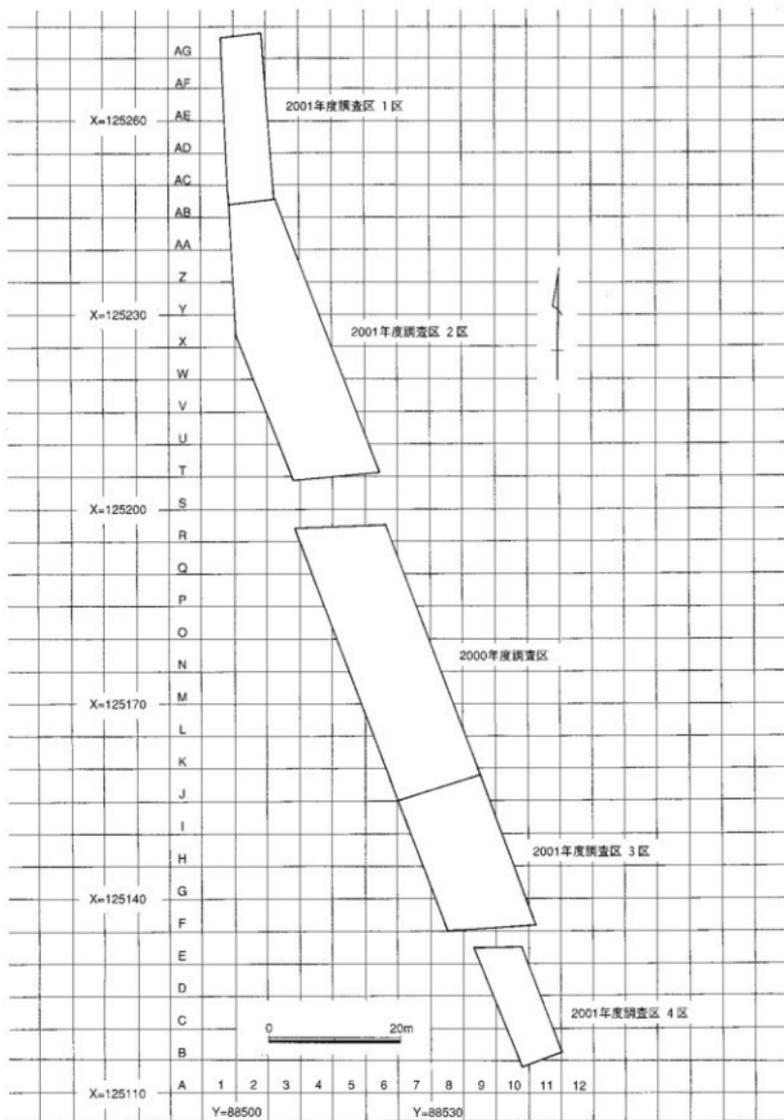
写真1 調査風景(00年度)



写真2 調査風景(01年度)



第2図 調査区位置図



第3図 グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

グリッド番号及び遺構番号については、報告書掲載番号で表記する。

古町遺跡

2000年度 (2001年)	5月14日	第1遺構面精査。機械掘削終了。	
1月4日	発掘調査時前準備。	5月16日	第1遺構面遺構掘削。3区機械掘削。
1月9日	表土機械掘削。防塵ネット設置。	5月18日	3区・機械掘削終了。
1月12日	第1包含層人力掘削。側溝掘削。	5月21日	第1遺構面完掘状況写真撮影。
1月18日	第1遺構面精査。	5月25日	3区・第1包含層人力掘削。
1月22日	第1遺構面遺構掘削。	5月28日	2区・第2包含層人力掘削。4区・機械掘削。
1月24日	高所作業車による空中撮影。	6月1日	第1遺構面遺構掘削。2区・第2遺構面精査。
1月25日	図面整理。	6月4日	3区・第1遺構面遺構掘削。
1月26日	側溝掘削。遺物洗浄。	6月7日	2区・第2遺構面精査。4区・第1遺構面精査。
1月29日	第2包含層人力掘削。	6月8日	4区・第1遺構面遺構掘削。
2月9日	第2遺構面精査。	6月12日	2区・第2遺構面完掘状況写真撮影。
2月14日	第2遺構面遺構掘削。	6月15日	2区・3区：第2包含層人力掘削。
2月21日	第2遺構面完掘状況写真撮影。 第3包含層人力掘削。	6月19日	3区・第2遺構面精査。
2月23日	第3包含層機人力掘削。 第3包含層機械掘削。	6月28日	3区・第2遺構面遺構掘削。2区試掘トレンチ。
3月5日	第3遺構面精査。	7月3日	4区・第2遺構面遺構掘削。
3月7日	第3遺構面検出状況写真撮影。	7月9日	2区・第2包含層人力掘削。
3月8日	第3遺構面遺構掘削。	7月11日	2区・第3包含層人力掘削。
3月15日	第3遺構面・一部再検出、完掘。 遺構完掘状況写真撮影。	7月19日	3・4区：第2遺構面完掘状況写真撮影。
3月16日	第3遺構面平面図作成。土器整理。	7月24日	2区・第3遺構面遺構検出。4区3包人力掘削。
3月21日	確認掘り。土器整理。図面整理。	8月7日	2区・第3遺構面遺構掘削。
3月22日	第3遺構面精査。 第3遺構面遺構掘削。土器整理。	8月18日	2区・遺構掘削。3区・第3包含層人力掘削。
3月23日	完掘状況写真撮影。土器整理。	8月28日	2区・第3遺構面完掘状況撮影。3区・第3遺構面精査。4区・第3包含層人力掘削。
3月26日	遺物収納。図面整理。	8月31日	3区・第3遺構面精査。4区・第3面人力掘削。
3月30日	現場撤収。	9月1日	3区・第3遺構面遺構掘削。1区・機械掘削。
2001年度 (2001年)	9月13日	3区・第3遺構面遺構掘削。	
4月2日	発掘調査時前準備。	9月21日	3区・1区：第3遺構面完掘状況写真撮影。
5月7日	表土機械掘削。防塵ネット設置。		4区・第3遺構面完掘状況写真撮影。
5月11日	試掘トレンチ再掘削。	9月27日	確認トレンチ掘削。調査終了。
5月12日	側溝掘削。	9月28日	現場撤収。

II 遺跡の立地と環境



1 地理的環境

古町遺跡の所在する板野郡板野町は、昭和30年2月に、旧、板西町・松坂町・栄村の3か町村の合併により成立している。合併した3か町村の以前の板野郡内には1町20か村、(川内村・応神村・住吉村・藍園村・撫養町・里浦町・鳴門村・瀬戸村・大津村・北灘村・堀江村・板東村・大山村・松島村・北島村・御所村・松茂村・一条村・板西村・栄村・松坂村、明治22年施行)が存在した。

板野郡についての郡名は、藤原宮出土木簡が初見で、「板野評津屋里猪脯」としてであり、「郡」ではなくそれ以前の行政単位である「評」で記載されている。そのほか平城宮木簡では、「板野郡井隈郷、田上郷」等の記載が認められる。古代の板野郡の範囲は、現在の行政区分で板野郡・鳴門市・徳島市の一部の、広い地域に及ぶものであった。また「延喜式」兵部省式には、阿波国南海道には石隅(いその)¹⁾・郡頭(こうづ)の各駅場が設置されたことが何われ、このうち郡頭駅については、板野町大寺字郡頭に比定されており、阿波国府と讃岐国に向かう南海道要衝の一つである。そのほか当該地域は板野郡衙の候補地でもある。また、金光明寺をはじめ奈良時代から平安時代にかけての寺院も多く、このように板野町は官道の要衝としての利点を生かし、その後、吉野川北岸地域の中心的役割をになう重要な地域となる。

2 古町遺跡周辺の地理的環境

徳島県は四国東部に位置し、紀伊水道を隔てて和歌山県と対峙する。県北部は阿讃山脈が果して香川県と接し、県南部は高知県と県西部は高知県の山間部と、一部愛媛県と接している。

平野部は、吉野川流域及び那賀川流域の河口部に形成された広大な三角州状の平野部以外は、中小の河川によって形成された狭少な平坦部が見られるにすぎない。

当該地域は北部山間地域を構成する阿讃山脈と、その南麓に分布する古期扇状地礫層で成る緩斜面、及び沖積層からなる平野部によって構成されている。四国東部はわが国最大規模の断層である中央構造線が東西方向に貫いており、本町においてもその活動による大規模な破砕帯が見られる。中央構造線の南北では地質に相違が見られ、南側は四国山地を形成する三波川変成岩類、北側は阿讃山脈を形成する和泉群層である。和泉群層は白亜紀後期に堆積した海成層であり、砂岩泥岩の互層から成っている。したがって表層地質における構成物質は、吉野川南岸にはおもに結晶片岩類が含まれるのに対して、同北岸地域では砂岩類が主な構成物質といわれている。しかし吉野川本流性堆積物によって形成された平野部では北岸地域でも若干の結晶片岩類の細片の混入が見られる。

古町遺跡は、板野郡板野町大寺に所在し、吉野川北岸、旧吉野川と阿讃山脈南麓の平野部に立地し、吉野川河口からは約15km上流部に位置する。本遺跡は旧吉野川、宮内谷川、黒谷川等の河川により形成された微高地が複雑に入り組んでおり、地表面下約2.0~3.0m、海拔2.0~4.0m前後に位置している。本河川は旧吉野川と直結しており、船橋などの名称からも、古くから河川を利用した交通手段が営まれていたことが伺える。また板野町では、中央構造線が山地の南縁を西南西~東北東に走り、平野部と山地を区別する格好となり、平野部は西南日本外帯の最北縁、山地は内帯の最南縁に位置している。

平野部における現況の地割りには、正方位または若干西に傾斜した方形地割りがみられ、条里地割りの踏襲または中世段階の地割りの再形成と指摘されている。⁵⁾

3 古町遺跡周辺の歴史的環境

古町遺跡周辺では、阿讃山脈南麓及び平野部において、旧石器時代から中世に至るまで数多くの遺跡が形成されている。近年においては平野部の地表下約5m、海拔1m前後において弥生時代の大規模な集落跡が検出されており、山麓はもとより河川の氾濫源とされてきた低地部での遺跡の確認が重要視されてきている。

旧石器時代の遺跡としては、板野郡羅漢に国府型ナイフ形石器を主体とした平山遺跡³⁾が存在し、隣接する上板町にかけてその広がりが予想される。また、現在において本遺跡から東にかけては鳴門市大麻町所在の光勝院寺内遺跡⁴⁾までの約7.0kmの間、旧石器遺跡の存在は確認されていない。しかしこれより小鳴門海峡遺跡にかけて遺跡の立地を考えると、検出される遺跡自体が沈降傾向にあるため、本町の古期扇状地礫層上には十分に旧石器遺跡の存在が予想される。

縄文時代の遺跡は、現在のところ明確に存在が確認されていない。しかしながら山麓部一帯に縄文時代に属すると考えられる石畿ならびに各種の石製品が採集されていることから、当時代の遺跡は確実に存在するものと思われる。⁵⁾ また、近年の調査に於いても、平野部で確認された弥生時代後期から古墳時代初頭を中心とした黒谷川郡頭遺跡の下層から、縄文時代後期から晩期にかけての深鉢形土器・浅鉢形土器が出土しているが、断片的にしかならない。⁶⁾

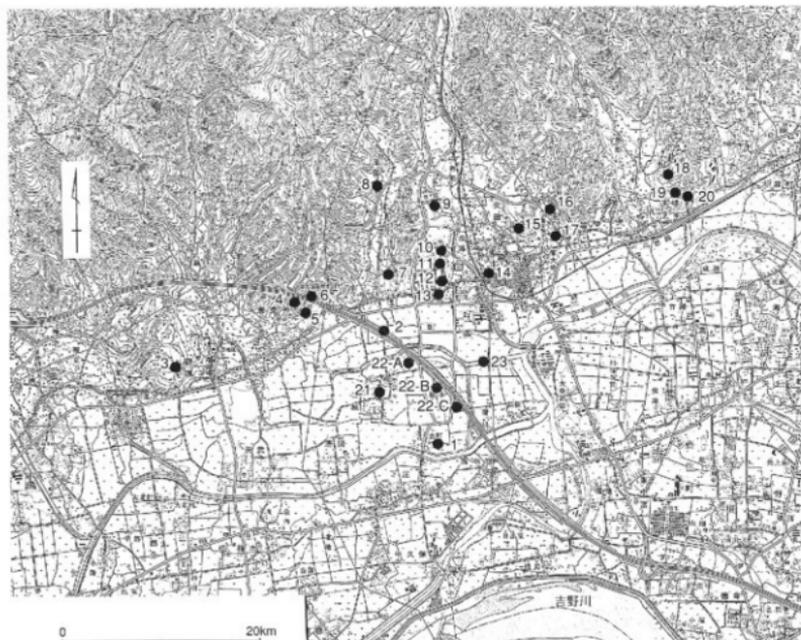
弥生時代の遺跡としては、前期に関しては上記の黒谷川郡頭遺跡から突帯文土器とともに前期の壺形土器、甕形土器が土坑状遺構を伴い出土している。この時期の本遺跡は土坑状遺構以外確認されておらず、遺跡の広がりは狭小である。

また、中期に関してはまったく遺構ならびに遺物は検出されていない。中期の遺物としては、近年調査により確認された板野町山下に所在する大西山遺跡⁷⁾が、唯一挙げられる。本遺跡は阿讃山脈南に延びた尾根先端部及び斜面上に位置し、標高20m～40mに位置する。採集遺物は石畿が主体を占め、石槍および楔状石器等もみられる。

次に後期に関しては、吉野川北岸下流域最大規模の黒谷川郡頭遺跡⁸⁾が挙げられる。本遺跡は旧吉野川に面し、標高約1m前後の極めて低位部に位置し、存続時期は主に後期中葉から古墳時代初頭にわたる。最大の特徴は朱の精製と搬出を目的とした生産並びに交易的性格を有する集落遺跡と考えられる点であり、また祭祀面においても直弧文につながると思われる弧帯文の線刻された土器も多数出土しており、弥生時代の流通構造または精神構造解明に重要な意義を持っている。

古墳時代は、鳴門市から連綿と続く阿讃山脈南麓に形成されている南に派生した尾根線上の一角を占地し、前期から後期にかけて数多くの古墳が構築されており、崩壊したのも含め約50基が確認されている。

前期に関しては、まず阿王塚古墳が挙げられる。本古墳は南に延びた尾根線中腹の亀山神社境内に存在していることが伝えられている。構造自体は積石塚で直径20m前後の円墳であり、主体部は箱式石棺である。副葬品では面文帯神獸鏡2面、鉄剣5振、鉄畿1本が出土している。



- | | | | |
|--------------|-----------|-----------|-------------------|
| 1 古町遺跡 | 7 平山古墳 | 13 大塚古墳 | 19 愛宕山古墳 |
| 2 黒谷川宮ノ前遺跡 | 8 蔵佐谷瓦葺塚 | 14 郡頭駅推定地 | 20 諏訪神社古墳 |
| 3 平山遺跡 | 9 吹田古墳群 | 15 阿王塚古墳 | 21 板西城跡 |
| 4 蓮華谷古墳群 (Ⅰ) | 10 かんぞう寺跡 | 16 大西山遺跡 | 22 古城遺跡 (A・B・C地点) |
| 5 蓮華池遺跡 (Ⅰ) | 11 鶴崇山古墳 | 17 金光明院寺跡 | 23 黒谷川郡頭遺跡 |
| 6 蓮華谷古墳群 (Ⅱ) | 12 岡宮神社古墳 | 18 大唐園寺跡 | |

第4図 古町遺跡周辺の遺跡分布図

次に、愛宕山古墳は板野町川端の南に延びた尾根の先端部に構築された全長65mの前方後円墳である。前方部の長さは44m、後円部の直径は21mであり、墳丘には葺石と円筒埴輪を伴っている。主体部には結晶片岩割石により、小口積の壘穴式石室、全長6m、幅1.1m高さ1.2mが構築されており、副葬品では銅鏃20点をはじめ短甲片・鉄刀片・鉄鏃・碧玉製管玉・ガラス玉などが出土している。

また、板野町犬伏に所在する蓮華谷古墳群 (Ⅱ) の2号墳は径8m~10mを測る円墳で、主体部は復元長3.3m、幅0.40m~0.50mを測る割竹形木棺が、棺床の形状から復元されている。出土遺物は棺内から仿製四獣形鏡1・鉄斧1・鉄剣1・ヒスイ製勾玉1・管玉11、棺外からは鉄剣1、また北側小口部からは完形の土師器広口壺が出土している。時期的には、出土遺物などから3世紀末の年代が与えられている。⁹¹

中期古墳は上記の蓮華谷古墳群 (Ⅱ) の西尾根上で検出された蓮華谷古墳群 (Ⅰ) の1号墳が挙げられる。本古墳は径12mを測る円墳で、一部に葺石が確認され、主体部は長さ3.3m、幅0.45mを測る刳

式木棺が考えられている。出土遺物は棺内より鉄剣1・刀子1が、棺外からは鉄剣1が出土し、また攪乱層からは鉄鏃2・鉄鎌1が出土している。本古墳の時期は出土遺物などから古墳時代中期前半（5世紀前半）の年代が与えられている。¹⁰

後期古墳の代表としては、大寺所在の大塚古墳（消滅）が挙げられる。本古墳は円墳で長さ6.7m・幅1.8m・高さ1.7mの規模を有した両袖式の石室を有し、副葬品では仿製鏡1面をはじめ金環・鉄剣・鉄斧および須恵器の皮袋形埴瓶・須恵器蓋杯・高杯・台付壺など豊富な遺物が出土している。

また、前記の蓮華谷古墳群(Ⅱ)では6世紀後半代の横穴式石室を有する円墳が5基検出されている。

奈良時代から平安時代にかけては、郡頭駅（推定地）周辺に多くの寺院が建立していたと考えられ、金光明寺廃寺・かんぞう寺廃寺からは平安時代に属する均整唐草文軒平瓦が出土し、また大唐国寺廃寺・地藏寺周辺からも平安時代の瓦が出土している。そのほか平安時代の末法思想を反映した瓦経が犬伏の蔵佐谷経塚から出土しており、天仁2年（1109）銘が見られる。当該時期は「和名抄」では板野郡十郷に含まれ、当地域を田上郷あるいは高野郷に比定する考えもある。

現在の板野町大寺周辺は、律令体制下の郡の役所である「郡衙」の有力な候補地と考えられている。加えて、延喜式に記載される南海道の「郡頭駅」も、板野町大寺に「郡頭」の名字が残ることを根拠に、その近辺に推定されてきた。また、黒谷川宮ノ前遺跡では、平安時代中期から後期の遺構・遺物が検出されている。

中世の当該地域は鎌倉時代初期においては青蓮院門跡を領家とした荘園、板西荘に含まれていたと考えられ、正応2年（1289）2月には地頭として小笠原泰清（小早川家文書の小早川政影譲状）、(同書、元応2年（1320）の関東下知状）の名前が知られる。

荘園については当初は隣接する上板町の一部を含めた形で成立していたが、後に板西上荘と板西下荘に分割されている。当該地域の伏伏地区は板西下荘に含まれていたと考えられている。

中世の遺跡としては、調査地点より南に約200mの所に板西城が所在する。本遺跡の成立時期については十分な資料を見いだせないが、「古城踏検記」・「城跡記」には板西城主、赤沢信濃守の名がみられ、戦国末期の天正10年（1582）には赤沢宗伝が長宗我部元親との合戦で敗れたことが記されている。その板西城との関連が考えられる古城遺跡が、黒谷川の南に所在する。平安時代より広大な荘園（板西荘）が営まれた地域である。

また、その後中世における城としては川端城・大寺城・矢武城などが挙げられるが、近年調査された平野部においては13世紀～15世紀前後の区画溝を伴った屋敷地が各所で調査されている。¹¹ しかしながらその後、現在に至るまで当該地域の平野部においては水田等の耕作地として利用されていたと考えられ、微高地上に点在する集落以外、運補とした集落の存続はみられなくなる。また宮ノ前、古城両遺跡では、近世以降の水田跡が多数検出されている。

(注)

- 1) 現鳴門市大麻町大谷字石園に比定されている。
- 2) 早淵隆人「古野川下流域における条里地割の継続性について—黒谷川宮ノ前遺跡に見られる区画溝を中心として—」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2』1990
- 3) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化 3』雄山閣 1976
- 4) 『光勝院寺内遺跡』徳島県教育委員会 1984

- 5) 板野郡山下所在の「大西山遺跡」が挙げられる。
- 6) 『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』 徳島県教育委員会 1984、『黒谷川郡頭遺跡第Ⅳ次調査現地説明会資料』同 1990、『黒谷川郡頭遺跡第Ⅳ次調査現地説明会資料』 同 1993
- 7) 高橋政則・村岡重良「板野郡大西山遺跡出土の石器」『徳島考古 第2号』 徳島考古学研究グループ 1985
- 8) 『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』 徳島県教育委員会 1986、『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』 同 1987、『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・Ⅳ』 同 1989、『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』 同 1990
- 9) 「運華谷古墳群(Ⅱ)」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2・4』 徳島県埋蔵文化財センター 1991・1993
- 10) 「運華谷古墳群(Ⅰ)」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 4』 徳島県埋蔵文化財センター 1993
- 11) 「古城遺跡(C) 地点」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2・4』 徳島県埋蔵文化財センター 1991・1993
『宮ノ前遺跡現地説明会資料』徳島県教育委員会 1990

(参考文献)

- 菅原 康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』 徳島県教育委員会 1987
 大西 浩正『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』 徳島県教育委員会 1990
 須崎 一幸「運華谷古墳群(Ⅱ)・運華谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第4集』
 徳島県埋蔵文化財センター 1993
 早河 隆人「黒谷川宮ノ前遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第9集』 徳島県埋蔵文化財センター 1994
 原 芳伸「古城遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第8集』 徳島県埋蔵文化財センター 1994
 板野町史編纂委員会『板野町史』 板野町 1972
 菅原 康夫『日本の古代遺跡37 徳島』 保育社 1988
 大羽 利夫・岡山真智子『徳島の遺跡散歩』 徳島市立図書館 1985
 服部 昌之『律令国家の歴史地理学的研究』 大明同 1983
 服部 昌之『阿波国』『古代日本の交通路』 1978
 中川 裏三『徳島の自然・地質2』 徳島市民双書・15 1981
 『角川日本地名大辞典36 徳島県』 1986



Ⅲ 調 査 成 果

第 1 次調査（2000年度調査）・調査成果

1. 本章は、古町遺跡の第1次調査（2000年度調査）の発掘調査報告である。
2. 本章の遺構番号・遺物番号は第1次調査区のための独立した通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
よって、第2次調査（2001年度調査）の報告は、次の章にて別に記述する。

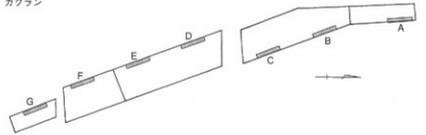
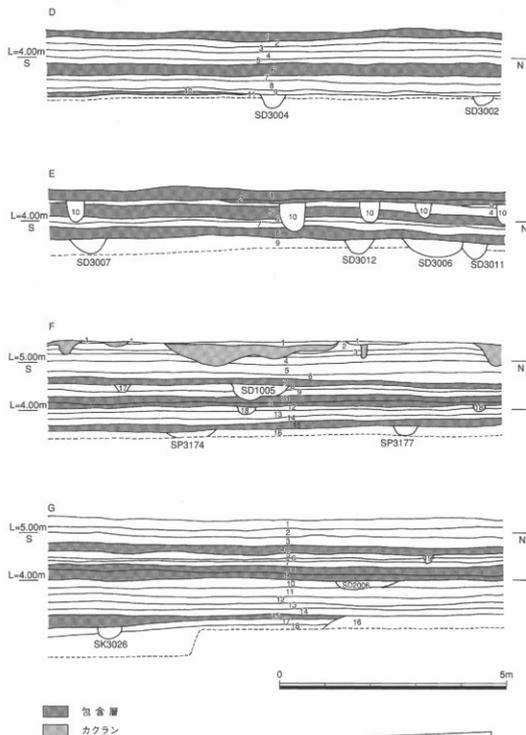
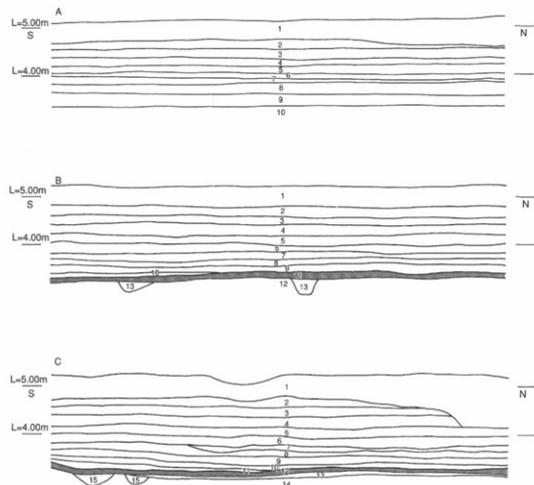
1 基本層序

本遺跡は阿讃山脈の平野部、宮川内谷川と旧吉野川、黒谷川により形成された氾濫源の低湿地にある、微高地上に位置している。それで、礫を含まない粘性砂質土が安定して平行堆積している。

地表面下約1.0m下方に16世紀頃の遺物包含層（第1包含層）があり、土師器、陶器、杯、鉢、釜、紡錘状土錘、鉄器等の遺物を多く含んでいる。この遺物包含層は、層厚は約20cmで安定している。その下が室町時代の遺構面である。

地表面下約1.2m下方には、13世紀頃の遺物包含層（第2包含層、層厚は約20~30cm）が存在し、その下が鎌倉時代の遺構面である。この第2遺構面上からは土師器、須恵器、瓦質土器、黒色土器、陶磁器、土錘、鉄器等が出土した。

地表面下約1.6m下方には、9世紀頃の遺物包含層（第3包含層）が存在し、この層は特に多くの遺物を含んでいる。その下が平安時代の遺構面であるが、この第3遺構面上からは土師器、赤色塗彩土器、須恵器、緑軸陶器、灰軸陶器、黒色土器等が出土している。なお、調査区北方に行くにつれ全体の層位が下がる傾向がある。



- A**
- 耕作土
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物・鉄分を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物・鉄分を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 鉄分を少々含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
 - 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト

- B**
- 耕作土
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物・鉄分を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物・鉄分を少々含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
 - 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 炭化物を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - 灰青褐色 10YR 4/2 シルト 遺物・炭化物を多く含む
 - にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 6/4 シルト

- C**
- 耕作土
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物・鉄分を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物・鉄分を少々含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - 黄褐色 2.5Y 5/3 粘質土
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 粘質土 遺物・炭化物を多く含む
 - 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト 大きめの遺物、炭化物を多く含む
 - にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 6/4 シルト

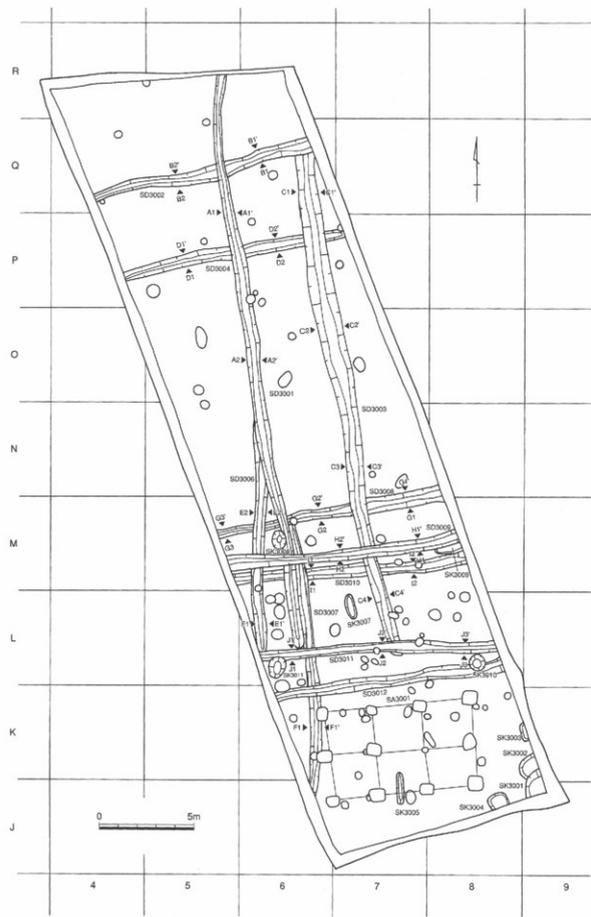
- D**
- にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト 炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 - 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト

- E**
- にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 炭化物を含む
 - 褐色 7.5YR 4/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 遺物・炭化物を含む
 - 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/1 粘質土 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト 遺物・炭化物を含む

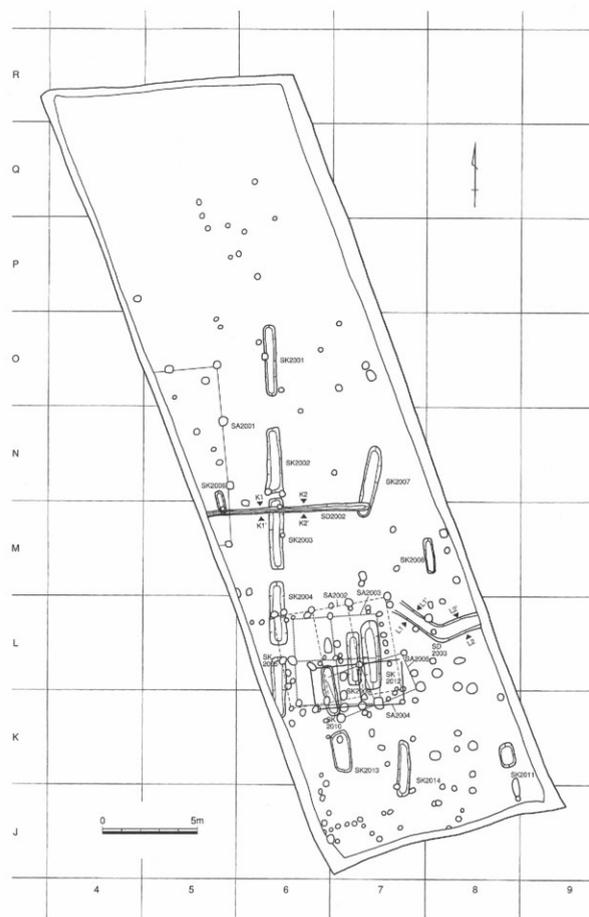
- F**
- 耕作土
 - 灰オリーブ色 5Y 6/2 シルト
 - 暗灰褐色 2.5Y 5/2 シルト
 - 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト 炭化物を含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 6/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 粘質土 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 炭化物を少々含む
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 炭化物を少々含む
 - 暗褐色 10YR 3/3 粘質土 炭化物を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト 遺物を含む

- G**
- 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト 炭化物を含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 遺物・炭化物を含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 6/3 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 粘質土 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 遺物・炭化物を含む
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 炭化物を少々含む
 - にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 炭化物を少々含む
 - 暗褐色 10YR 3/3 粘質土 炭化物を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト 炭化物を少々含む
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - 暗灰色 10YR 5/1 粘質土
 - 褐色 10YR 4/4 シルト
 - にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト 遺物を含む

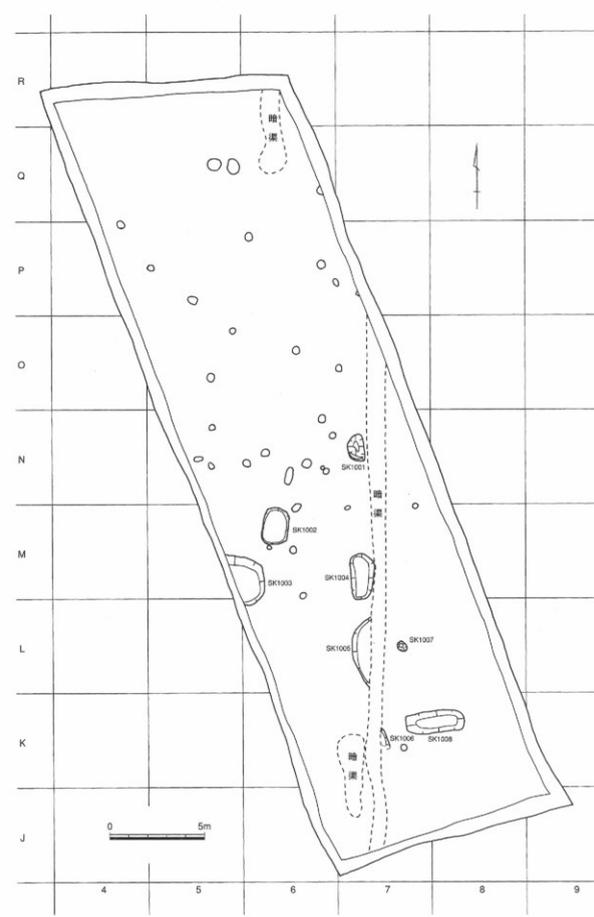
第5図 第1次（2000年度）調査区 基本層序図



第6図 第1次(2000年度)調査区 第3遺構面遺構配置図



第7図 第1次(2000年度)調査区 第2遺構面遺構配置図



第8図 第1次(2000年度)調査区 第1遺構面遺構配置図

第1次調査（2000年度調査）・調査成果

(1) 奈良・平安時代の遺構と遺物

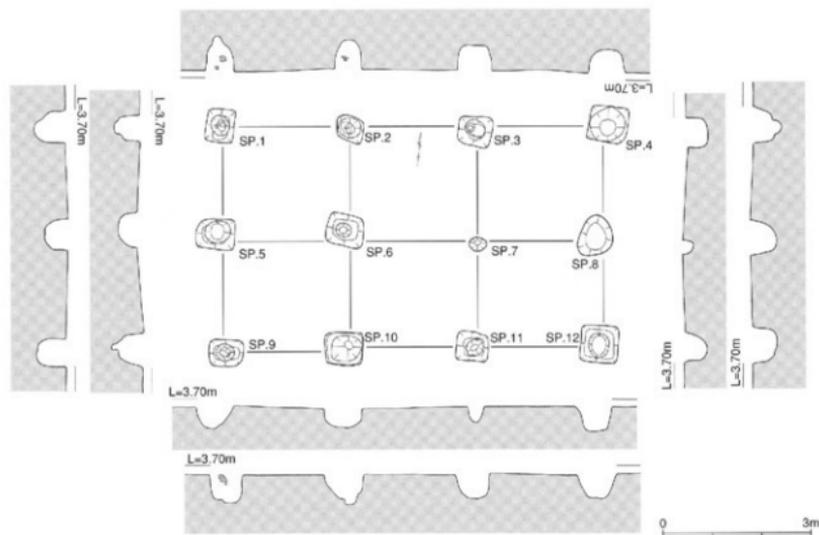
掘立柱建物

掘立柱建物 SA3001（第9図）

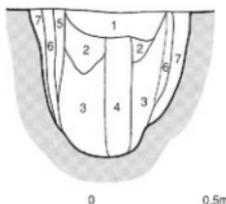
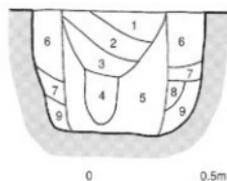
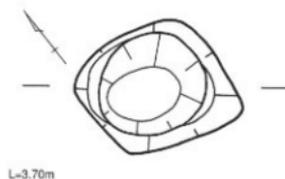
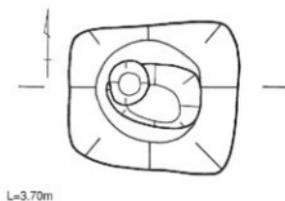
00年度調査区の南部、J-6・7・8、K-6・7・8グリッドで検出された比較的大型の掘立柱建物であり、12基の柱穴から構成されている。このSAは遺構面の検出段階でとらえたものであり、規模は桁行3間×梁間2間（7.7m×4.8m）、床面積36.96㎡を測り棟方向はN-82°-Eであるが、さらに調査区南側、西側へ延伸する可能性もある。柱穴の平面形は隅丸方形、隅丸長方形、楕円形を呈し、直径36～80cm、深さ30～74cmを測り、埋土は主に黄褐色シルト、灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、暗褐色シルト、オリーブ褐色シルト等を基調としている。

出土遺物は、柱穴 SP3046、SP3050内部からは土師器、SP3053内部からは土師器、須恵器、黒色土器A類、SP3057、SP3060、SP3066、SP3068内部からは土師器、SP3085内部からは土師器、須恵器等が出土している。出土遺物の時代から、およそ9～10世紀頃のものではないかと思われる。出土遺物は比較的数量が多く、実測できたものも多かった。

いくつかの柱穴は構造が複雑で、以下に特徴的な4基の柱穴を図示する。



第9図 SA3001実測図



- | | | | |
|-----------|----------|-----|--------------|
| 1. にぶい黄褐色 | 10YR 5/3 | シルト | 炭化物含む |
| 2. にぶい黄褐色 | 10YR 4/3 | シルト | 炭化物含む |
| 3. 灰黄褐色 | 10YR 4/2 | シルト | 炭化物・土器含む |
| 4. 灰黄褐色 | 10YR 6/2 | 粘質土 | 遺物・炭化物含む |
| 5. 褐色 | 10YR 4/4 | シルト | 2~3cm大の炭化物含む |
| 6. 黄色 | 10YR 4/4 | シルト | 遺物炭化物含む |
| 7. 暗灰黄色 | 2.5Y 5/2 | シルト | |
| 8. にぶい黄褐色 | 10YR 4/3 | シルト | |
| 9. 暗褐色 | 10YR 3/4 | シルト | |

- | | | | |
|-----------|----------|-----|----------|
| 1. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | |
| 2. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | 炭化物微量を含む |
| 3. オリーブ褐色 | 2.5Y 4/3 | シルト | |
| 4. 黄褐色 | 10YR 4/3 | シルト | |
| 5. 灰黄褐色 | 10YR 5/2 | シルト | 炭化物含む |
| 6. にぶい黄褐色 | 10YR 5/3 | シルト | |
| 7. にぶい黄褐色 | 10YR 4/3 | シルト | 炭化物含む |

第10図 SP3050実測図

第11図 SP3053実測図

柱穴 SP3050 (第10図)

長軸70cm, 短軸60cm, 深さ50cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。ピットの形態は、隅丸方形のピットの中にさらに楕円形のピットが重なるような、二重構造的なものになっている。構造的には、地層の堆積状況より、隅丸方形のピットよりも中心の楕円形のピットの方が後から掘られたものだと見える。このことは、その他の二重構造をもつ柱穴においても同じことがいえる。

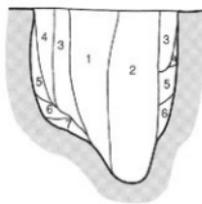
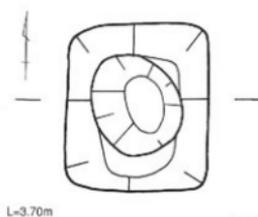
埋土は炭化物を含有した褐色シルト、にぶい黄褐色粘質土、にぶい黄褐色シルト、暗褐色シルト、暗灰黄シルト等であり、全部で8層に分層できる。

内部より土師器、須恵器等を出土しているが、実測可能なものは土師器椀と土師器皿の2点のみであった。

柱穴 SP3053 (第11図)

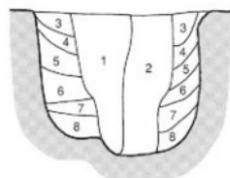
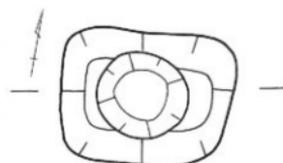
長軸54cm, 短軸52cm, 深さ36cmを測り、平面隅丸方形を呈する。SP3050と同様に、隅丸方形のピットの中にさらに楕円形のピットが重なる二重構造を呈する。

埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト、炭化物を含むにぶい黄褐色のシルト、黄褐色シルト、オリーブ褐色シルト等であり、中心部分が4層、周辺部分が3層の全部で7層に分層できる。内部より土師器、須恵器、黒色土器等、多くの遺物を出土している。実測可能な遺物も多く、また土師器台付盤のような珍しい器種も出土している。



- | | | | |
|-----------|----------|-----|-------------|
| 1. にぶい黄褐色 | 10YR 5/3 | シルト | |
| 2. 灰黄褐色 | 10YR 5/2 | シルト | |
| 3. オリーブ褐色 | 2.5Y 4/3 | シルト | 炭化物・土器片少量含む |
| 4. 暗灰黄色 | 2.5Y 5/2 | シルト | 炭化物少量含む |
| 5. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | |
| 6. 灰黄色 | 2.5Y 6/2 | シルト | 炭化物少量含む |
| 7. にぶい黄色 | 2.5Y 6/3 | シルト | |

第12図 SP3057実測図



- | | | | |
|-----------|----------|-----|-----------|
| 1. 灰黄褐色 | 10YR 4/2 | シルト | 土器片・炭化物含む |
| 2. にぶい黄褐色 | 10YR 5/3 | シルト | |
| 3. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | 炭化物微量を含む |
| 4. にぶい黄褐色 | 10YR 4/3 | シルト | 炭化物少量含む |
| 5. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | 炭化物少量含む |
| 6. にぶい黄褐色 | 2.5Y 4/3 | シルト | |
| 7. オリーブ褐色 | 2.5Y 4/4 | シルト | |
| 8. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | |

第13図 SP3068実測図

柱穴 SP3057 (第12図)

長軸68cm, 短軸56cm, 深さ38cmを測り、平面隅丸長方形を呈する。前述のピットと同様、中心に楕円のピットが重なる二重構造である。このピットは掘立柱建物の、北西隅の柱になる。

埴土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトの2層が中心部で、回りは炭化物を含むオリーブ褐色シルト、暗灰黄色シルト等の7層からなり、内部より土師器を出土している。実測可能なものは土師器杯の1点のみであった。

柱穴 SP3068 (第13図)

長軸70cm, 短軸54cm, 深さ36cmを測り、平面隅丸長方形を呈する。このピットは掘立柱建物の、南西隅の柱になる。

埴土は中心部が暗灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色シルトの2層に分層でき、そこには石が入っている。その回りを囲うようにオリーブ褐色シルト、黄褐色シルト等が7層に分層できる。上記のピットと同様、中心に楕円のピットが重なる二重構造である。内部より土師器、須恵器、黒色土器を出土しているが、実測可能なものは土師器甕、土師器製埴土器、須恵器高台付杯であった。

出土遺物（第14図）

SA3001の各柱穴より出土の遺物をまとめて紹介する。

1と2はSP3046の出土遺物である。

1は土師器皿である。内外面回転ナデ調整で、口縁部外上方に内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。内外面に赤色塗彩を施している。2は土師器椀である。口縁部僅かに内彎ぎみに立ち上がり、端部やや外反し丸くおさめる。

3、4はSP3050の出土遺物である。

3は土師器皿である。体部外上方にゆるやかに立ち上がる。内外面は回転台ナデ調整で、底部は回転ヘラ切後ナデである。4は土師器椀である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部やや外反し丸くおさめる。

5～13はSP3053の出土遺物である。

5、6、8は土師器皿である。いずれも口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。5の底部は回転ヘラ切後ナデであり、8は内外面に、6は内面のみに赤色塗彩を施している。底部は回転ヘラ切である。7は土師器椀である。体部やや内彎ぎみに立ち上がり、断面平行四辺形状のやや高めの高台を貼り付けている。9は土師器甕である。口縁部外上方に短く立ち上がり、端部を上方につまみ上げる。内面はハケ調整である。13は土師器台付盤である。圓台部「ハ」の字状に開き、端部方形におさめる。断面斜方形の、鐙状部がある。内面はハケ調整が施されている。11は須恵器杯である。口縁端部がやや外反する。12は須恵器椀である。削り出しの高台がつく。10は黒色土器A類椀である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部やや外反する。内面横方向へのミガキで、内面のみ黒色である。

14はSP3057の出土遺物である。

14は土師器の杯で、口径は14.0cmを測る。口縁部若干内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。

15と16はSP3060の出土遺物である。

15は土師器皿である。口縁端部を外反させ、丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。16は土師器羽釜である。口縁部内彎ぎみに短く立ち上がり、端部断面は方形を呈する。口縁直下に断面方形の鐙がめぐる。

17～20はSP3066の出土遺物である。

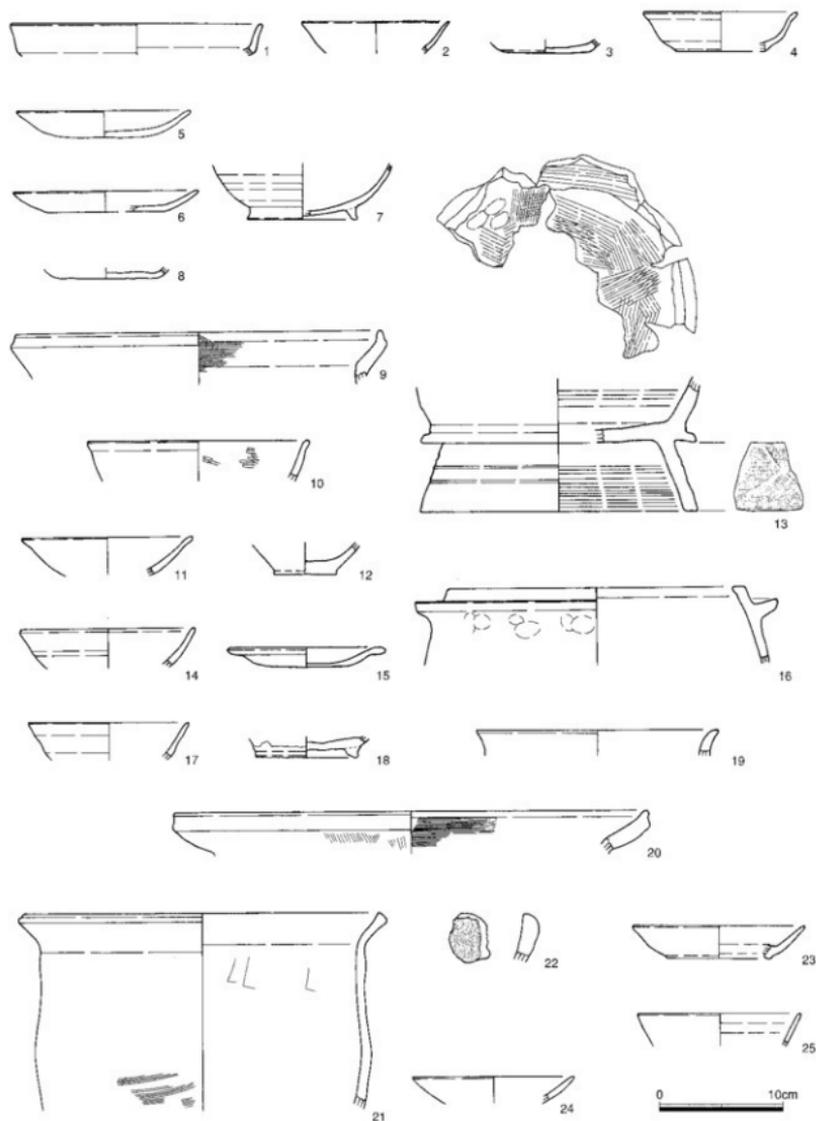
17は土師器杯で、口縁端部が直線的に伸び端部を丸くおさめる。18は土師器高台付杯である。体部直線的に伸び、断面方形の厚めの高台がつく。底部は回転ヘラ切である。19、20は土師器甕である。20は口縁部短く立ち上がり、端部方形で上方につまみ上げる。内外面ハケ調整である。19は口縁部外反して立ち上がり、端部やや尖りぎみに丸くおさめる。

21～23はSP3068の出土遺物である。

21は土師器甕である。口径は28.8cmを測り、口縁部短く外上方に立ち上がり端部方形で僅かに上方につまみ上げる。外面はハケ調整で、内面は板ナデである。22は土師器製塩土器である。内面に布目痕が見られる。23は須恵器高台付杯である。口縁端部僅かに外反し、丸くおさめる。断面方形の高台がつく。

24と25はSP3085の出土遺物である。

24は土師器椀である。口縁端部ゆるやかに直線的に伸び、端部丸くおさめる。内外面回転台ナデである。25は須恵器杯である。同じく口縁端部直線的に伸び、端部丸くおさめる。



第14图 SA3001各柱穴出土遺物実測図

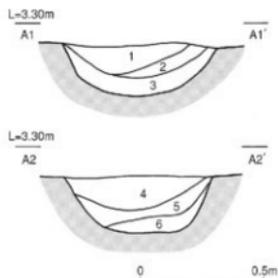
溝

溝 SD3001 (第15図)

00年度調査区の第3遺構面中央部に位置する、南北方向の溝である。一部が柱穴に切られるものの残存長31m、幅50~90cm、深さ20~22cmを測る。断面は逆台形状であり、主軸方向はN-10°-Wを示す。中央部でSD3006、SD3007と合流する。底部の標高より、僅かに北から南に傾斜している。埋土はマンガンを少量含んだ灰黄褐色シルト、マンガンをやや多く含む灰黄褐色シルト、マンガンを多く含むにふい黄褐色シルトの3層である。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、陶磁器、土製品、銅鏡の一部等である。

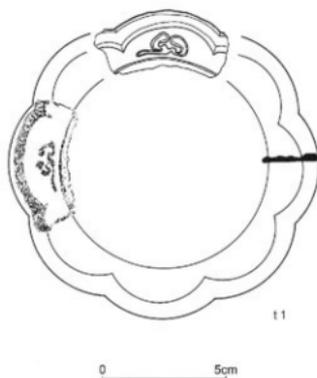
出土遺物 (第16図)

26は土師器皿である。口縁部ゆるやかに立ち上がり、内外面回転台ナデ調整である。27は土師器鍋である。口縁部外方に立ち上がり、端部方形状で僅かに上下に拡張する。28~31は土師質の紡錘状土鍾である。総じて長さ3.3~5.5cm、穿孔径は0.4cmほどである。32は土師質の有孔土鍾である。穿孔径は0.4cmほどである。

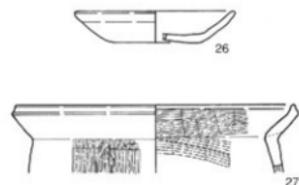


1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
マンガンを多く含む、炭化物含む
2. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
マンガンを1層よりやや多い
3. にふい黄褐色 10YR 5/4 シルト
2層よりマンガンの多い
4. にふい黄褐色 10YR 5/3 シルト 土器含む
5. にふい黄褐色 10YR 5/3 シルト
マンガンをやや多い
6. にふい黄褐色 10YR 5/4 シルト
5層よりマンガンの多い

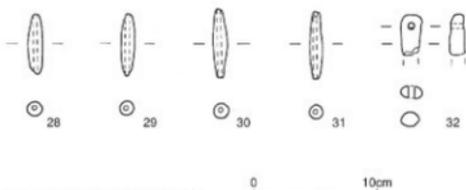
第15図 SD3001土層断面実測図

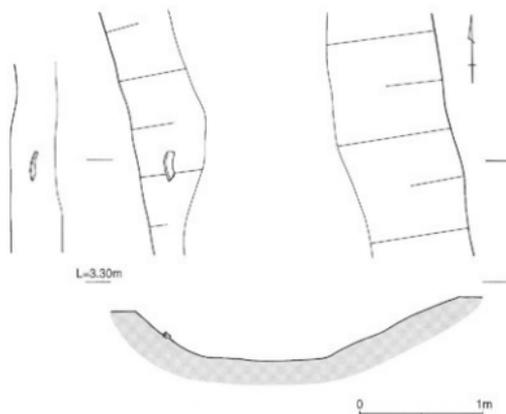


第16図 SD3001銅鏡小片実測図



第17図 SD3001出土遺物実測図





第18図 SD3001銅鏡小片出土状況図

銅鏡小片について

第16図は銅鏡の小片t1である。SD3001のほぼ中央部、N-6グリッドの、溝の中央より西側寄りの地点から出土した。第18図は、その出土状況図である。

残存部分の長さは5.4cm、幅2.2cm、厚さ3.0mm、重量10.72gであった。銅鏡の形態は、外周に円弧を連ねた花形の鏡で、一般的に数が多いとされている八花鏡である。この八花鏡は唐式鏡の一つであり、それは日本に輸入された唐鏡や、それを原型として日本で铸造された鏡、唐鏡を模して日本で作った鏡

など、唐鏡と同じ型式の鏡すべてが含まれるとされる。

銅鏡小片の面径は約12cm、外縁の断面形は低い台形を呈し、厚さは3.0mmである。中央部分が欠損しており不明であるが、中央には双鳥紋があったと思われる。おそらく、双鸞繫綬雀銜穂鏡であると考えられる。時代的には、8世紀から9世紀頃のものであろうと思われるが、唐式鏡は飛鳥、奈良時代を代表するものなので、もう少し古いものである可能性もある。

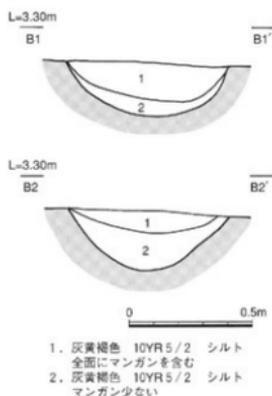
今回の銅鏡小片は溝の中から出土しているため、詳しいことは不明であるが使用されていた鏡が何らかの理由で廃棄され、捨てられた可能性も考えられる。当時の人々のくらしを考察する上で、貴重な遺物であろうと思われる。(カラー図版1 参照)

溝 SD3002 (第19図)

調査区の第3遺構面北部に位置する、東西方向の溝である。残存長12m、幅50~90cm、深さ22~24cmを測る。断面はレンズ状であり、両端とも調査区外にかかる。埋土はマンガンを含む灰黄褐色シルトと、マンガンの少ない灰黄褐色シルトの2層である。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器等であるが、緑釉陶器以外は実測可能な遺物はなかった。

出土遺物 (第20図)

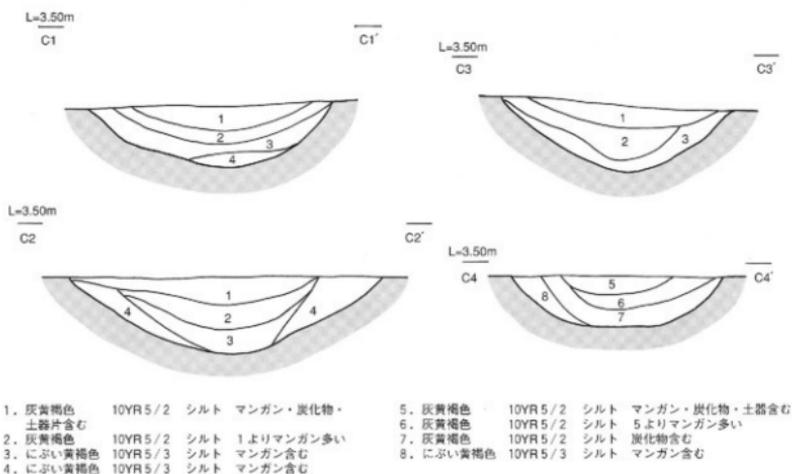
33は緑釉陶器椀である。口縁端部を外反させ、端部を丸くおさめている。内外面にうすい黄緑色の釉がかかる。



第19図 SD3002土層断面実測図



第20図 SD3002出土遺物実測図



第21図 SD3003土層断面実測図

0 0.5m

溝 SD3003 (第21図)

調査区第3遺構面中央部に位置する、SD3001とほぼ平行に並ぶ南北方向の溝である。残存長29m、幅50～120cm、深さ20cmを測る。断面はレンズ状である。埋土はマンガン・炭化物を含んだ灰黄褐色シルト、マンガンをよく含む灰黄褐色シルト、炭化物を含む灰黄褐色シルト、マンガンを含むにぶい黄褐色シルトの4層に分かれる。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、陶器、土鍾、鉄器等である。実測可能な遺物が多かった。

出土遺物 (第22図)

34～36は土師器杯である。口縁部外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。35と36は端部僅かに外反する。

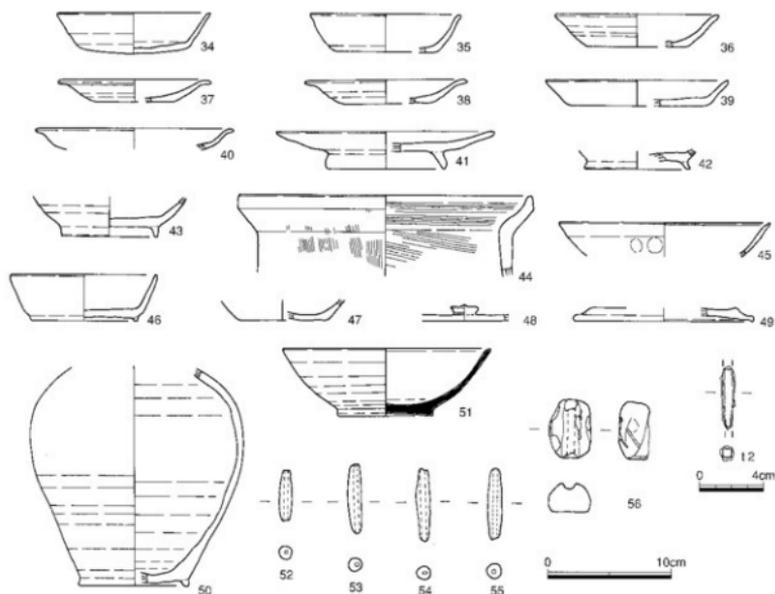
37～40は土師器皿である。37は口縁部外上方にゆるやかに立ち上がり、端部は僅かに外反する。底部は回転ヘラ切後ナデである。38は同様に口縁部浅く立ち上がり、端部僅かに外反する。底部は回転ヘラ切である。40もよく似ており、端部わずかに外反する。41は土師器高台付皿である。口縁部外上方にゆるやかに立ち上がり端部丸くおさめる。「ハ」の字形で断面U字形の高めの高台が貼り付けられている。

42, 43は土師器碗である。43は体部若干内彎ぎみに立ち上がり、断面U字形の細身の高台が貼り付けられている。内外面に赤色塗彩が施されている。42は体部直線的に立ち上がり、「ハ」の字形で断面U字形の細めの高台が貼り付けられている。内面は黒色である。

45は黒色土器A類椀である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部は尖りぎみである。

44は土師器甕である。口縁部外上方に短く立ち上がり、端部上方に僅かにつまみ上げ、方形におさめる。

47は須恵器杯である。体部直線的に立ち上がる。46は須恵器高台付杯である。口縁部外上方に立ち上がり、端部丸くおさめる。断面方形の低い高台がつく。48と49は、須恵器杯蓋である。49は口縁端部



第22図 SD3003出土遺物実測図

下方に拡張し、丸くおさめる。48は断面扁平な逆台形状のつまみがつく。

50は須恵器壺である。体部下半、直線的に立ち上がり肩部丸みをもつ。

51は緑釉陶器碗である。口縁部外上方に若干内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。削り出しの厚めの高台がつく。グレイみのオリブグレイの釉が内外面に施されている。

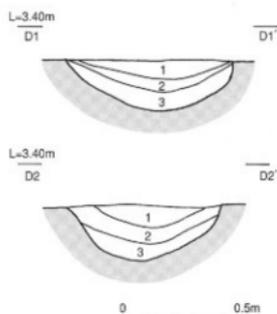
52, 53, 54, 55は土師質の紡錘状土錘である。穿孔径0.28~0.35cm程度を測る。56は土師質の有溝土錘である。t2は鉄器で、器種は釘である。長さ36.0mmほどである。

溝 SD3004 (第23図)

00年度調査区の第3遺構向北部に位置する、SD3002と平行する東西方向の溝である。残存長12m, 幅60~80cm, 深さ20~22cmを測る。断面はレンズ状であり、両端とも調査区外にかかる。埋土はマンガンを含む灰黄褐色シルト, マンガンの少ない灰黄褐色シルト, マンガンを含むいぶい黄褐色シルトの3層である。出土遺物は土師器, 須恵器であるが、いずれも細片ばかりで実測できる遺物はなかった。

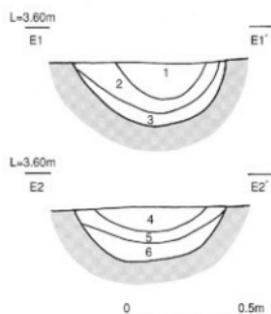
溝 SD3006 (第24図)

00年度調査区の第3遺構面中央部に位置する、南北方向の溝である。北端をSD3001によって切られ、南端は調査区外にかかる。残存長9.5m, 幅50~80cm, 深さ20~24cmを測る。断面はレンズ状であり、両端とも調査区外にかかる。埋土はマンガンを少し含むいぶい黄褐色シルト, 灰黄褐色シルト, マンガンを多く含む灰黄褐色シルトの3層である。出土遺物は土師器, 須恵器, 瓦質土器等であるが、いずれも細片ばかりで実測できる遺物はなかった。



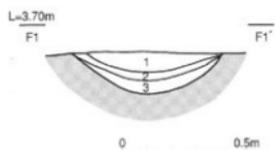
1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト 全面にマンガン含む
 2. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト マンガン少ない
 3. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 2よりマンガン少ない

第23図 SD3004土層断面実測図



1. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 土器片含む、マンガンうすく含む
 2. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト マンガンうすく含む
 3. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト 2よりマンガン多く含む
 4. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 5. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 6. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト

第24図 SD3006土層断面実測図



1. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 炭化物・土器片含む
 2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 3. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト

第25図 SD3007土層断面実測図

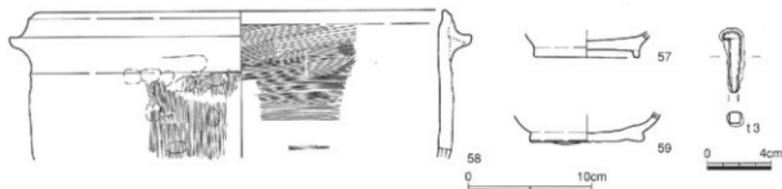
溝 SD3007 (第25図)

第3遺構面中央部に位置する、SD3001と沿うように走る南北方向の溝である。残存長17m、幅40～70cm、深さ16cmを測る。断面はレンズ状であり、北端はSD3001に切れ、南端は調査区外にかかる。埋土は炭化物を含んだにぶい黄褐色シルト、炭化物の少ない黄褐色シルト、灰黄褐色シルトの3層である。出土遺物は土師器、須恵器等である。

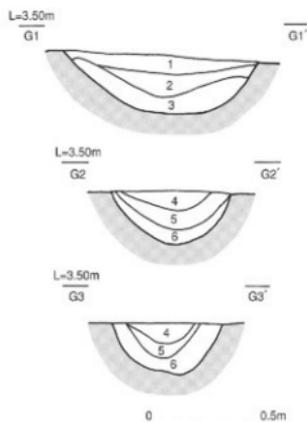
出土遺物 (第26図)

57は土師器碗である。体部外上方に直線的に立ち上がり、断面方形状の高台が貼り付けられている。58は土師器羽釜である。口縁部直立ぎみに短く立ち上がり、端部断面は尖りぎみにまとめる。その下に断面方形状の鐙がめぐる。内外面ともにハケ調整である。59は須恵器高台付杯である。体部内彎ぎみに立ち上がり、断面逆台形状の削り出し高台がつく。

t3は鉄器である。器種は釘であり、長さは37.0mmである。

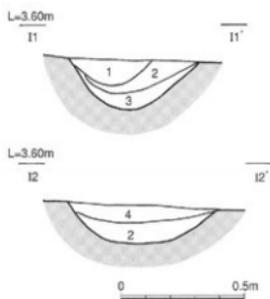


第26図 SD3007出土遺物実測図



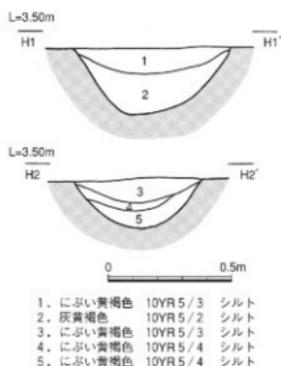
1. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 土跡を含む
 2. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 3. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 4. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 5. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 6. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト

第27図 SD3008土層断面実測図



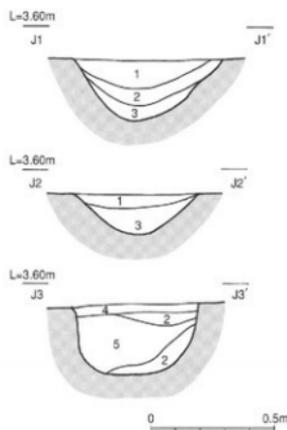
1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
マンガンがすく含む
炭化物含む
2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
3. にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト
4. 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト

第29図 SD3010土層断面実測図



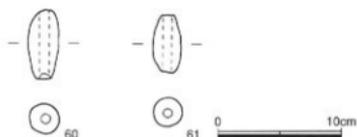
1. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 2. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 3. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 4. にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト
 5. にぶい黄褐色 10YR 5/4 シルト

第28図 SD3009土層断面実測図



1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 3. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
 4. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 5. 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト

第30図 SD3011土層断面実測図



第31図 SD3010, SD3011出土遺物実測図

溝 SD3008, SD3009 (第27・28図)

00年度調査区中央を東西に貫く、ほぼ平行な2条の溝である。その規模は、北側のSD3008が残存長12m、幅40～90cm、深さ20～24cmであり、南側のSD3009が残存長12.5m、幅50～70cm、深さ22～26cmを測る。2本の間隔は1.0～1.7mであり、僅かに東側が拡張している。断面は共に逆台形を呈し、底面標高は共に西端に比べ東端が、SD3008で14cm、SD3009で29cm低くなっている。埋土はにぶい黄褐色シルト、灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器等であるが、いずれも細片ばかりで実測できる遺物はなかった。

溝 SD3010 (第29図)

00年度調査区の第3遺構面中央部に位置する、東西方向の溝である。残存長12.5m、幅40～60cm、深さ16～20cmを測る。断面は逆台形状であり、両端は調査区外にかかる。埋土は炭化物、マンガンを含む灰黄褐色シルト、マンガンを含むにぶい黄褐色シルトの2層である。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器、土製品等である。

出土遺物 (第31図)

60は土師質の紡錘状土鍾である。穿孔径は0.8cmである。

溝 SD3011 (第30図)

00年度調査区の第3遺構面南部に位置する、東西方向の溝である。残存長12.5m、幅40～50cm、深さ16～30cmを測る。断面はU字形状であり、両端とも調査区外にかかる。埋土は炭化物を含んだ灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルトを中心とした4層である。出土遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、土製品等である。

出土遺物 (第31図)

61は土師質の紡錘状土鍾である。穿孔径は0.7cmである。

土坑

土坑 SK3001 (第32図)

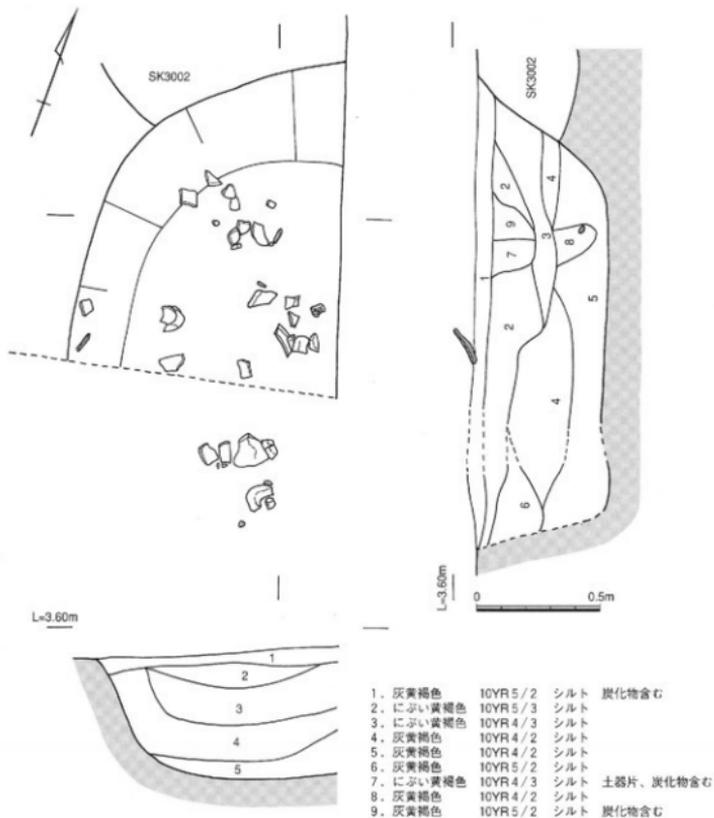
00年度調査区の南東部、J・9・K・9グリッドで検出された遺構である。長軸130cm、短軸110cm、深さ54cmを測り、平面形が半楕円形状を呈し東端は調査区外に続く。円形プランの一部が検出され、埋土上部からは多くの土器が出土しており、土坑墓と思われる。埋土は灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルトを基調としている。土師器、須恵器等が多く出土した。また、石帯も出土している。

出土遺物 (第33図)

62～66は土師器の杯である。62は外上方に直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめている。63は、底部が回転ヘラ切後ナデである。65は端部が僅かに外反している。内外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切後ナデである。62～65は内外面に赤色塗彩が、66は内面に赤色塗彩が施されている。

68～70は土師器の皿である。70は口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部僅かに外反する。内外面に赤色塗彩が施されている。67、69も同様に端部僅かに外反する。67は内面に赤色塗彩が施されている。68は端部外反せずに直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。71は土師器高台付杯である。(高台は貼付)

72、73は土師器の椀である。72は口縁部若干内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。73は体部若干内彎ぎみに立ち上がり、断面逆三角形の高台が貼り付けられている。74～76は土師器の甕である。76は口縁部短く立ち上がり、端部上方に僅かにつまみ上げ方形状に

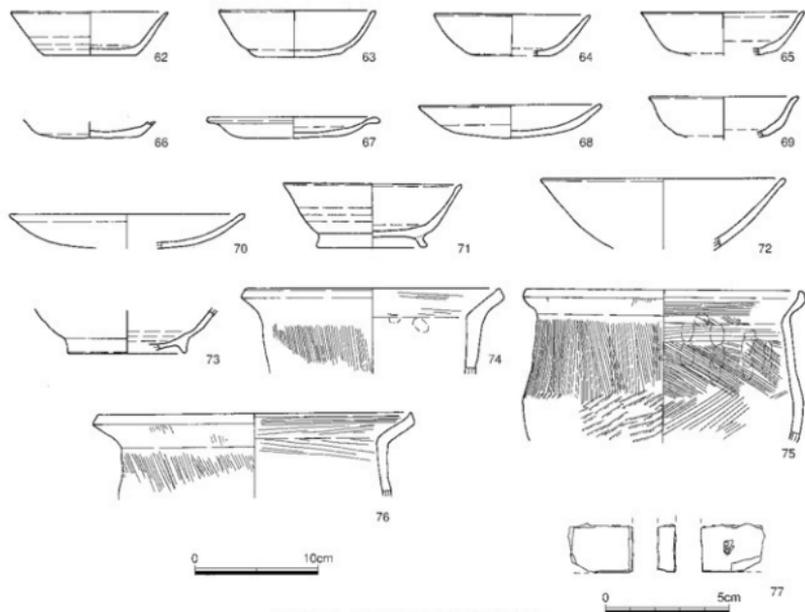


第32図 SK3001実測図

おさめる。内外面共にハケ後ナデ調整である。74, 75も同様に口縁部短く立ち上がり、端部上方につまみ上げる。内外面にハケ調整がある。

石帯について

77は石帯である。石帯は、腰帯具に取り付けた部品の一つである。出土した石帯は潜り穴方式と呼ばれるもので、二つの穴を開けてそれを石の内部でつなげるという方式である。形態は方形の巡方で、石の材質は石英片岩である。腰帯は役人の身分に関係するものであり、身分に応じてその材質、形や大きさが違うものであったらしい。石帯の石も、石の種類、サイズ等が色々あったようである。石は外鉄か潜り穴を銅・銀線と裏金具に括り付ける方法がとられていたらしい。今回の石帯の潜り穴方式は、技術の進歩によりなされた、比較的新しい装着方法であるようだ。時代的には、8～10世紀頃のものであると思われる。(カラー図版1 参照)



第33図 SK3001出土遺物実測図

土坑 SK3002 (第34図)

00年度調査区の南東部、K・8・9グリッドで検出された遺構である。長軸110cm、短軸86cm、深さ38cmを測り、平面形が半楕円形状を呈し、東端は調査区外に続く。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルトを基調としている。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器である。

出土遺物 (第37図)

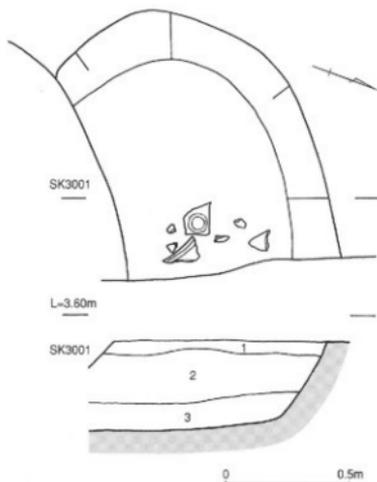
78は土師器の甕である。口縁部短く立ち上がり、端部僅かに上方につまみ上げる。内外向ハケ調整を施している。79は黒色土器A類椀である。体部内彎ぎみに立ち上がり、「ハ」の字形で断面U字形の、やや高めの高台が貼り付けられている。内面は幅2mmのミガキで、底部は回転ヘラ切である。

土坑 SK3003 (第35図)

00年度調査区の南東部、K・8・9グリッドで検出された遺構である。長軸96cm、短軸26cm、深さ40cmを測り、平面形が半楕円形状を呈し、東端は調査区外に続く。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルトを基調としている。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器等であるが、実測可能なものは2点のみである。

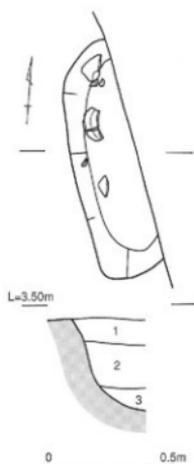
出土遺物 (第38図)

80は土師器の杯である。口縁端部が僅かに外反する。底部は回転ヘラ切である。81は緑釉陶器の椀である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。削り出しの高台がつく。あさい黄色の釉が内外面に施されている。



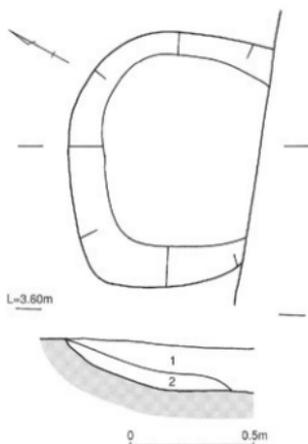
1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト 炭化物含む
 2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 3. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト

第34図 SK3002実測図



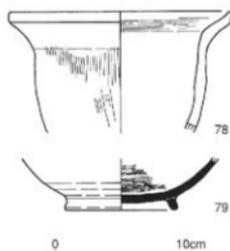
1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
 炭化物含む
 2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
 3. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト

第35図 SK3003実測図

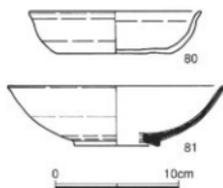


1. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 炭化物含む
 2. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト

第36図 SK3004実測図



第37図 SK3002出土遺物実測図



第38図 SK3003出土遺物実測図

土坑 SK3004 (第36図)

00年度調査区の南東部、J-8グリッドで検出された遺構である。長軸104cm、短軸74cm、深さ20cmを測り、平面形が半隅丸方形状を呈し、南端は調査区外に続く。埋土は炭化物を含むいぶい黄褐色シルトを基調としている。出土遺物は土師器、須恵器であるが、実測可能なものは1点のみである。

出土遺物 (第40図)

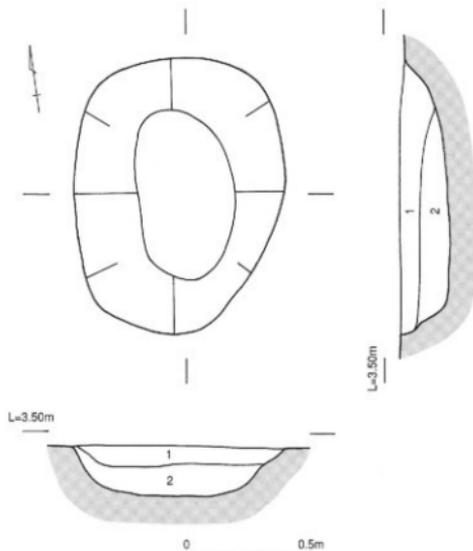
82は土師器の碗である。体部内彎ぎみに立ち上がり、断面U字形の高台が貼り付けられている。外面に赤色塗彩が施されている。

土坑 SK3011 (第39図)

00年度調査区の南西部、L-6グリッドで検出された遺構である。長軸114cm、短軸84cm、深さ20cmを測り、平面形が楕円形状を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト、炭化物を含むいぶい黄褐色シルトの2層である。出土遺物は土師器、須恵器であるが、実測可能なものは須恵器高台付杯のみであった。

出土遺物 (第41図)

83は須恵器高台付杯である。内外面とも回転ナデ調整である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや細身に丸くおさめる。断面方形の高台が貼り付けられている。



1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト 炭化物含む
2. いぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト 炭化物含む

第39図 SK3011実測図



第40図 SK3004出土遺物実測図



第41図 SK3011出土遺物実測図

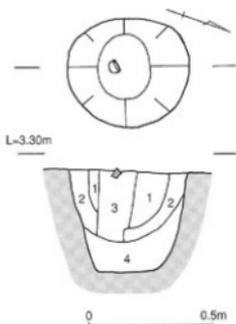
柱穴

柱穴 SP3002 (第42図)

00年度調査区の北東部、Q-6グリッドで検出された遺構である。長軸50cm、短軸46cm、深さ40cmを測り、平面形が円形を呈する。埋土はマンガンを含む灰黄褐色シルト、いぶい黄褐色シルトを基調とし、土師器、須恵器が出土している。

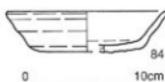
出土遺物 (第43図)

84は須恵器の杯である。内外面回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切である。口縁部は外上方に直線的

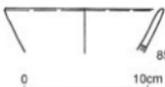


1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
全面にうすくマンガン含む
2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
3. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
土器含む
4. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト

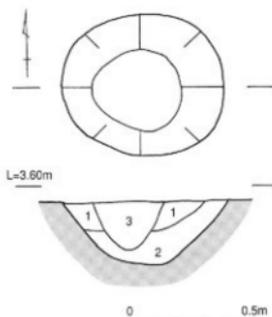
第42図 SP3002実測図



第43図 SP3002
出土遺物実測図

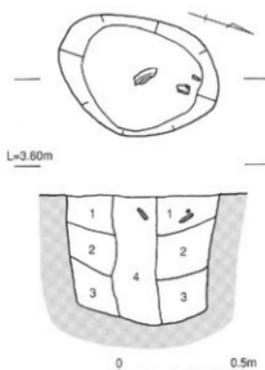


第44図 SP3033
出土遺物実測図



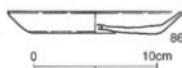
1. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
炭化物含む
2. 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
3. 橙灰色 10YR 5/1 シルト
炭化物含む

第45図 SP3033実測図



1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
炭化物含む
2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
炭化物含む
3. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
炭化物含む
4. 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト
炭化物・土器片含む
5. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
炭化物・土器片含む

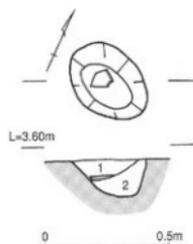
第46図 SP3035実測図



第47図 SP3035
出土遺物実測図



第48図 SP3048
出土遺物実測図



1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト

第49図 SP3048実測図

に立ち上がり、端部丸くおさめる。

柱穴 SP3033 (第45図)

00年度調査区の南東部、L-7・8グリッドで検出された遺構である。長軸66cm、短軸56cm、深さ26cmを測り、平面形が楕円形を呈する。埋土は炭化物を含むいぶい黄褐色シルト、黄褐色シルト、炭化物を含む褐色シルトの3層に分層でき、土師器が出土している。

出土遺物 (第44図)

85は土師器の杯である。内外面回転ナデ調整である。口縁部直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。

柱穴 SP3035 (第46図)

00年度調査区の中央部、L-6・7グリッドで検出された遺構である。長軸66cm、短軸50cm、深さ52cmを測り、平面形が楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト、炭化物を含むいぶい黄褐色シルトを基調としている。土師器、須恵器が出土しているが、実測可能なものは1点のみであった。

出土遺物 (第47図)

86は須恵器の皿である。口縁部ゆるやかに直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切後である。

柱穴 SP3048 (第49図)

00年度調査区の南東部、K-8グリッドで検出された遺構である。長軸36cm、短軸26cm、深さ16cmを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト、いぶい黄褐色シルトの2層に分層でき、須恵器が出土している。

出土遺物 (第48図)

87は須恵器の杯蓋である。天井部は平坦で、口縁下方に若干屈曲し端部丸くおさめる。断面扁平な逆台形状のつまみがつく。

柱穴 SP3049 (第50図)

00年度調査区の南東部、K-8グリッドで検出された遺構である。長軸48cm、短軸46cm、深さ38cmを測り、平面形は円形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト、炭化物を含むいぶい黄褐色シルトを基調としている。土師器、須恵器、黒色土器が出土しているが、実測可能なものは須恵器壺のみである。

出土遺物 (第53図)

88は須恵器の壺である。口縁部外反ぎみに立ち上がり、体部は球形状である。内外面とも回転ナデ調整である。

柱穴 SP3067 (第51図)

00年度調査区の南西部、J-7グリッドで検出された遺構である。長軸70cm、短軸56cm、深さ42cmを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト、炭化物を含むいぶい黄褐色シルトを基調としている。土師器、須恵器が出土しているが、土師器製塩土器以外に実測できる遺物はなかった。

出土遺物 (第54図)

89は土師器の製塩土器である。外面はユビオサエ後ナデ、内面は布目痕調整である。

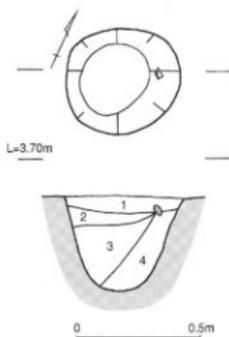
柱穴 SP3086 (第52図)

00年度調査区の南西部、J-7グリッドで検出された遺構である。長軸30cm、短軸30cm、深さ25cmを測

り、平面形は円形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト，炭化物を含むにぶい黄褐色シルトを基調としている。土師器が出土している。

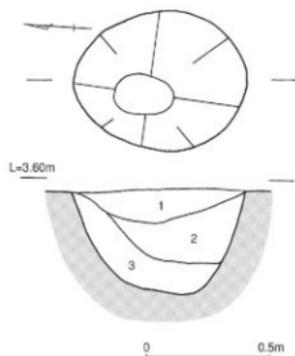
出土遺物（第55図）

90は土師器の甕である。厚さは1.5cmで、内外面はヨコナデ調整である。焚き口と思われる部分のすぐ上に、断面方形の罫がめぐる。



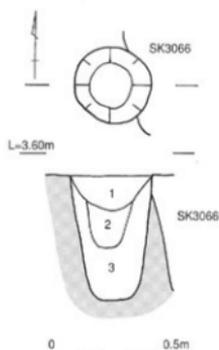
1. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
炭化物含む
2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト
炭化物含む
3. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
炭化物含む
4. 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト
炭化物・土器含む

第50図 SP3049実測図



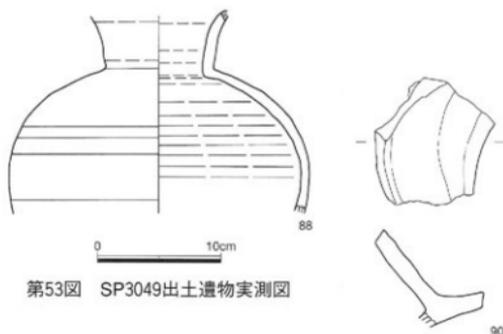
1. 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト
土器片・炭化物含む
2. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 炭化物含む
3. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 炭化物含む

第51図 SP3067実測図



1. オリーブ褐色 2.5Y 4/4 シルト
炭化物・土器片を少量含む
2. 灰黄褐色 10YR 5/2 シルト
3. 灰黄褐色 10YR 6/2 シルト

第52図 SP3086実測図



第53図 SP3049出土遺物実測図



第54図 SP3067出土遺物実測図



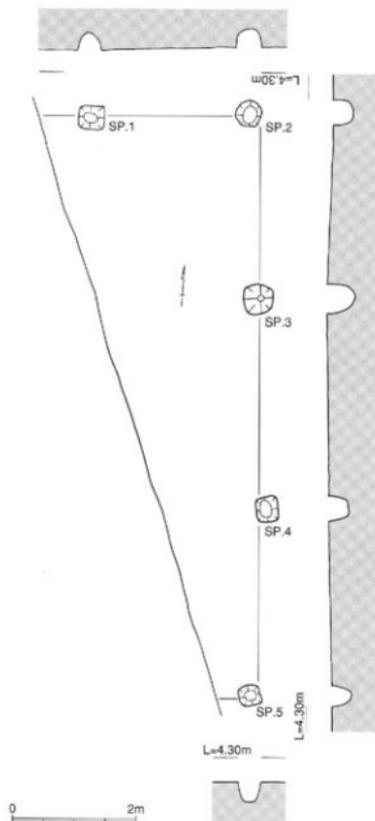
第55図 SP3086
出土遺物実測図

(2) 鎌倉時代の遺構と遺物

掘立柱建物

掘立柱建物 SA2001 (第56図)

00年度調査区の北西部、M-5、N-5、O-5グリッドに位置し、5基の柱穴から構成され、規模は桁行3間×梁間1間(9.5m×2.7m)以上、床面積25.65㎡以上を測り棟方向はN-10°-Wである。柱穴は隅丸方形、円形を呈し直径40~48cm、深さ20~32cmを測り、埋土は暗灰黄色シルト、オリーブ褐色シルト、黄褐色シルトを基調としている。柱穴 SP2032内部からは土師器が出土している。その他の柱穴からも須恵器等が出土しているが、実測可能なものはなかった。



第56図 SA2001実測図

出土遺物 (第57図)

91は SP2032出土の遺物である。

91は土師器の杯である。体部外上方に立ち上がり、内外面回転ナデ調整で底部は回転糸切である。

掘立柱建物 SA2002 (第59図)

00年度調査区の中央部に位置し、9基の柱穴から構成され、規模は桁行3間×梁間2間(6.0m×5.0m)、床面積30.00㎡を測り、棟方向はN-80°-Eである。柱穴は隅丸方形、楕円形、円形を呈し、直径22~60cm、深さ18~56cmを測り、埋土は灰黄色シルト、暗灰黄色シルト、黄褐色シルト、オリーブ褐色シルトを基調としている。柱穴 SP2088内部からは陶器が出土している。その他の柱穴からも、土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器等が出土しているが、実測可能なものはなかった。

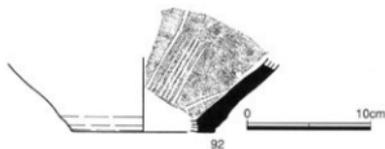
出土遺物 (第58図)

92は SP2088出土の遺物である。

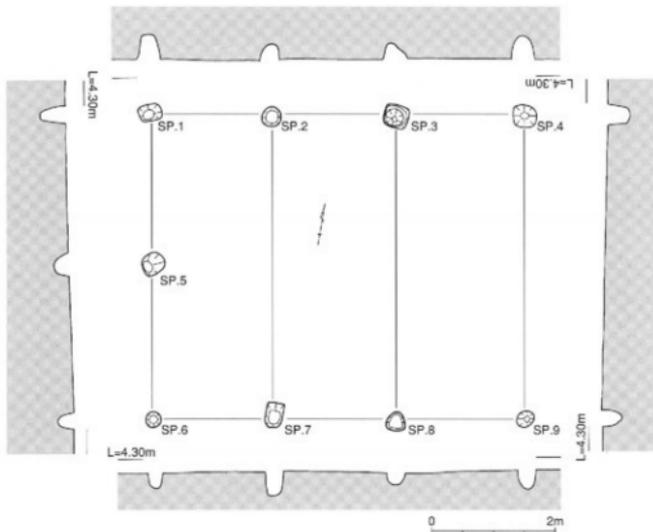
92は陶器播鉢である。底径11.4cmで体部外上方に立ち上がり、内面に摺目がある。



第57図 SA2001柱穴出土遺物実測図



第58図 SA2002柱穴出土遺物実測図



第59図 SA2002実測図

掘立柱建物 SA2003 (第61図)

00年度調査区の中央南部、K-6・7、L-6・7グリッドに位置し、7基の柱穴から構成され、規模は桁行2間×梁間2間(4.7m×4.5m)、床面積21.15㎡を測り、棟方向はN-85°-Eである。柱穴は平面形が隅丸方形、楕円形、円形を呈し、直径24~50cm、深さ14~54cmを測り、埋土は暗灰黄色シルト、黄褐色シルト、にぶい黄色シルトを基調としている。柱穴からは土師器、須恵器、黑色土器等が出土しているが、実測可能なものはなかった。

掘立柱建物 SA2004 (第62図)

00年度調査区の中央南部に位置し、5基の柱穴から構成され、規模は桁行2間×梁間1間(4.6m×2.2m)、床面積10.12㎡を測り、棟方向はN-90°-Eである。柱穴は隅丸方形、円形を呈し、直径32~40cm、深さ16~40cmを測り、埋土は暗灰黄色シルト、黄褐色シルト、にぶい黄色シルトを基調としている。柱穴 SP2075内部からは瓦器が出土している。その他の柱穴からも土師器等が出土しているが、実測可能なものはなかった。

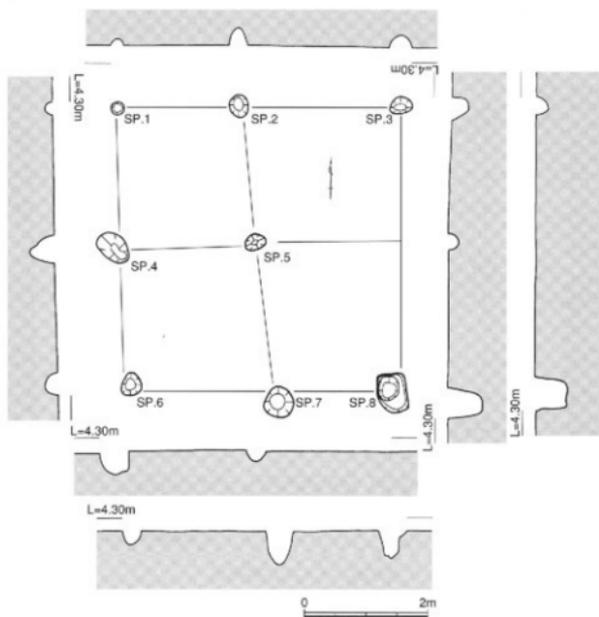
出土遺物 (第60図)

93はSP2075出土の遺物である。

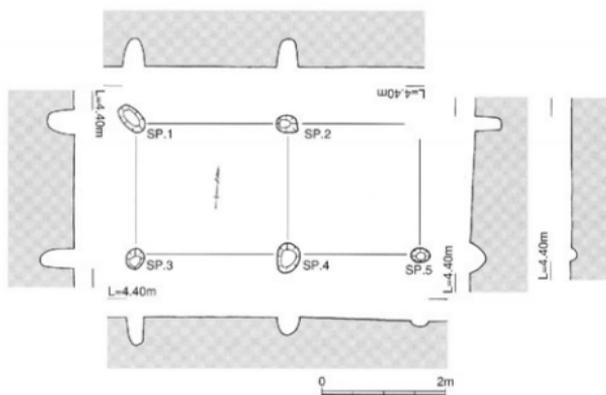
93は瓦器皿である。口径6.6cm、器高0.7cm、底径5.6cmを測り、口縁部は外上方に直線的にゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。内面は回転ナデ後ミガキ(幅2mm)調整である。



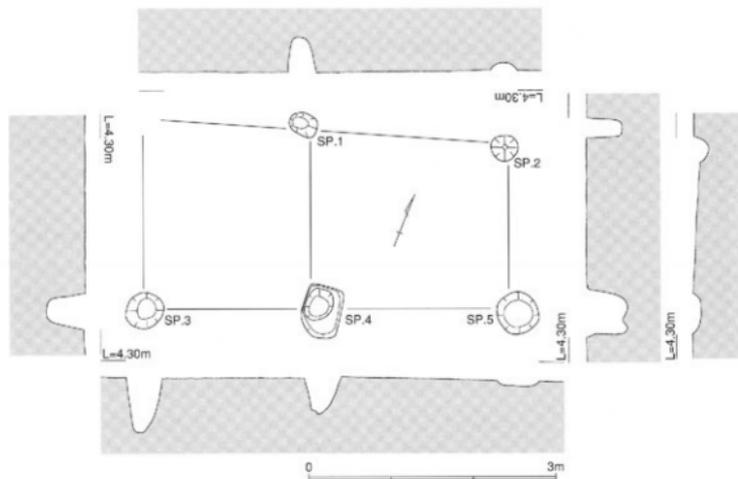
第60図 SA2004柱穴出土遺物実測図



第61图 SA2003实测图



第62图 SA2004实测图



第63図 SA2005実測図

掘立柱建物 SA2005 (第63図)

00年度調査区の中央南部に位置し、5基の柱穴から構成され、規模は桁行2間×梁間1間(4.5m×2.0m)、床面積9.00㎡を測り、棟方向はN-70°-Eである。柱穴は隅丸方形、円形を呈し、直径30~72cm、深さ6~66cmを測り、埋土は暗灰黄色シルト、黄褐色シルト等を基調としている。柱穴からは土師器等が出土しているが、実測可能なものはなかった。

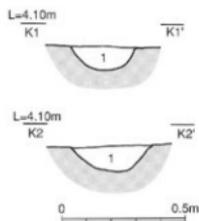
溝

溝 SD2002 (第64図)

SD2002は00年度調査区の第2遺構面中央部に位置する、東西方向の溝である。残存長8.6m、幅30~50cm、深さ10cmを測る。断面は逆舟形状であり、西端は調査区外にかかる。埋土は黄灰色シルト1層のみである。出土遺物は土師器であるが、実測可能な遺物はなかった。

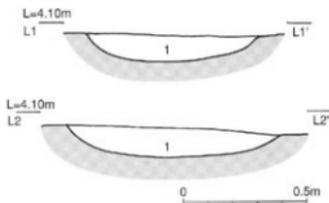
溝 SD2003 (第65図)

00年度調査区の第2遺構面南東部に位置する、東西方向のうねった溝である。残存長4.9m、幅70~88cm、深さ10~12cmを測る。断面はレンズ状であり、埋土はマンガン粒を含んだオリーブ褐色シルトの1層のみである。出土遺物は土師器であるが、実測可能な遺物はなかった。



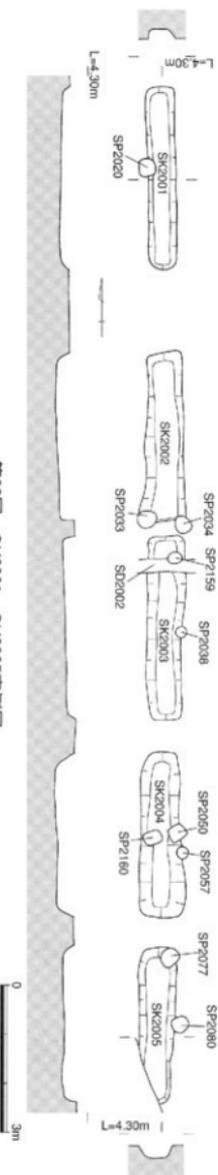
1. 黄灰色 2.5Y 6/1 シルト

第64図 SD2002土層断面実測図



1. オリーブ褐色 2.5Y 4/6 シルト マンガン粒含む

第65図 SD2003土層断面実測図



土坑

土坑 SK2001～SK2005 (第66図)

00年度調査区の中央西部に、南北方向に短辺側を背中合わせで並ぶ、平面長方形の5基の土坑群である。主軸方向は北端のSK2001のN-5°-Wから、南端のSK2005のN-3°-Wまでゆるやかな弓形状に5基は配置されており、間隔は0.30m～1.50mでSK2001～SK2002間がやや広いことを除けばだいたい一定している。

個々の土坑は、長軸318～370cm、短軸60～94cm、深さ20cm～40cmと、だいたい同じ規模になっている。いずれも垂直に近く掘り込まれ底部が平坦な断面長方形を呈している。埋土はマンガン粒を含む黄褐色シルト、にぶい黄色シルト2～4層からなり、いずれも水平堆積である。遺物はSK2001より土師器、瓦質土器、SK2002より土師器、須恵器、瓦質土器、鉄器、SK2003より土師器、須恵器、瓦質土器、SK2004、SK2005より土師器、須恵器が出土している。実測可能なものはSK2002の鉄器、SK2004の土師器のみであった。

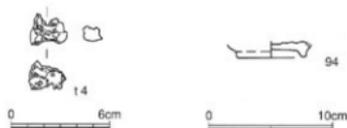
SK2002 (第68図) はN-6グリッドで検出された遺構である。長軸340cm、短軸94cm、深さ30cmを測り、平面形が長方形を呈する。埋土はマンガン粒を含む黄褐色シルト、にぶい黄色シルトを基調としている。出土遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、鉄器であるが、実測可能なものは鉄器のみであった。

SK2004 (第69図) はL-6、M-6グリッドで検出された遺構である。長軸336cm、短軸94cm、深さ40cmを測り、平面形が長方形を呈する。埋土はマンガン粒を含む黄褐色シルト、にぶい黄色シルトを基調としている。出土遺物は土師器、須恵器であるが、実測可能なものは土師器碗のみであった。

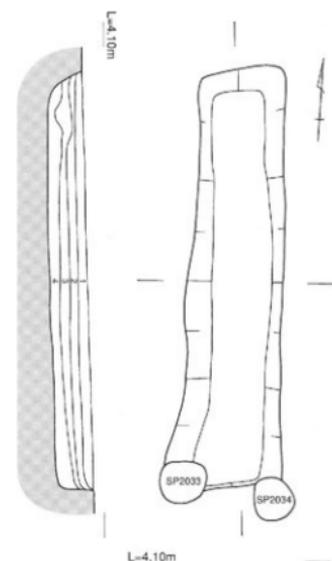
SK2002、SK2004出土遺物 (第67図)

t4はSK2002の遺物である。t4は鉄滓・スラッグである。

94はSK2004の遺物である。94は土師器の碗である。高台部径は5.6cmで体部外上方に立ち上がり、内外面は回転台ナデ、底部は回転ヘラ切後ナデである。断面方形状の高台が貼り付けられている。



第67図 SK2002、SK2004出土遺物実測図



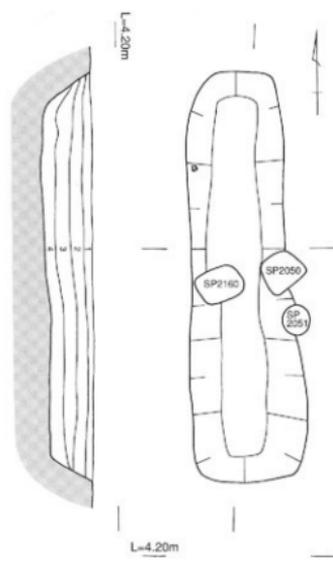
L=4.10m

L=4.10m

0 1m

1. 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト マンガンを含む
2. 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
3. にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト
4. オリーブ褐色 2.5Y 4/4 シルト

第68図 SK2002実測図



L=4.20m

L=4.20m

0 1m

1. 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト マンガンを含む
2. 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
3. にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト 土器片を含む
4. オリーブ褐色 2.5Y 4/4 シルト

第69図 SK2004実測図

土坑 SK2010 (第70図)

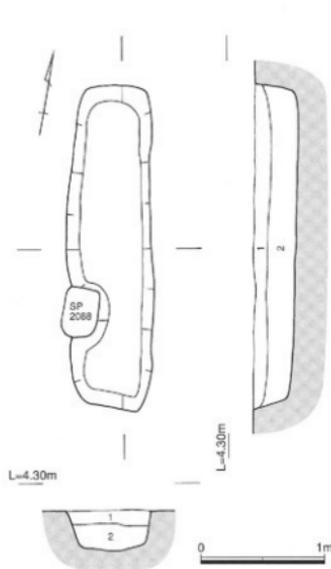
00年度調査区の西南部、K-6・7、L-6・7グリッドで検出された遺構である。長軸260cm、短軸70cm、深さ34cmを測り、平面形が長方形状を呈する。埋土はマンガン、鉄を含む黄褐色シルト、同じくマンガン、鉄を含むにぶい黄色シルトの2層からなる。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、土製品等であるが、実測できるものは2点のみである。

出土遺物 (第72図)

95は土師器杯である。体部はやや内彎ぎみに立ち上がり、外面は回転台ナデ、内面は回転台ナデ、板ナデである。底部はナデのち製作台の板目痕が見られる。96は土師質の完形紡錘状土錘であり、穿孔径は0.4cmである。

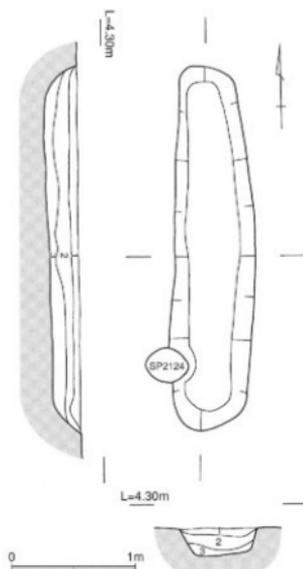
土坑 SK2014 (第71図)

00年度調査区の南部、J-7、K-7グリッドで検出された遺構である。長軸296cm、短軸66cm、深さ26cmを測り、平面形が長方形状を呈する。埋土はマンガン粒を含む黄褐色シルト、にぶい黄色シルトを基調



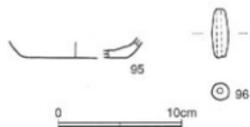
1. 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
マンガン・鉄分(多量)を含む
2. にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト
マンガン・鉄分(多量)を含む

第70図 SK2010実測図



1. 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト マンガンを含む
2. 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
3. にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト

第71図 SK2014実測図



第72図 SK2010出土遺物実測図



第73図 SK2014出土遺物実測図

としている。出土遺物は土師器、須恵器、瓦質土器等であるが、実測可能なものは須恵器高台付皿のみである。

出土遺物（第73図）

97は須恵器高台付皿である。体部外上方にゆるやかに立ち上がり、削り出しの低い高台がつく。内外

面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切である。

柱穴

柱穴 SP2020 (第74図)

00年度調査区の中央北部、O-6グリッドで検出された遺構である。長軸36cm、短軸34cm、深さ30cmを測り、平面形は円形である。埋土は炭化物を含む暗灰黄色シルト、オリーブ褐色シルトを基調としている。出土遺物は土師器である。

出土遺物 (第80図)

98は土師器鍋の脚である。断面は円形状を呈する。

柱穴 SP2036 (第75図)

00年度調査区の中央西部、M-6、N-6グリッドで検出された遺構である。長軸42cm、短軸30cm、深さ26cmを測り、平面形が隅丸方形を呈する。

埋土は明赤灰色シルト、オリーブ褐色シルト、黄褐色シルトの3層に分層できる。出土遺物は土師器、須恵器であるが、実測可能なものは1点のみであった。

出土遺物 (第81図)

99は土師器杯である。底径は8.6cmで体部やや内彎ぎみに立ち上がり、内外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切である。

柱穴 SP2062 (第76図)

00年度調査区の中央西部、L-7グリッドで検出された遺構である。長軸38cm、短軸38cm、深さ34cmを測り、平面形が円形を呈する。埋土は炭化物を含む暗灰黄色シルト、オリーブ褐色シルトである。出土遺物は土師器、石器であるが、実測可能なものは石器のみであった。

出土遺物 (第82図)

100は砥石である。石材は砂岩である。

柱穴 SP2088 (第77図)

00年度調査区の南西部、K-6グリッドで検出された遺構である。長軸56cm、短軸38cm、深さ40cmを測り、平面形が楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む暗灰黄色シルト、黄褐色シルトの2層に分層できる。出土遺物は土師器、陶器である。

出土遺物 (第83図)

92は陶器插鉢である。体部まっすぐ外上方に立ち上がり、内外面は回転台ナデ調整で、内面に7条/2.7cmの摺目がある。

柱穴 SP2089 (第78図)

00年度調査区の中央南部、K-7、L-7グリッドで検出された遺構である。長軸50cm、短軸34cm、深さ32cmを測り、平面形が楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む暗灰黄色シルト、黄褐色シルト等に分層できる。出土遺物は土師器であるが、実測可能なものは1点のみであった。

出土遺物 (第84図)

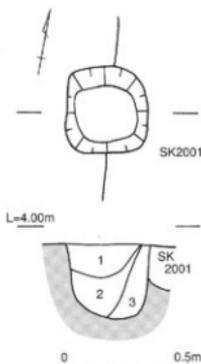
101は土師器皿である。底径は5.6cmで、体部外上方にゆるやかに立ち上がる。内外面は回転ナデ調整である。

柱穴SP2116 (第79図)

00年度調査区の南東部、K-8グリッドで検出された遺構である。長軸54cm、短軸50cm、深さ16cmを測り、平面形は円形を呈する。埴土は黄褐色シルトの1層のみである。出土遺物は土師器、瓦質土器である。

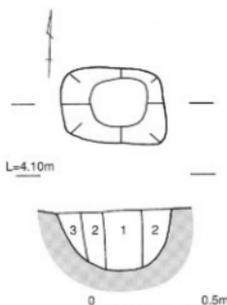
出土遺物 (第85図)

102は瓦質の皿である。口径9.0cm、底径7.3cmを測り、口縁部外上方にゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面は回転ナメ調整である。



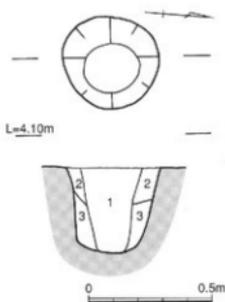
- | | | |
|------------------|----------|-----|
| 1. 暗灰黄色
炭化物含む | 2.5Y 5/2 | シルト |
| 2. オリーブ褐色 | 2.5Y 4/4 | シルト |
| 3. オリーブ褐色 | 2.5Y 4/3 | シルト |

第74図 SP2020実測図



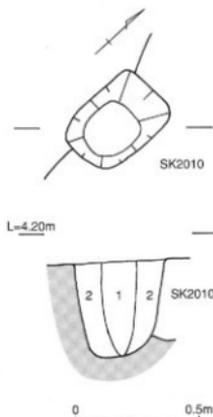
- | | | | |
|-----------|----------|-----|------|
| 1. 明赤灰色 | 2.5Y 7/1 | シルト | カクラン |
| 2. オリーブ褐色 | 2.5Y 4/4 | シルト | |
| 3. 黄褐色 | 2.5Y 5/4 | シルト | |

第75図 SP2036実測図



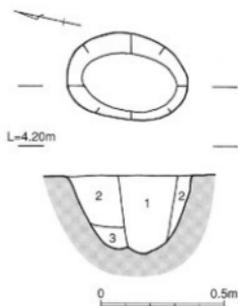
- | | | |
|--------------------|----------|-----|
| 1. 暗灰黄色
炭化物含む | 2.5Y 5/2 | シルト |
| 2. オリーブ褐色
土器片含む | 2.5Y 4/3 | シルト |
| 3. オリーブ褐色 | 2.5Y 4/4 | シルト |

第76図 SP2062実測図



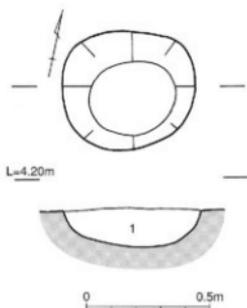
- | | | |
|------------------|----------|-----|
| 1. 暗灰黄色
炭化物含む | 2.5Y 5/2 | シルト |
| 2. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト |

第77図 SP2088実測図



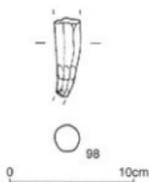
- 1. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト
炭化物含む
- 2. 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト
- 3. 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト

第78図 SP2089実測図

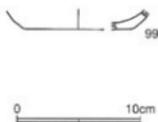


- 1. 黄褐色 2.5Y 5/4 シルト

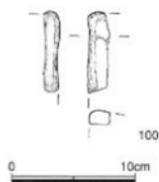
第79図 SP2116実測図



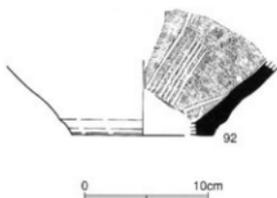
第80図 SP2020
出土遺物実測図



第81図 SP2036
出土遺物実測図



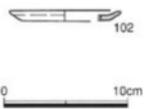
第82図 SP2062
出土遺物実測図



第83図 SP2088
出土遺物実測図



第84図 SP2089
出土遺物実測図



第85図 SP2116
出土遺物実測図

(3) 室町時代の遺構と遺物

土坑

土坑 SK1001 (第86図)

00年度調査区の中央東部、N-7グリッドで検出された遺構である。長軸142cm、短軸88cm、深さ54cmを測り、平面形が隅丸方形状を呈する。埋土は炭化物を含む黄褐色シルト、暗灰黄色を基調としている。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器等である。

出土遺物 (第88図)

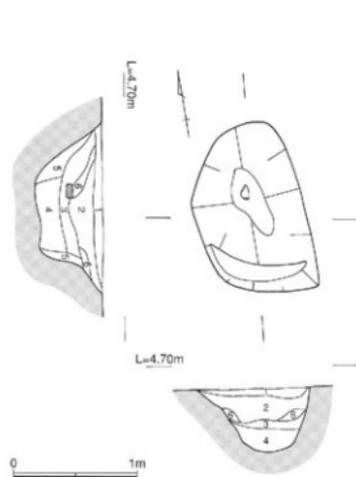
103は土師器椀である。口径は13.0cmで口縁端部僅かに外反し、先端を丸くおさめている。内外面に赤色塗彩が施されている。90は陶器の備前甕である。底径28.6cm、内外面はナデ調整で体部外上方に直線的に立ち上がる。

土坑 SK1003 (第87図)

00年度調査区の中央西部、L-6、M-5・6グリッドで検出された遺構である。長軸230cm、短軸200cm、深さ20cmを測り、平面形が半楕円形状を呈し西端は調査区外に続く。埋土は炭化物を含む暗灰黄色砂質土を基調としている。出土遺物は土師器、須恵器、鉄器である。

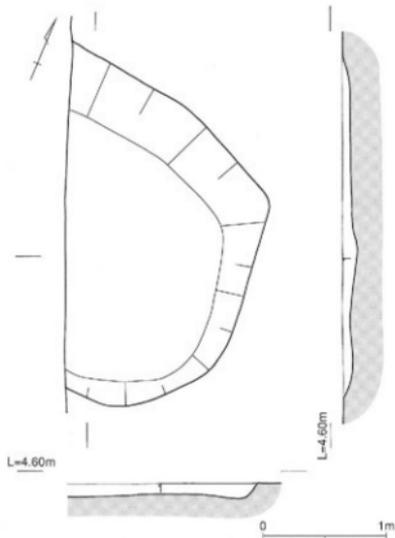
出土遺物 (第89図)

105は須恵器のこね鉢または播鉢である。口縁部直立し、端部平坦でやや外部に拡張する。内外面はナデである。t5は鉄滓・スラッグである。t6は銭貨の開元通寶で、文字は楷書(無背)である。



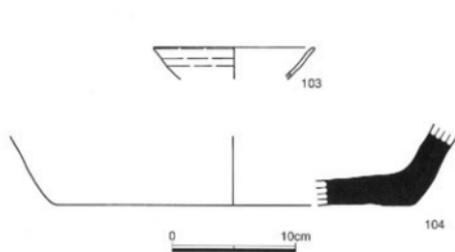
- | | | | |
|---------|----------|-----|-----------|
| 1. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | 炭化物・土器片含む |
| 2. 暗灰黄色 | 2.5Y 5/2 | シルト | |
| 3. 黄褐色 | 2.5Y 5/4 | シルト | |
| 4. 暗灰黄色 | 2.5Y 5/2 | シルト | 炭化物わずかに含む |
| 5. 黄灰色 | 2.5Y 5/1 | シルト | |
| 6. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | |

第86図 SK1001実測図

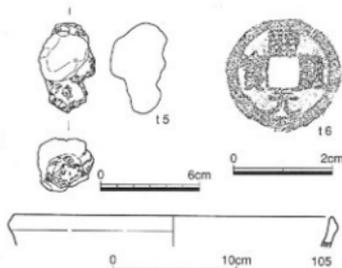


- | | | | |
|---------|----------|-----|---------------|
| 1. 暗灰黄色 | 2.5Y 5/2 | 砂質土 | 炭化物・土器片わずかに含む |
|---------|----------|-----|---------------|

第87図 SK1003実測図



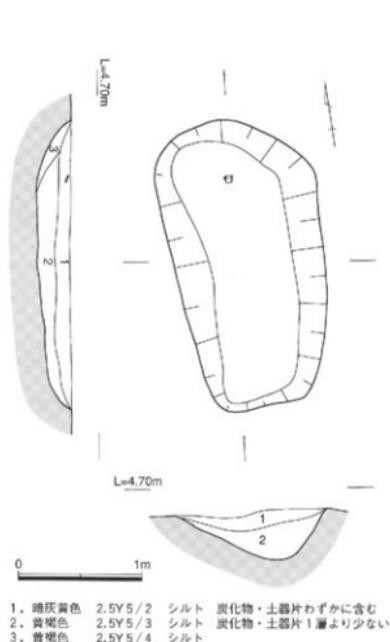
第88図 SK1001出土遺物実測図



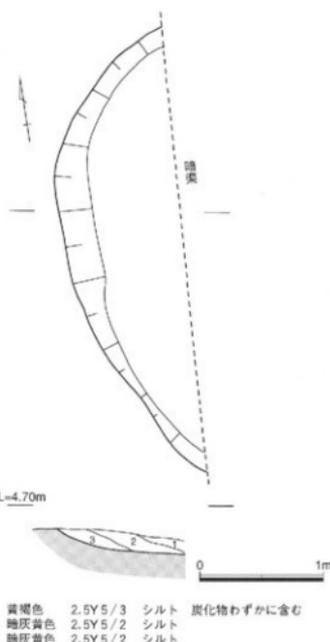
第89図 SK1003出土遺物実測図

土坑 SK1004 (第90図)

00年度調査区の中央部、L-7, M-7グリッドで検出された遺構である。長軸236cm, 短軸126cm, 深さ28cmを測り、平面形が不整形形状を呈する。埴土は炭化物を含む暗灰黄色シルト, 炭化物を含む黄褐色シルトを基調としている。出土遺物は土師器, 須恵器, 陶磁器, 鉄器等であるが、実測可能なものは陶器天目碗と鉄器であった。



第90図 SK1004実測図



第91図 SK1005実測図

出土遺物 (第92図)

106は陶器の天目碗である。口縁部内彎ぎみに外上方に立ち上がり、端部外反する。内外面、こい黄みのブラウンの釉がかかる。t7, t8は鉄器であり、t7は不明鉄器、t8は釘であろうと思われる。

土坑 SK1005 (第91図)

00年度調査区の中央部、L-7グリッドで検出された遺構である。長軸296cm, 短軸80cm, 深さ16cmを測り、平面形が半楕円形状を呈する。埋土は炭化物を含む黄褐色シルト, 暗灰黄色シルトを基調としている。出土遺物は土師器, 須恵器, 鉄器等であるが、実測可能なものは鉄器のみであった。

出土遺物 (第93図)

t9は鉄器である。器種は釘で、長さ52mmである。

土坑 SK1006 (第97図)

00年度調査区の南部、K-7グリッドで検出された遺構である。長軸90cm, 短軸36cm, 深さ14cmを測り、平面形が半楕円形状を呈する。埋土はマンガンを含む暗灰黄色シルトを基調としている。出土遺物は土師器である。

出土遺物 (第94図)

107は土師器皿である。口縁部や外反ぎみに立ち上がり、端部でわずかに内彎し先端丸くおさめる。底部は回転ヘラ切後ケズリである。

土坑 SK1007 (第98図)

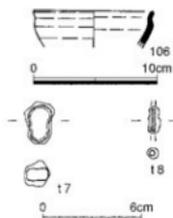
00年度調査区の中央南部、L-7グリッドで検出された遺構である。長軸58cm, 短軸46cm, 深さ56cmを測り、平面形が楕円形状を呈する。埋土は炭化物を含む暗灰黄色シルトを基調としている。出土遺物は土師器, 瓦質土器, 陶磁器, 鉄器等であるが、実測可能なものは鉄器のみであった。

出土遺物 (第95図)

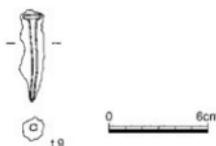
t10は鉄器である。器種は不明である。(不明鉄器)

土坑 SK1008 (第99図)

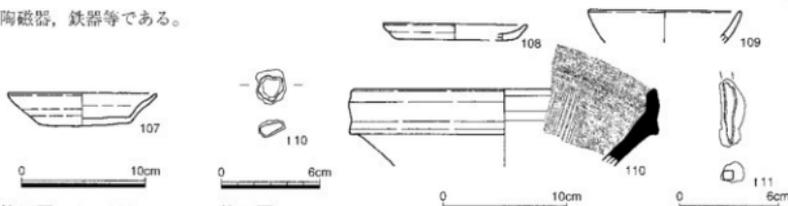
00年度調査区の南部、K-7・8グリッドで検出された遺構である。長軸312cm, 短軸110cm, 深さ56cmを測り、平面形が隅丸方形形状を呈する。埋土は炭化物, マンガンを含む黄褐色シルト, 暗灰黄色シルト, 炭化物を含む灰黄色シルト, 明黄褐色シルトを基調としている。出土遺物は土師器, 須恵器, 瓦質土器, 陶磁器, 鉄器等である。



第92図 SK1004出土遺物実測図



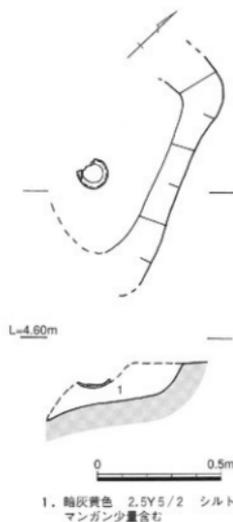
第93図 SK1005出土遺物実測図



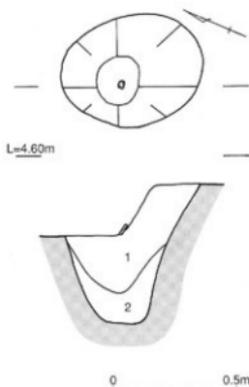
第94図 SK1006
出土遺物実測図

第95図 SK1007
出土遺物実測図

第96図 SK1008出土遺物実測図



第97図 SK1006実測図



第98図 SK1007実測図

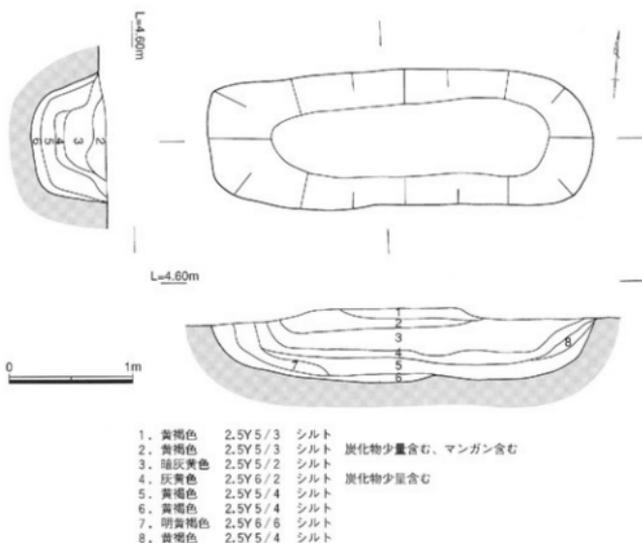
出土遺物（第96図）

108は土師器皿である。口径11.5cm、底径9.2cmで、口縁部ゆるやかに立ち上がり端部丸くおさめられる。内外面はナデ調整である。

109は土師器椀である。口径は12.2cm、内外面は回転ナデ調整で、口縁部やや内灣ぎみに立ち上がり端部丸くおさめられる。

110は陶器の備前摺鉢である。口径は24.0cmで、口縁部直立し端部丸くおさめられる。内面に摺目（3条/cm）がある。

t11は鉄器である。器種は釘で、長さ37.0mmである。



第99図 SK1008実測図

柱穴

柱穴 SP1005 (第100図)

00年度調査区の北部、P-6グリッドで検出された遺構である。長軸44cm、短軸40cm、深さ10cmを測り、平面形は円形を呈する。埋土は炭化物をわずかに含む黄褐色シルト1層のみである。出土遺物は土師器である。

出土遺物 (第106図)

111は土師器の鍋である。内外面回転ナデ調整で、口縁部内彎ぎみにゆるやかに立ち上がり、端部は平坦である。外面に煤が付着する。

柱穴 SP1016 (第101図)

00年度調査区の中央西部、N-5グリッドで検出された遺構である。長軸50cm、短軸22cm、深さ16cmを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は炭化物をわずかに含む暗灰黄色シルト1層のみである。出土遺物は鉄器である。

出土遺物 (第102図)

t12は鉄器である。器種は針であろうと思われる。頭部折り曲げ鍛接で、上部に穴が開けられている針状の鉄器である。

柱穴 SP1025 (第103図)

00年度調査区の中央部、N-6グリッドで検出された遺構である。長軸96cm、短軸38cm、深さ14cmを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む暗灰黄色シルト1層のみである。出土遺物は土師器、鉄器である。

出土遺物 (第107図)

t13は鉄器である。器種は釘である。長さは31mmである。

柱穴 SP1031 (第104図)

00年度調査区の中央部、M-7グリッドで検出された遺構である。長軸28cm、短軸23cm、深さ10cmを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土はマンガン粒を含む暗灰黄色シルト1層のみである。出土遺物は土師器である。

出土遺物 (第108図)

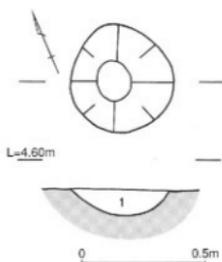
112はほぼ完形の土師器皿である。口径11.2cm、器高2.3cm、底径6.6cmを測る。口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切で、製作台の板目痕が残る。113は同じく土師器皿である。口径11.2cmで口縁部ゆるやかにやや外反ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切である。

柱穴 SP1032 (第105図)

00年度調査区の中央東部、M-7グリッドで検出された遺構である。長軸30cm、短軸30cm、深さ10cmを測り、平面形は円形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト1層のみである。出土遺物は土師器である。

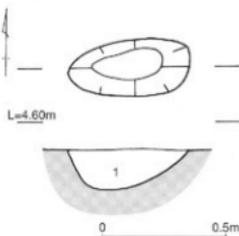
出土遺物 (第109図)

114は完形の土師器杯である。口径12.8cm、器高2.3cm、底径6.3cmを測る。口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面は回転ナデ調整で、底部は回転糸切である。



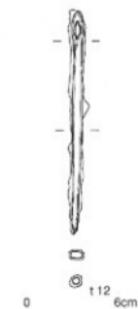
1. 黄褐色 10YR 5/3
炭化物・土器片わずかに含む

第100図 SP1005実測図

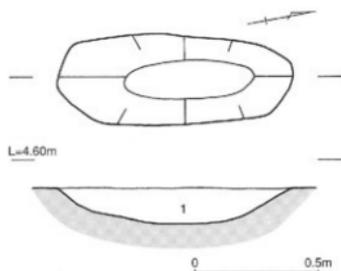


1. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト
1~5mmの炭化物小片、土器片わずかに含む

第101図 SP1016実測図

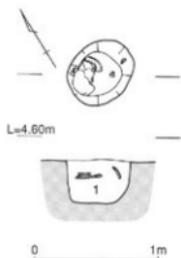


第102図 SP1016
出土遺物実測図



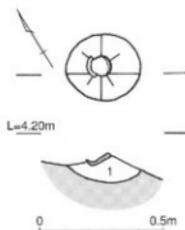
1. 暗黄灰色 2.5Y 5/2 シルト
1~5mmの炭化物小片、土器片を含む

第103図 SP1025実測図



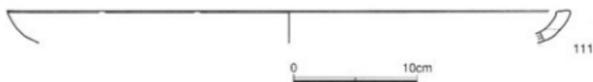
1. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト
土器片、マンガングラスG

第104図 SP1031実測図

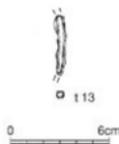


1. に近い黄褐色 シルト

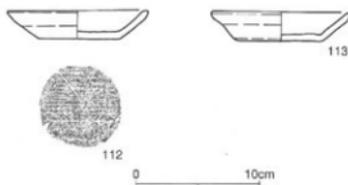
第105図 SP1032実測図



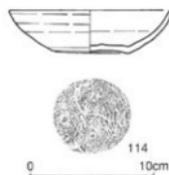
第106図 SP1005出土遺物実測図



第107図 SP1025
出土遺物実測図



第108図 SP1031出土遺物実測図



第109図 SP1032
出土遺物実測図

(4) 遺構外出土の遺物

古代包含層（第3包含層）出土遺物（第110～115図）

00年度調査区の古代包含層である第3包含層からの出土遺物をまとめて紹介する。出土遺物については、主に9～10世紀頃の土師器、赤色塗彩土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器等の皿、杯、椀、鍋、釜、環状土鉢、金属器等が検出された。

土師器

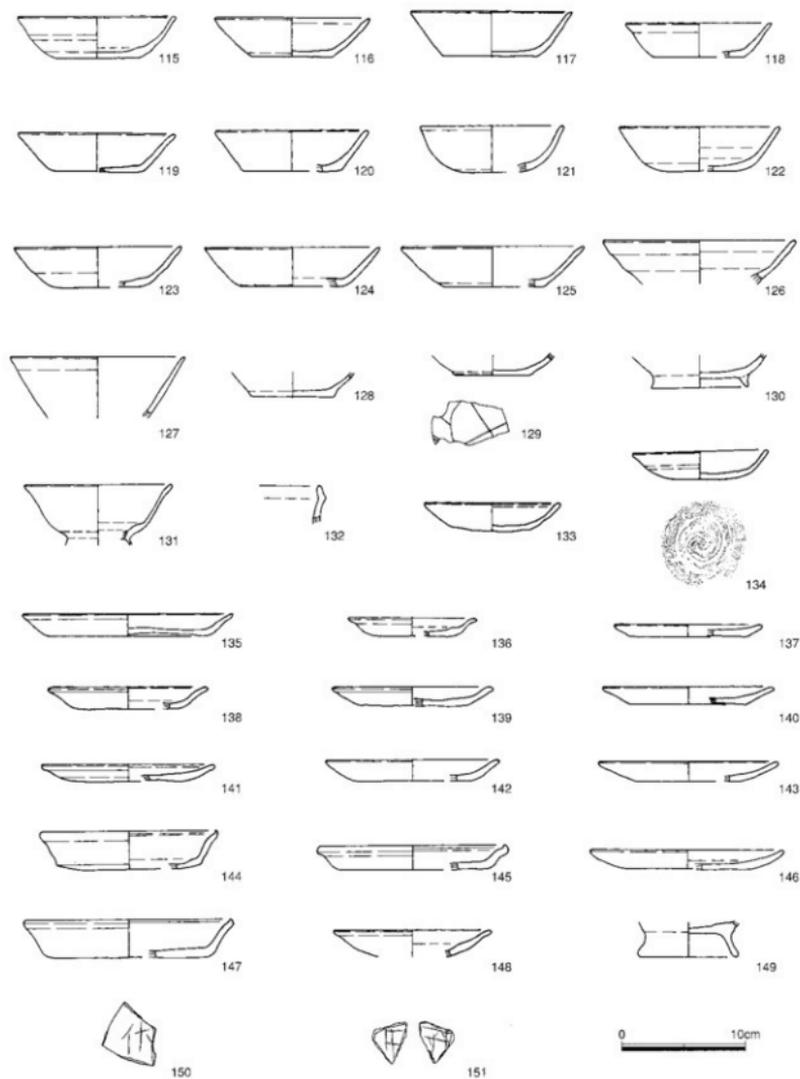
115～129, 132は土師器杯である。117は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面は回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切である。内外面に赤色塗彩が施されている。124, 126は、ともに体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。124は内面に、126は内外面に赤色塗彩が施されている。115は口縁部僅かに外反し、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。内外面に赤色塗彩が施されている。123は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。129は体部ゆるやかに立ち上がり、底部はナデのあと裏に十文字状のヘラ描きが見られる。120は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。132は、口縁部外反ぎみに立ち上がり、端部手前で「く」の字形に内向する。128は体部ほぼ直線的に立ち上がる。内外面回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切である。127は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。121は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。118, 122はともに口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。122は内外面に赤色塗彩が施されている。119は口縁部ほぼ直線的にゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切で、内外面に赤色塗彩が施されている。116は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。125は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。

130, 131は土師器高台付杯である。131は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部で僅かに外反し丸くおさめる。「ハ」の字形にして、断面U字形の高台が貼り付けられている。130は体部外上方に立ち上がり、断面逆三角形の高台が貼り付けられている。また、内外面に赤色塗彩が施されている。

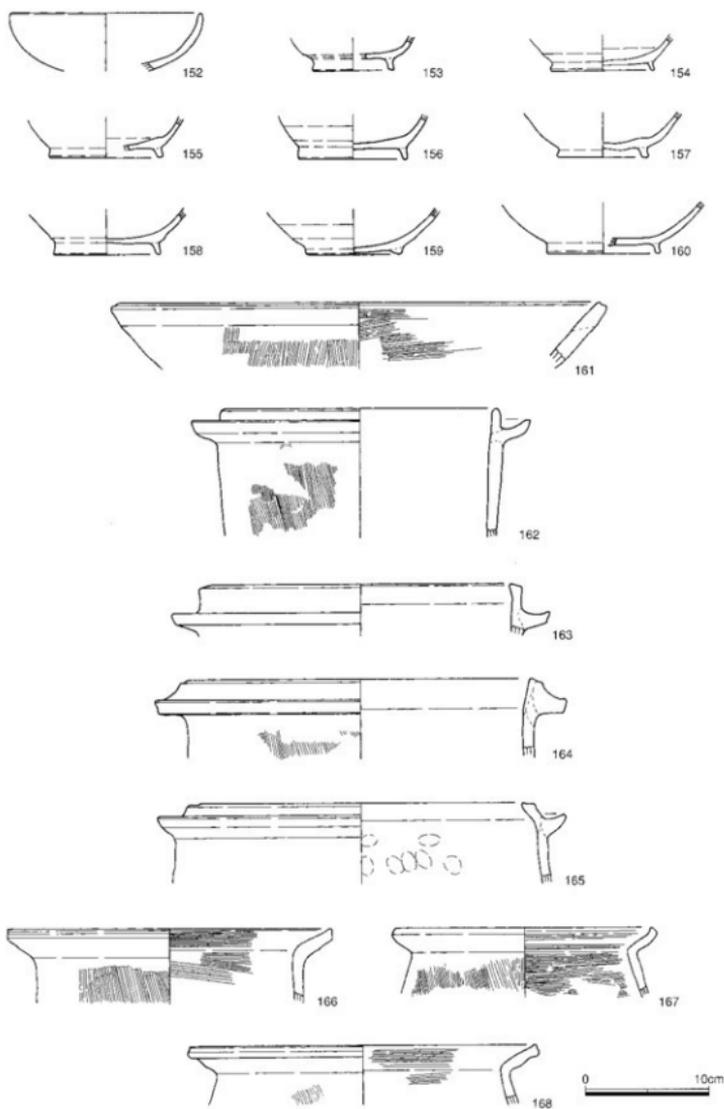
133～148, 150, 151は土師器皿である。141は口縁部ほぼ直線的にゆるやかに立ち上がり端部丸くおさめる。また内面に赤色塗彩を施す。147は口径16.6cmを測り、口縁端部内側に沈線を廻らせており内外面に赤色塗彩が施されている。146は底部回転ヘラ切後ナデであり内面に赤色塗彩が施されている。139は口縁端部僅かに外反し、丸くおさめる。142は内外面に赤色塗彩が施されている。144は口縁端部内側に沈線を廻らせており、内外面に赤色塗彩が施されている。底部回転ヘラ切後ナデである。136は底部回転ヘラ切後ナデである。143は口径14.4cmを測り、底部回転ヘラ切である。138は口縁端部僅かに外反し、丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。150は底部内面にヘラ描きがある。135は底部回転ヘラ切後ナデである。内外面に赤色塗彩が施されている。151は底部内外面にヘラ描きが見られる。133, 134, 148はともに口縁部ほぼ直線的にゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。140は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。145は口縁端部内側に沈線を廻らせている。137は底部回転ヘラ切後ナデである。

149は高台付皿である。「ハ」の字形にして、断面U字形の高めの高台が貼り付けられている。

152～160は土師器椀である。154は体部やや内彎ぎみに立ち上がり、「ハ」の字形にして、断面U字形の高台が貼り付けられている。また、内外面に赤色塗彩が施されている。152は体部内彎ぎみに立



第110图 第3包含層出土遺物実測図(1)



第111图 第3包含层出土遗物实测图(2)

ち上がり、端部丸くおさめる。157は体部内彎ぎみに立ち上がる。高台は断面方形を呈する。158は体部直線的に立ち上がる。断面U字形の高台が貼り付けられている。内外面に赤色塗彩が施されている。153は体部内彎ぎみに立ち上がる。断面J字形の高台が貼り付けられている。内外面に赤色塗彩が施されている。156は同様に、体部内彎ぎみに立ち上がる。断面U字形の高台が貼り付けられており、内外面に赤色塗彩が施されている。160は体部内彎ぎみに立ち上がる。断面U字形の高台が貼り付けられており、内外面に赤色塗彩が施されている。155は体部内彎ぎみに立ち上がる。断面U字形の高台が貼り付けられており、内外面に赤色塗彩が施されている。159も体部内彎ぎみに立ち上がる。断面逆三角形の高台が貼り付けられており、内外面に赤色塗彩が施されている。

166～168は土師器甕である。167は口縁部内向して立ち上がり、端部直下で「く」の字状に外反する。端部断面は方形で、上方に拡張する。168は同様に、口縁部内向して立ち上がり端部直下で「く」の字状に外反する。端部断面は方形である。166は口縁部直立ぎみに立ち上がり、端部直下で「く」の字状に外反する。端部断面は方形を呈する。

161は土師器釜である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部は凹面状を呈する。

162～165は土師器羽釜である。163は口縁部直立ぎみに短く立ち上がり、端部断面は平坦におさめ、上方にやや拡張する。その下に断面方形の鐶がめぐる。165は口縁部内向ぎみに短く立ち上がり、端部断面は方形を呈する。口縁直下に断面三角形の鐶がめぐる。164は口縁部外向ぎみに短く立ち上がり、端部断面は方形を呈する。口縁直下に断面方形の鐶がめぐる。162は口縁部直立ぎみに短く立ち上がり、端部断面は丸くおさめる。

169～173は土師器甕である。いずれも外部はハケ調整で、端部は方形を呈する。内面に煤が付着しているものもある。

174～178は土師器製塩土器である。いずれも外面はユビオサエとナデ、内面は布目痕がみられる。

179は土師器種羽口である。紡錘形の一部で、送風口が一部残存している。スラッグ部分がみられる。

黒色土器

180は黒色土器A類杯である。口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。内面ミガキ調整である。

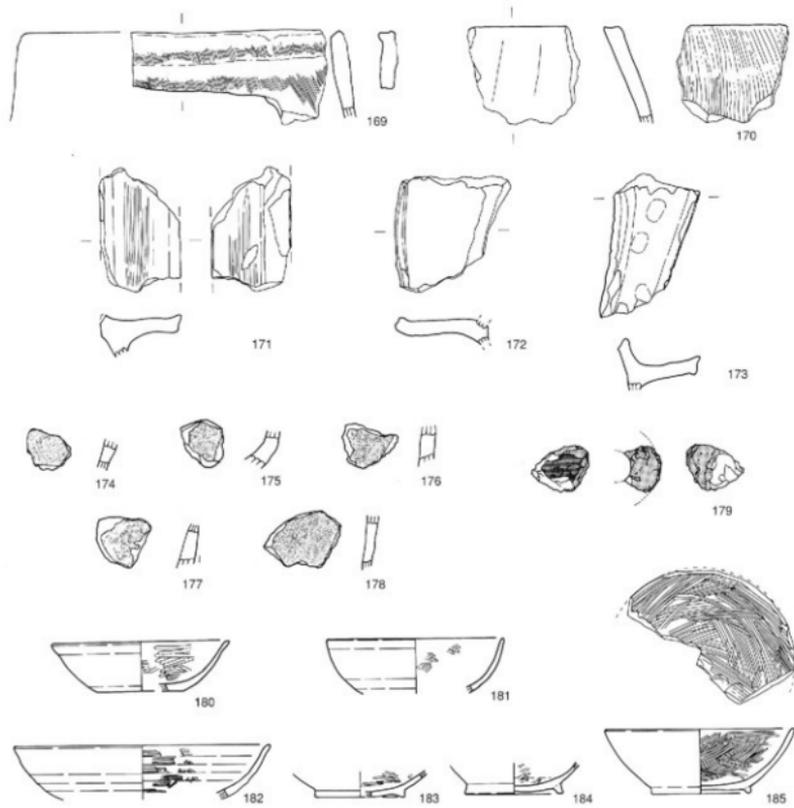
181～185は黒色土器A類碗である。内面はすべてミガキ調整である。181は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。184は体部内彎ぎみに立ち上がる。「ハ」の字形にして、断面方形の高台が貼り付けられている。185は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。断面U字形の高台が貼り付けられている。183は体部やや内彎ぎみに立ち上がり、断面三角形の削り出しの高台がつく。182は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。外面に赤色塗彩が施されている。

須恵器

186は須恵器杯である。内外面回転ナデ調整で、口縁部ほぼ直線的に立ち上がり端部丸くおさめる。

187, 188, 195は須恵器高台付杯である。187は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。断面方形の高台が貼り付けられている。188は体部内彎ぎみに立ち上がり、断面方形の高台がつく。195は断面方形の高台がつく。内面底部にヘラ描きがある。

189～193は須恵器杯蓋である。形状は190, 191は天井部が平坦で口縁部下方に屈曲し、端部丸くおさ

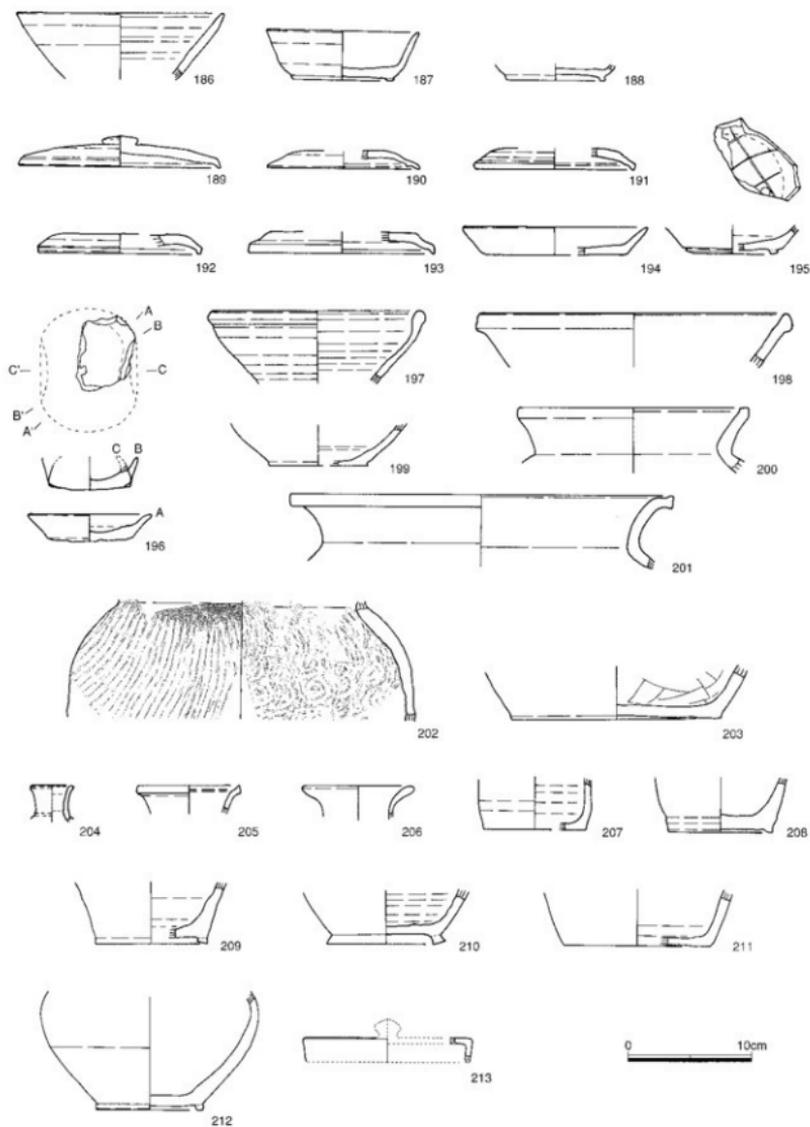


第112図 第3包含層出土遺物実測図(3)

める。189, 192, 193は端部が下方に拡張し丸くおさめる。189は断面扁平な楕円形状のつまみがつく。194は須恵器皿である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。196は耳皿である。口径10cmを測り、口縁部ゆるやかに立ち上がり端部丸くおさめるが、上から見て中央部は内彎し横から押さえられたような形状を呈する。

200～203は須恵器甕である。201は内外面回転ナア調整である。口縁部外反し、端部方形状で僅かに上方につまみ上げる。200は口縁部外反して立ち上がり、端部近くで「く」の字状に外反し、端部断面は方形状である。202は体部内上方に内彎して立ち上がり、頭部で「く」の字状に外反する。外面は平行タタキ、内面は同心円文タタキ調整である。203は体部ほぼ直線的に立ち上がる。

204～212は須恵器壺である。204は口縁部外反して立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面自然釉がかかる。210は体部外上方に立ち上がり、断面台形状の高台がつく。205は口縁部外反して立ち上がり、



第113图 第3包含層出土遺物実測图(4)

端部上につまみ上げる。209は体部まっすぐ立ち上がる。212は体部中央で大きく内彎する。外面に自然釉あり。207は体部内彎ぎみに立ち上がる。206は口縁部大きく外反し、端部丸くおさめる。211は体部まっすぐ立ち上がる。底部は回転ヘラ切後ナデである。208は体部僅かに内彎ぎみに立ち上がる。

213は須恵器短頸壺蓋である。天井部平坦で口縁部下方に「く」の字形に約90° 屈曲する。

197、199は須恵器鉢である。197は口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。199は削り出しの低い高台がつく。底部は回転糸切である。

198は須恵器こね鉢である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部平坦でやや外部に拡張する。

226は須恵質の軒平瓦である。特有の文様が見られる。

瓦器・瓦質土器

227は瓦質の瓦である。平瓦で、凸面に縄文タタキが見られる。凹面は布目痕である。

陶器

219は陶器碗である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。オリブグレイの釉がかかる。

・緑釉陶器

215は緑釉陶器皿である。口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部やや外反し丸くおさめる。内外面回転ナデ調整で、うすい黄緑の釉がかかる。

214、216は緑釉陶器高台付皿である。216は断面U字形の低い高台がつく。214は口縁部内彎ぎみにゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。断面方形の削り出しの高台がつく。

218、220、221、223、224は緑釉陶器碗である。218は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。224は体部やや内彎ぎみに立ち上がり、断面方形の高台がつく。223も同様に断面方形の高台がつく。220は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。221は口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。

・灰釉陶器

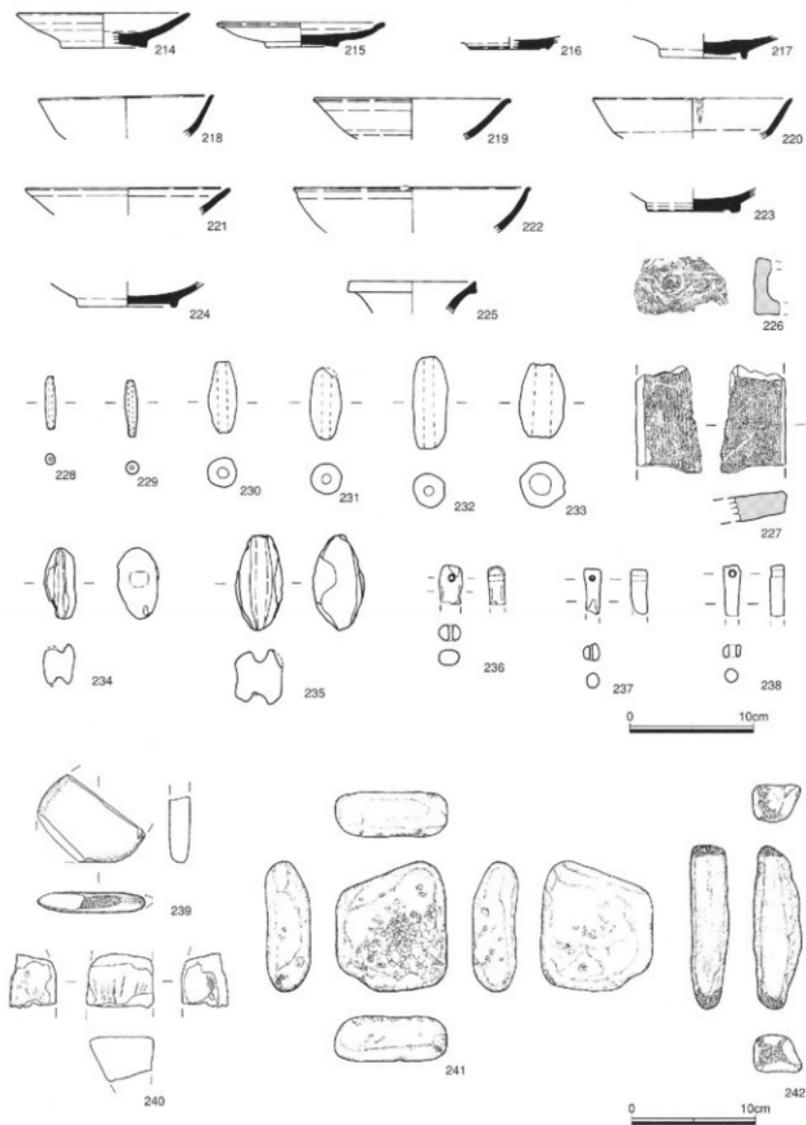
217は瀬戸焼きの灰釉陶器高台付皿である。体部ゆるやかに立ち上がり、断面U字形の高台がつく。222は灰釉陶器碗である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部手前で大きく外反する。225は灰釉陶器壺である。口縁部外反し、端部尖りぎみで下方に拡張する。

石器

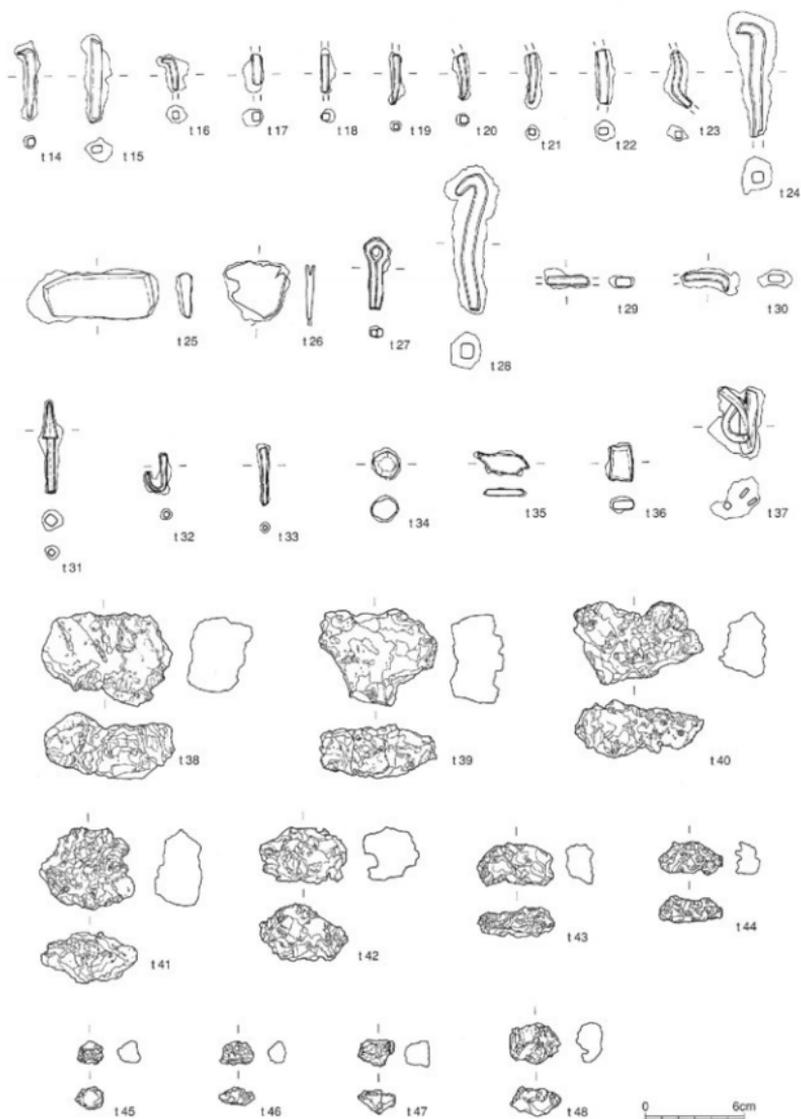
241、242は礫石である。石材はいずれも砂岩である。239は磨石で石材は黒色頁岩である。240は砥石で石材は堆積岩である。いずれも時代等は不明である。

土製品

228～238は土師質の土鍾である。228～233は紡錘状土鍾で、穿孔径はいずれも0.3cm～1.7cmを測る。236～238は有孔土鍾で、穿孔径はいずれも0.5cm～0.6cmを測る。234、235は有溝土鍾で外面はナデ、ユビオサエ調整である。



第114图 第3包含層出土遺物実測図(5)



第115图 第3包含層出土遺物実測図(6)

金属器・スラッグ

本遺跡は金属器(ほとんどが鉄製品である。他は銅製品)および鉄滓・スラッグの出土が非常に多い。これらは遺構の中にもいくつか混ざっているが、包含層からは大量の金属器が出土した。器種が確定できる鉄器もあるが、器種不明のものもいくつかある。ここでまず、金属器から推測される古町遺跡の性格的なものを考えてみたい。

器種的に見ていけば、釘がいちばん点数は多い。そのほかには鎌や鋤、カスガイや刀子、直刀や火打ち金、タガネ等が確認される。

ただ、図版で紹介されている第3包含層 t31および第2包含層 t68の鉄鎌、それから第1包含層 t120の銅製の鈴、同じく t113の馬具等の遺物は、通常集落では見られないものである。このことから、古町遺跡はより官衛的な性格を持った遺跡であると考えられるのではないだろうか。近隣の黒谷川宮ノ前遺跡や黒谷川郡頭遺跡、古城遺跡(場所は第4図を参照)よりも南側に位置する古町遺跡は、中心部である観音寺遺跡との交通の要所として重要な位置を占めていたのではないかということが、この出土遺物から推測される。

また、製鉄の際にできたと思われる鉄滓・スラッグが非常にたくさんあるのも特徴である。とくにスラッグは、第3包含層と第2包含層において多いという傾向がみられる。このことから、古代から中世の頃にかけて、遺跡の近くに製鉄所関連の施設があったのではないかということが十分推測される。近隣の遺跡で、これほど多くの鉄滓が出土している遺跡はほかには見られない。

このあと、各包含層ごとに出土した金属器を、土器に続いて紹介していく。

第3包含層出土の金属器についてまとめて紹介する。

t14～t24までは器種は釘であると思われるが、t15、t21、t23については棒状のものではあるが器種不明の不明鉄器である。t25は鎌、t26は鋤先である。t27とt28は馬具である。t31は鉄鎌である。t29とt30はカスガイ、t32は釣り針、t33は棒状鉄片、t35はスラッグではない鉄滓である。その他のものは、器種不明である。

t38～t48まではスラッグ、鉄滓である。大きさの大きなものから順に並べてある。大きいものでは、幅が77mmになるものもある。小さいものでは、だいたい1～2cm前後である。

これらのスラッグには泡状の小さな粒のようなものがたくさん含まれているものと、あまり含まれていないものがみられる。これはスラッグのできる工程での違いであり、鉄の純度に関係があるようだ。泡が多いほど純度が低く、完全な炭滓に近いということである。

中世包含層（第2・第1包含層）出土遺物（第116～119図）

00年度調査区の中世包含層である第2・第1包含層からの出土遺物をまとめて紹介する。おおよその時代は、第2包含層は鎌倉時代頃、第1包含層は室町時代頃と思われる。

第2包含層出土遺物

第2包含層の出土遺物については、主に13世紀頃の土師器、瓦器、東播系須恵器、備前陶器、石器、金属器等を検出している。

土師器

243～252は土師器杯である。243は口縁部わずかに内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。244は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部やや外反し丸くおさめる。245は口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。246は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。247は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。248は体部わずかに内彎ぎみに立ち上がる。底部は回転糸切である。249は体部ほぼ直線的に立ち上がる。底部は回転糸切である。250は底部回転糸切である。251は体部まっすぐ立ち上がる。底部は回転ヘラ切後ナデである。252は体部内彎ぎみに立ち上がる。

253～257は土師器皿である。253は口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転糸切後製作台の板目痕である。254は口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。底部は回転ヘラ切後ナデである。255は口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。256は体部ゆるやかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切である。257は体部ゆるやかに立ち上がる。

258は土師器土鍋である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部直下で「く」の字状に外反し端部までは内彎する。端部は方形状を呈する。259は土釜である。端部断面三角形状でやや内外面に拡張する。260は土師器釜である。口縁部内向ぎみに短く立ち上がり、端部断面は凹面状を呈し僅かに外方向に拡張する。261と262は土師器羽釜である。262は口縁部直立ぎみに短く立ち上がり、端部断面は丸くおさめる。口縁直下に外反し下向きの端部断面U字形状の鐙がめぐる。261も同様に口縁部やや内彎ぎみに短く立ち上がり、端部断面は丸くおさめる。口縁直下に下向きの端部断面U字形状の鐙がめぐる。

265と266は土師器播鉢である。265は端部断面方形形状でやや上方に拡張する。266は端部断面方形形状でやや上方に拡張する。どちらも楕目がある。

263、264は土師器こね鉢である。ともに端部厚めの三角形状でやや内外に拡張する。

282は鍋または羽釜の脚部である。283は土釜の脚部である。どちらも断面円形状を呈する。

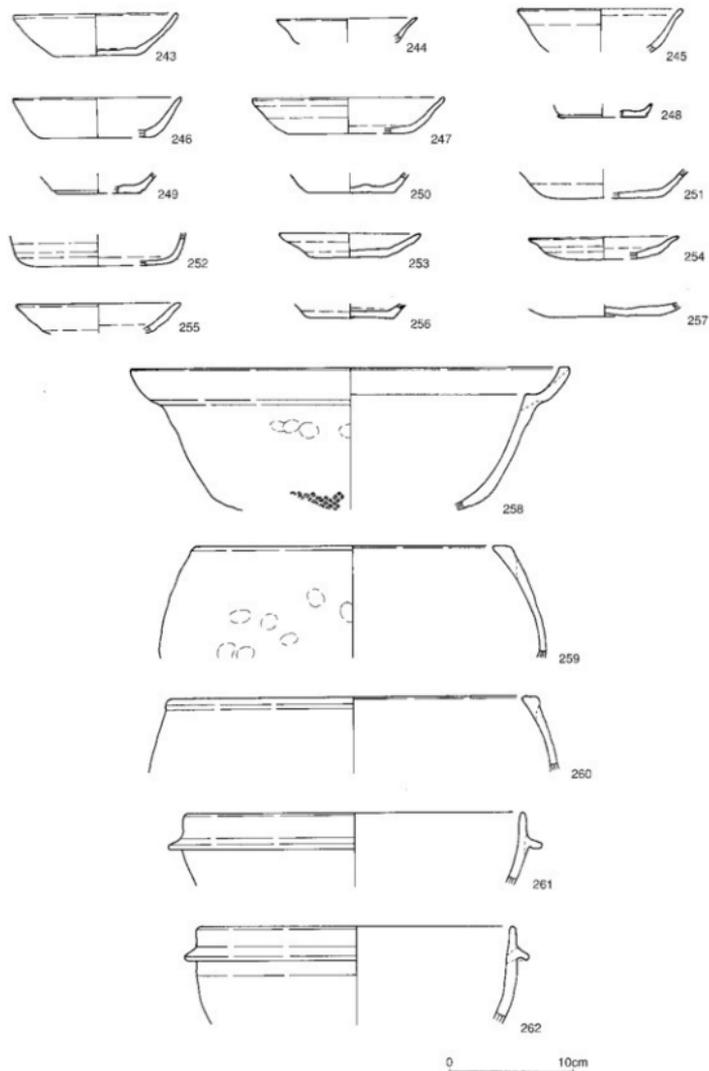
267は土師器甕口である。紡錘形の一部で送風口が一部残存する。

須恵器

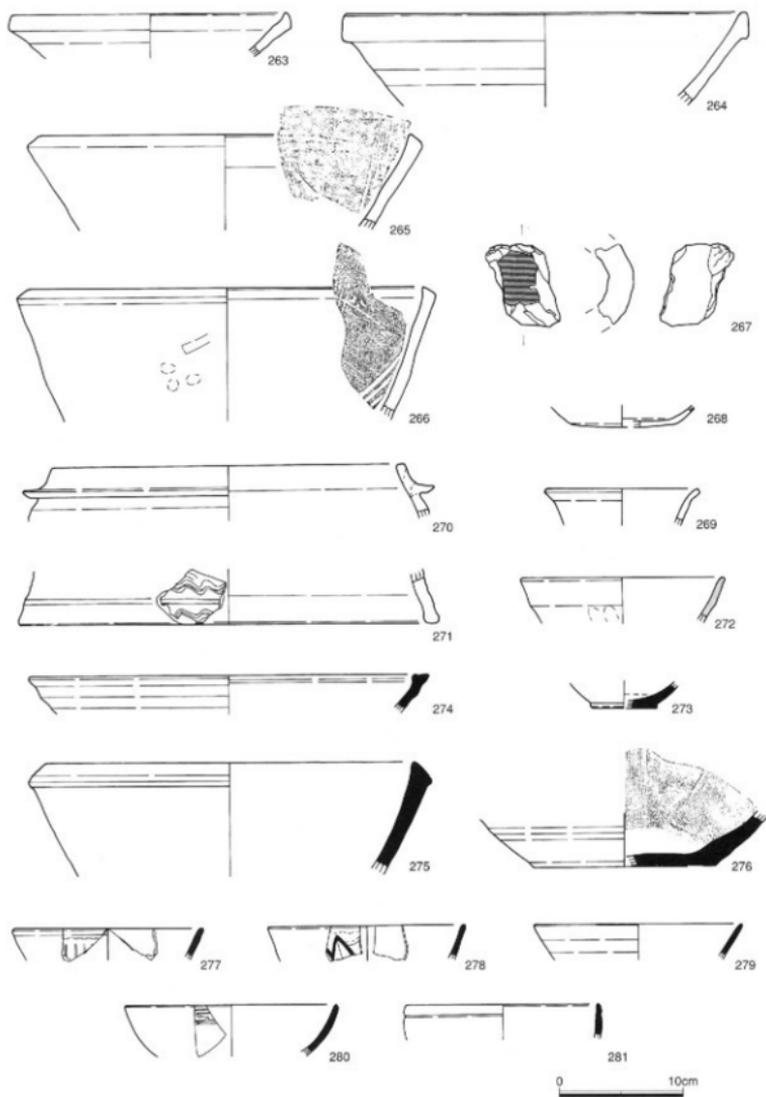
268は須恵器杯である。体部ゆるやかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切である。269は須恵器壺である。口縁部外反して立ち上がり端部は方形状を呈する。

270は須恵器羽釜である。口縁部内彎ぎみに短く立ち上がり、端部断面は方形状を呈する。口縁直下に端部断面三角形状の鐙がめぐる。

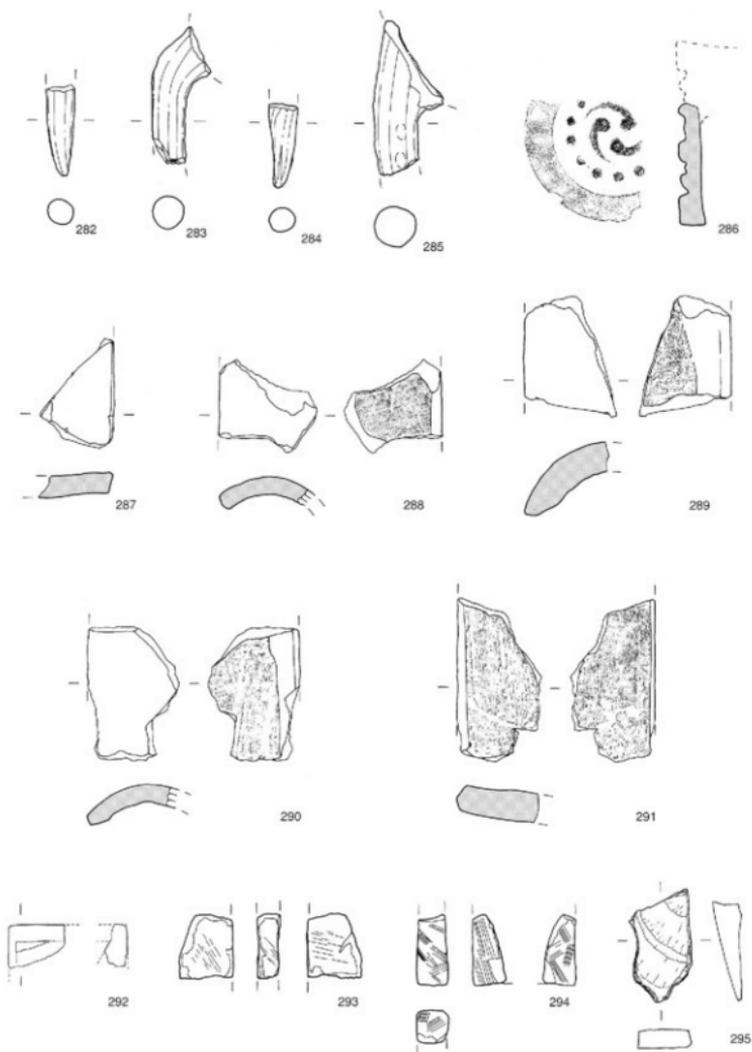
271は須恵器器台である。体部内方向に立ち上がり、底端部は方形状である。外面に波状文様がある。



第116図 第2包含層出土遺物実測図(1)



第117図 第2包含層出土遺物実測図(2)



0 10cm

第118图 第2包含層出土遺物実測図(3)

284は鍋または釜の脚部である。285は羽釜または上鍋の脚部で、厚さは3.4cmである。どちらも断面円形状である。

瓦器・瓦質土器

272は瓦器椀である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反し丸くおさめる。内外面回転ナデ調整である。

286～291は瓦質の瓦である。平瓦、丸瓦、軒丸瓦であるが、291は凸面に縄文タタキが見られる。凹面は布目痕がほとんどである。

陶器

275, 276は備前窯の陶器擂鉢である。275は端部方形状でやや上下に拡張する。内面に摺目がある。276は体部直線的に立ち上がり、内外面はヨコナデで内面に摺目がある。

・緑釉陶器

273は緑釉陶器椀である。体部僅かに内彎ぎみに立ち上がり、削り出しの平高台がつく。釉はグレイみのオリーブグリーンである。

磁器

・青磁

277～280は青磁碗である。口径はいずれも15～17cm前後を測り、277～279は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。釉はいずれもグレイみの黄緑で、277は外面が細蓮弁文、278は筒蓮弁文になっている。280は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。外面に雷文帯が施されている。

・白磁

281は白磁碗である。口径15.6cmを測り、口縁部内彎ぎみに立ち上がり端部丸くおさめる。灰白の胎土に、うすい黄緑の釉がかかる。

石器

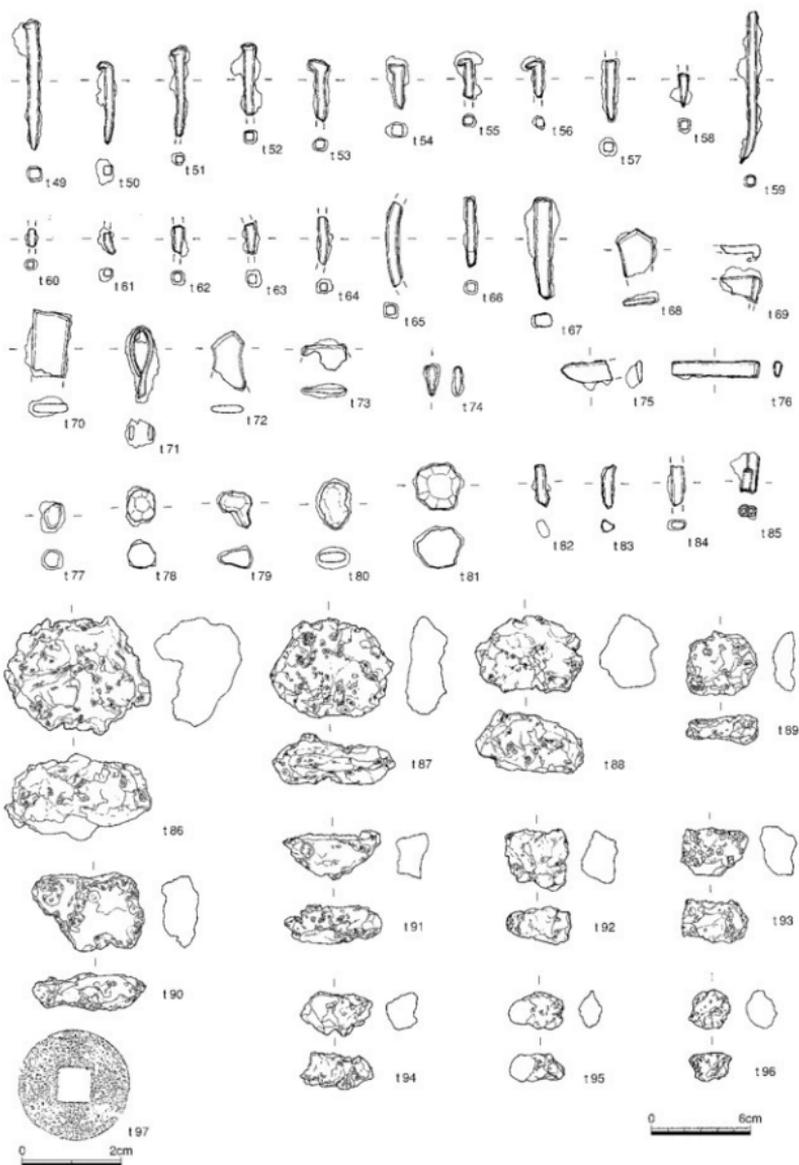
293, 294は砥石である。石材はいずれも凝灰岩である。292は硯で石材は頁岩である。295は礮器で石材はサスカイトである。

金属器

t 49～t 66までの器種は釘である。いちばん長いもので、長さ93.0mmを測る。t 67はタガネか釘である。t 68は鉄鋸である。t 69は鎌の一部である。t 70は板状の鉄板である。t 75とt 76は刀子である。その他のものは、器種不明の鉄器である。

t 86～t 96まではスラッグである。大きさの大きいものから順に並べてある。最大のもので、幅が89mmほどである。小さなものは1cm前後である。泡状の小さな粒のような気泡が多く入っているものと、あまり入っていないものがある。これはスラッグのできる工程での違いであり、鉄の純度に関係がある。泡が多いものほど純度が低く、完全な廃滓に近いということである。

t 97は銭貨で、銅銭である。楷書で「天元□□」（□は不明。背も不明。）と書かれている。



第119图 第2包含層出土遺物実測図(4)

第1 包含層出土遺物（第120～122図）

出土遺物については、主に15～16世紀頃の土師器、瓦器、陶器等の中世土器を検出しているが、新しい時代のものの混入も多少あると思われる。

土師器

296は土師器杯である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は静止糸切後板目痕である。

297は土師器小皿である。口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。

298, 299は土師器皿である。298は口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切後製作台板目痕である。299は口縁部ゆるやかに立ち上がり、端部近くで外反し丸くおさめる。

301, 302は土師器鍋である。301は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部近くで「く」の字形に外反し、端部断面方形状を呈する。302は同様に口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部近くで「く」の字形に外反し、端部断面方形状でやや外部に拡張する。外面に格子目タタキが見られる。

300は土師器土鍋である。口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部近くで「く」の字形に外反し、端部断面凹面状を呈する。

304は土師器釜である。口縁部内向ぎみに短く立ち上がり、端部断面は平坦で中央がやや凹面状であり内外面に拡張する。

303, 305, 306は土師器土釜である。303は体部内彎ぎみに立ち上がり、端部断面は凹面状で内外に拡張する。305は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部は上方に拡張し凹面状を呈する。外面下部に格子目タタキがある。306は体部内彎ぎみに立ち上がるが、端部近くは直立し端部断面は凹面状で内外に拡張する。外面に格子目タタキがある。

307は土師器播鉢である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部は方形状である。内面に摺目（6条/1.5cm）がある。

308はこね鉢である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部は方形状である。注ぎ口が付いている。

須恵器

309は須恵器高杯である。脚部で、内向ぎみに立ち上がる。端部は方形状を呈する。内面ヨコナデ後ヘラ描きである。

310は須恵器高台付杯である。体部ほぼ直線的に立ち上がる。断面凹面状の低い高台が貼り付けられている。

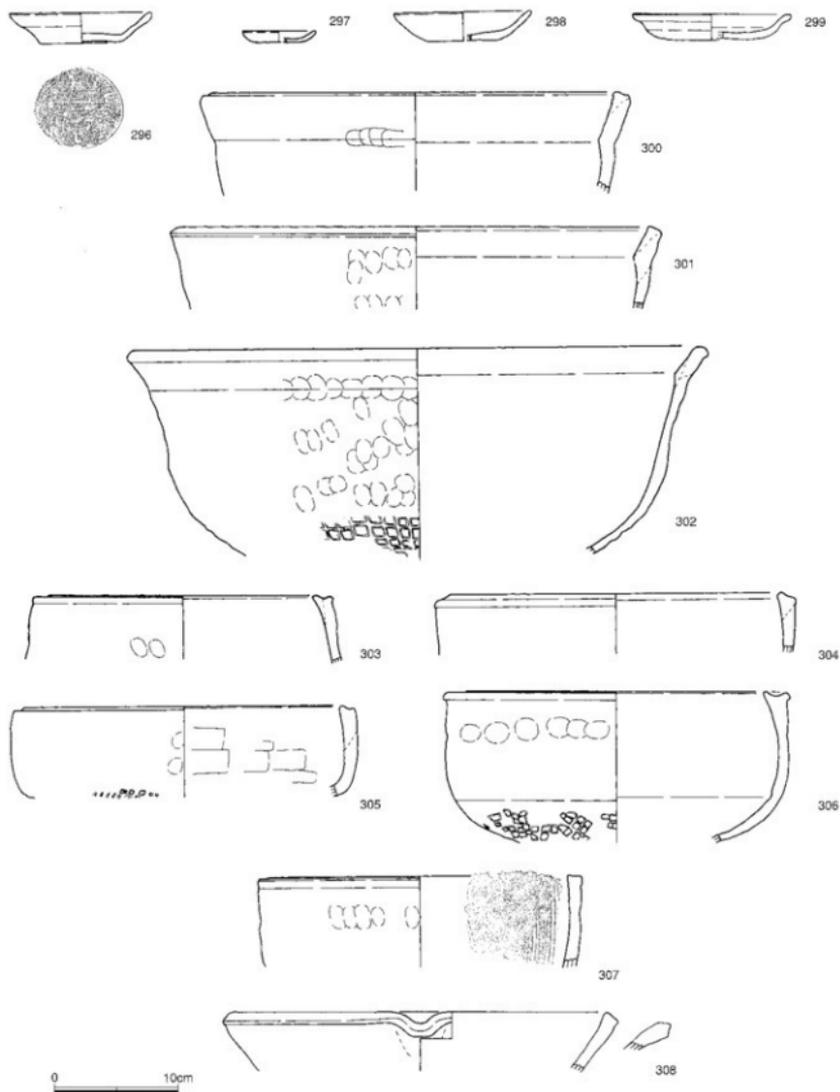
312は須恵器甕である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部は平坦でやや内外に拡張する。

陶器

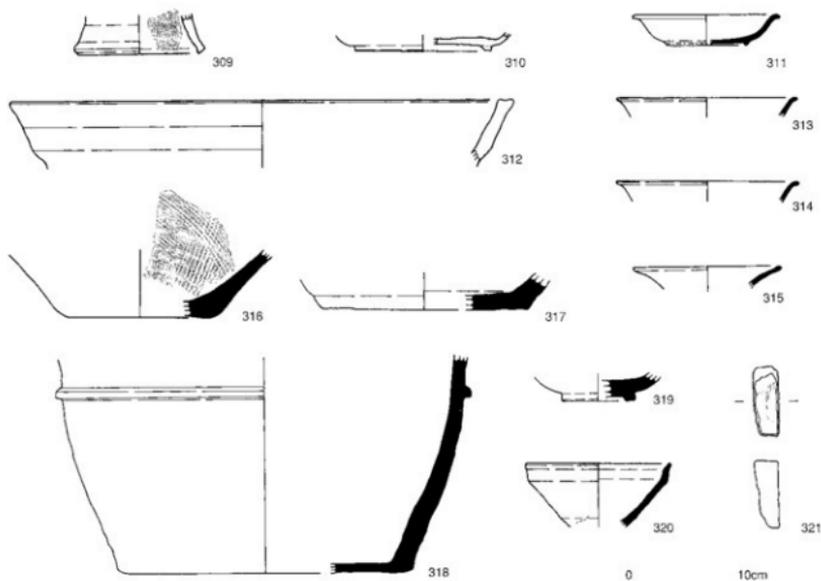
320は陶器天日碗である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部近くで「く」の字形に内彎し、端部で同様に外反して先端は丸くおさめる。内外面鉄釉がかかる。

318は備前窯の陶器鈔付甕である。体部やや内彎ぎみに立ち上がる。外面上方に端部断面U字形の鈔がめぐる。

316, 317は陶器播鉢である。316は体部ほぼ直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ切後ナデであり内面に摺目がある。317も体部ほぼ直線的に立ち上がり、内面に摺目がある。



第120图 第1包含層出土遺物実測図(1)



第121図 第1包含層出土遺物実測図(2)

磁器

・青磁

319は青磁碗である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、断面方形の削り出しの高台がつく。軸はグレイみのオリブである。

・白磁

311は白磁高台付皿である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部近くで外反し先端丸くおさめる。断面逆三角形の高台がつく。軸は白である。

313, 314は白磁碗である。ともに口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部近くで外反し先端丸くおさめる。313は灰白, 314は白の釉がかかる。

315は白磁壺である。口径11.8cmを測り、口縁部ゆるやかに立ち上がり端部丸くおさめる。黄みの白色の釉がかかる。

石器

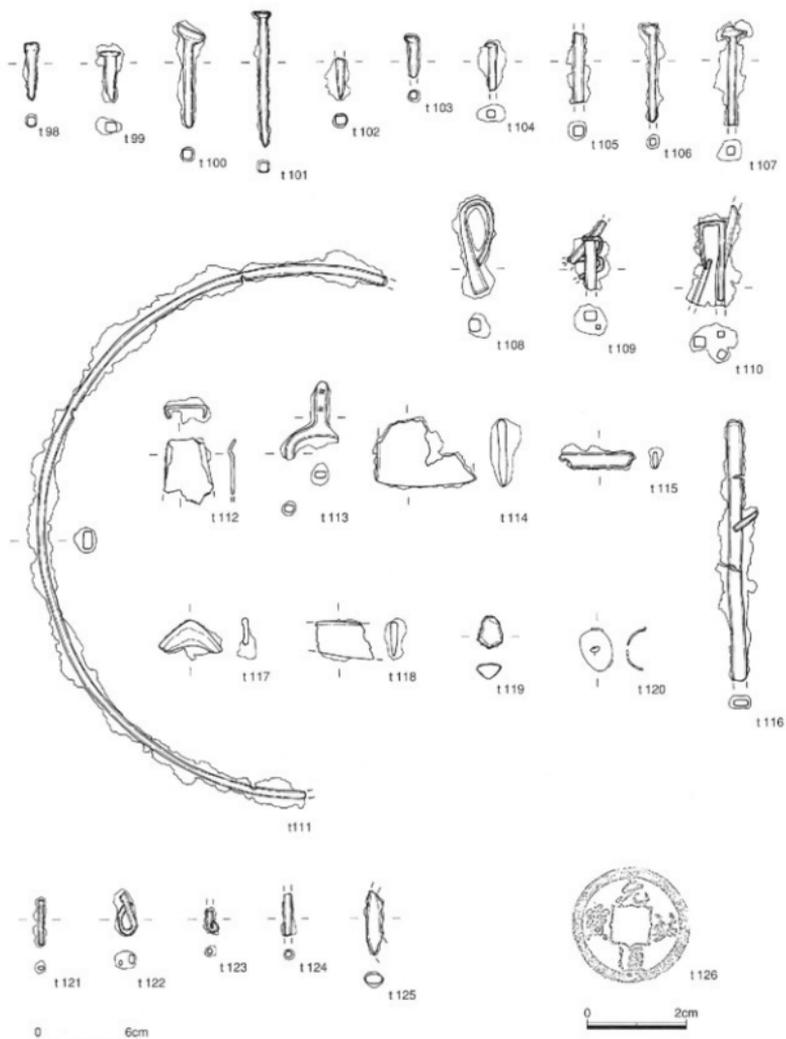
321は砥石である。石材は砂岩である。時代等は不明である。

金属器

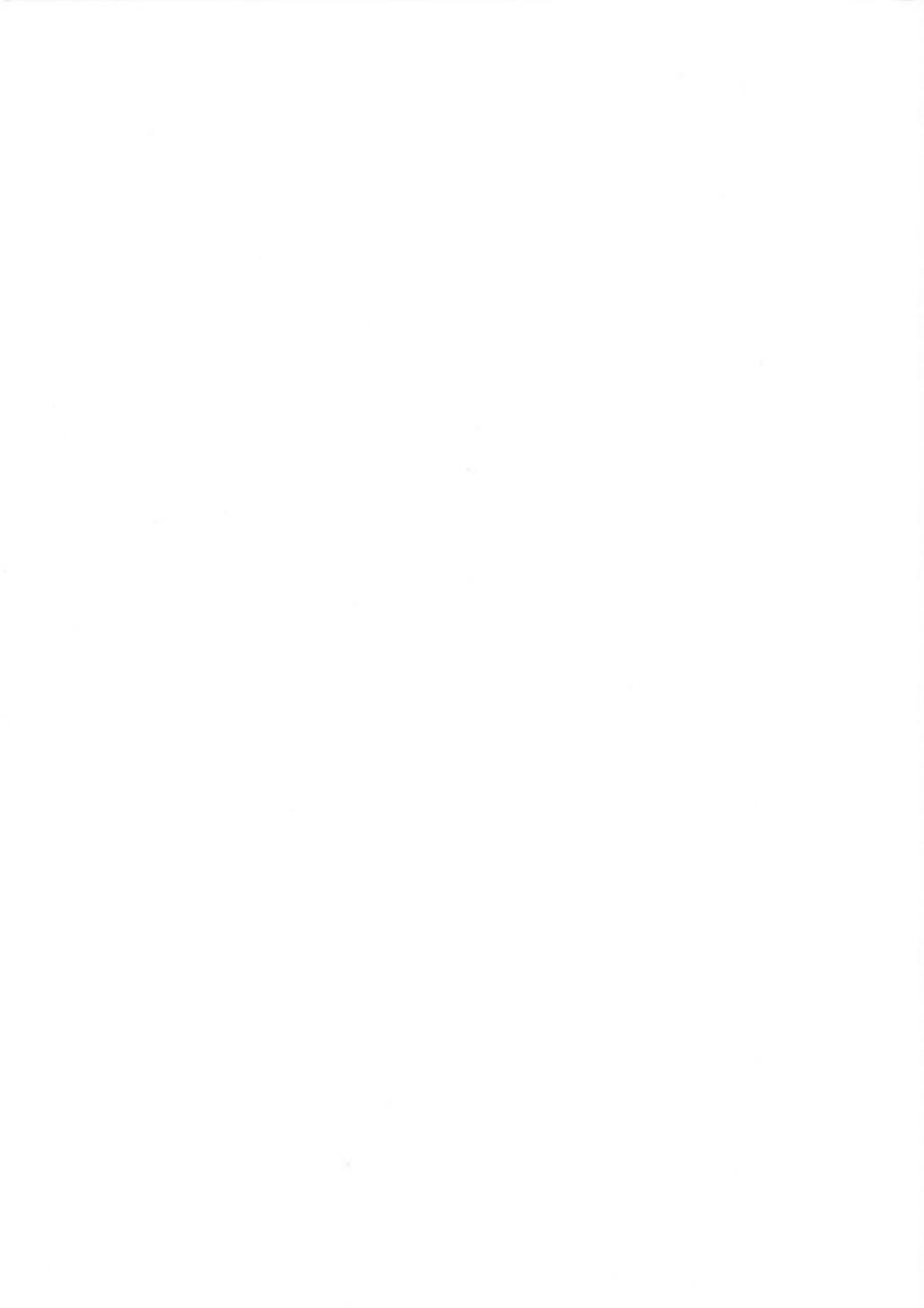
t 120の銅製鈴以外は、すべて鉄製品である。t 98～t 107までは、器種はすべて釘である。いちばん長いもので、長さ102.0mmを測る。t 109は棒状鉄片および釘の混じったものである。t 113は馬具である。t 114は鋤先である。t 115は刀子である。t 116, t 121, t 124は棒状鉄片である。t 117は火打ち金である。

t118は直刀である。t120は銅製の鈴である。その他のものは、検討してみたが器種不明であった。

t126は銭貨で、銅銭である。行書で「元祐通寶」と書かれている。(無背) 北宋時代のものである。



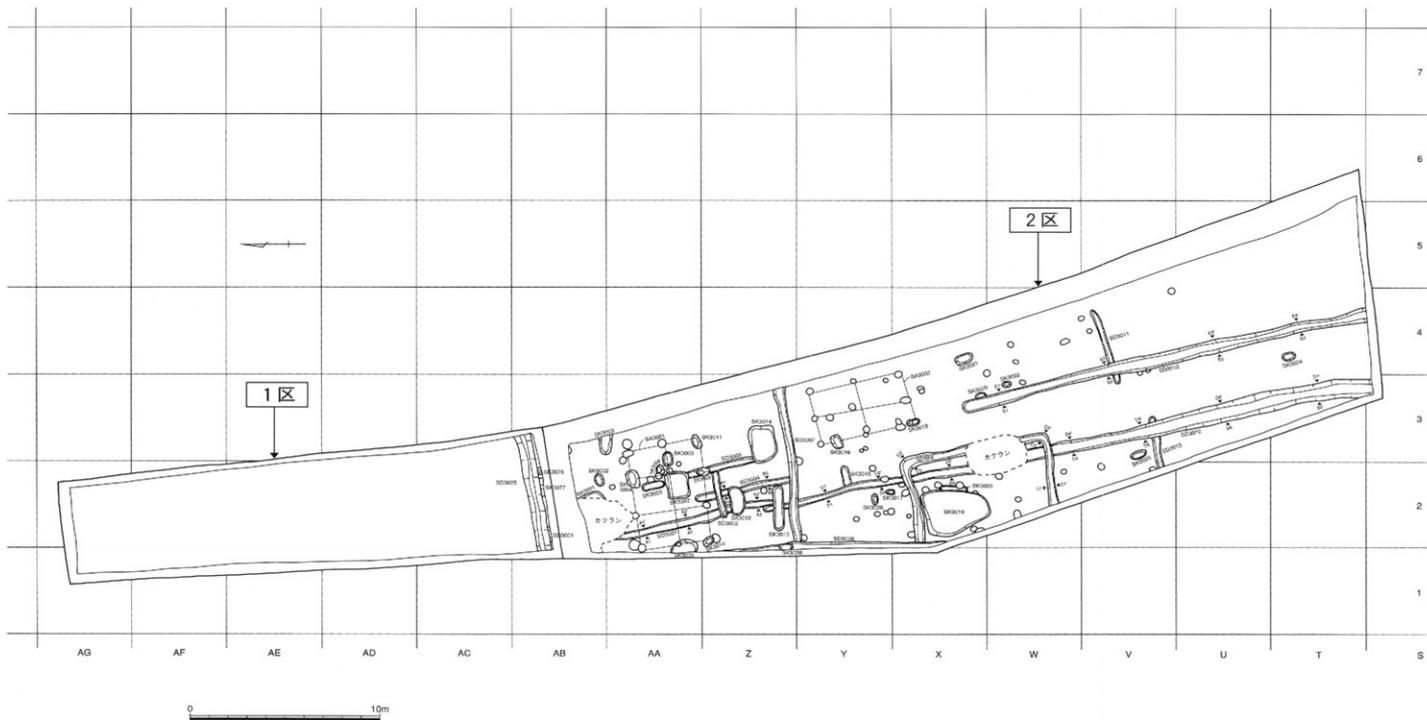
第122図 第1包含層出土遺物実測図(3)



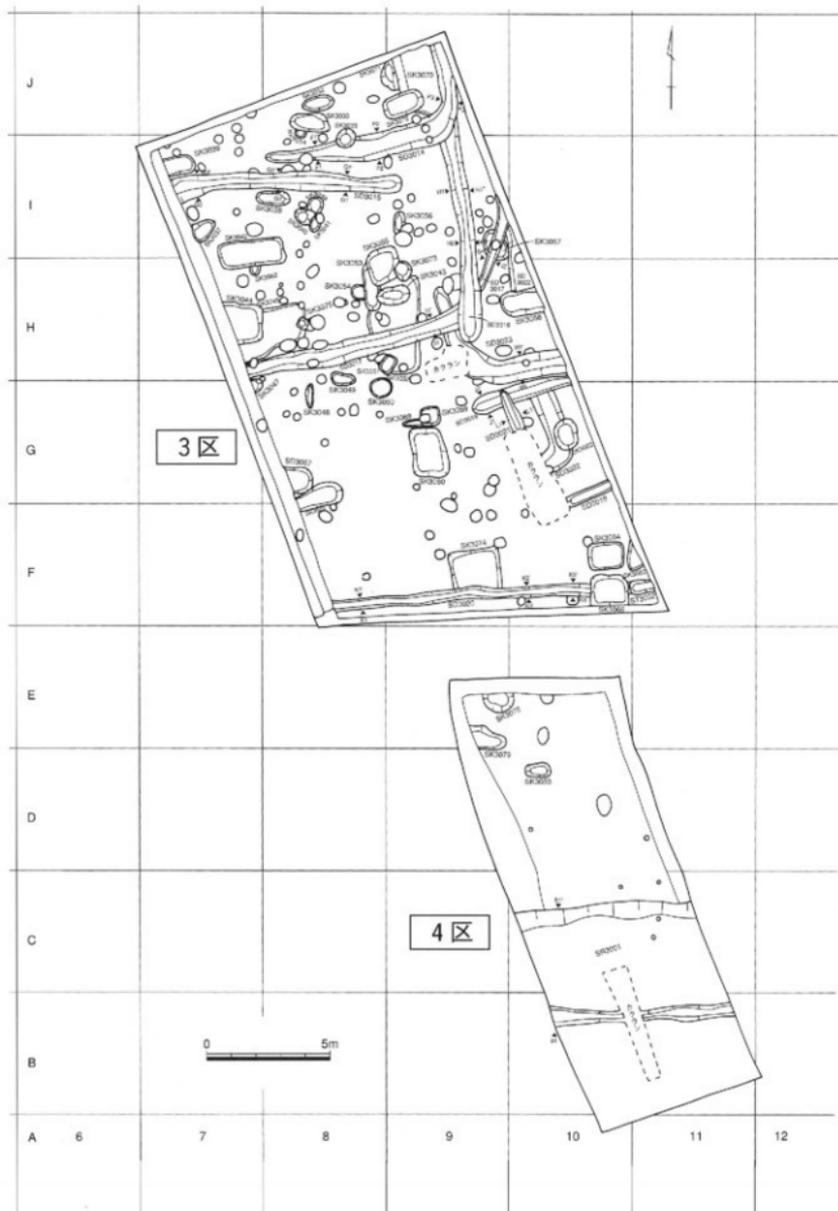
Ⅲ 調 査 成 果

第 2 次調査（2001年度調査）・調査成果

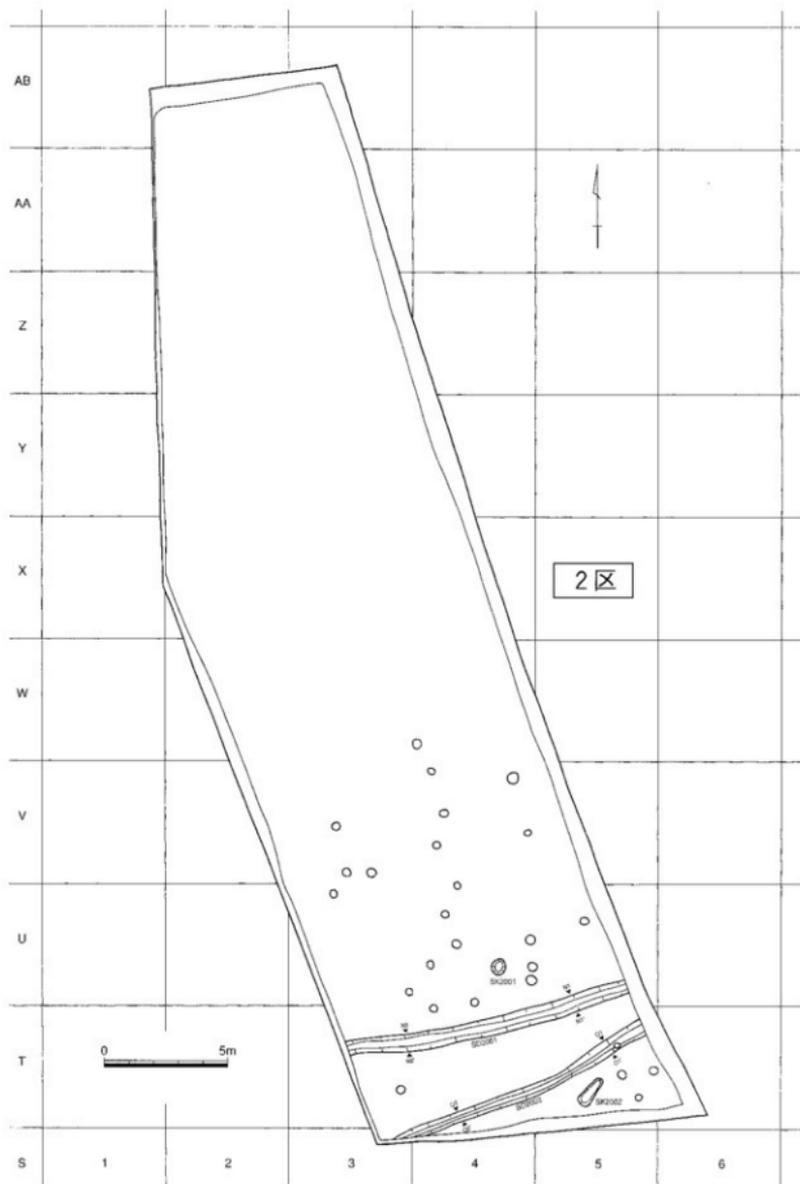
1. 本章は、古町遺跡の第2次調査（2001年度調査）の発掘調査報告である。
2. 本章の遺構番号・遺物番号は第2次調査区のための独立した通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
よって、第1次調査（2000年度調査）の報告は、前章にて別に記述した。



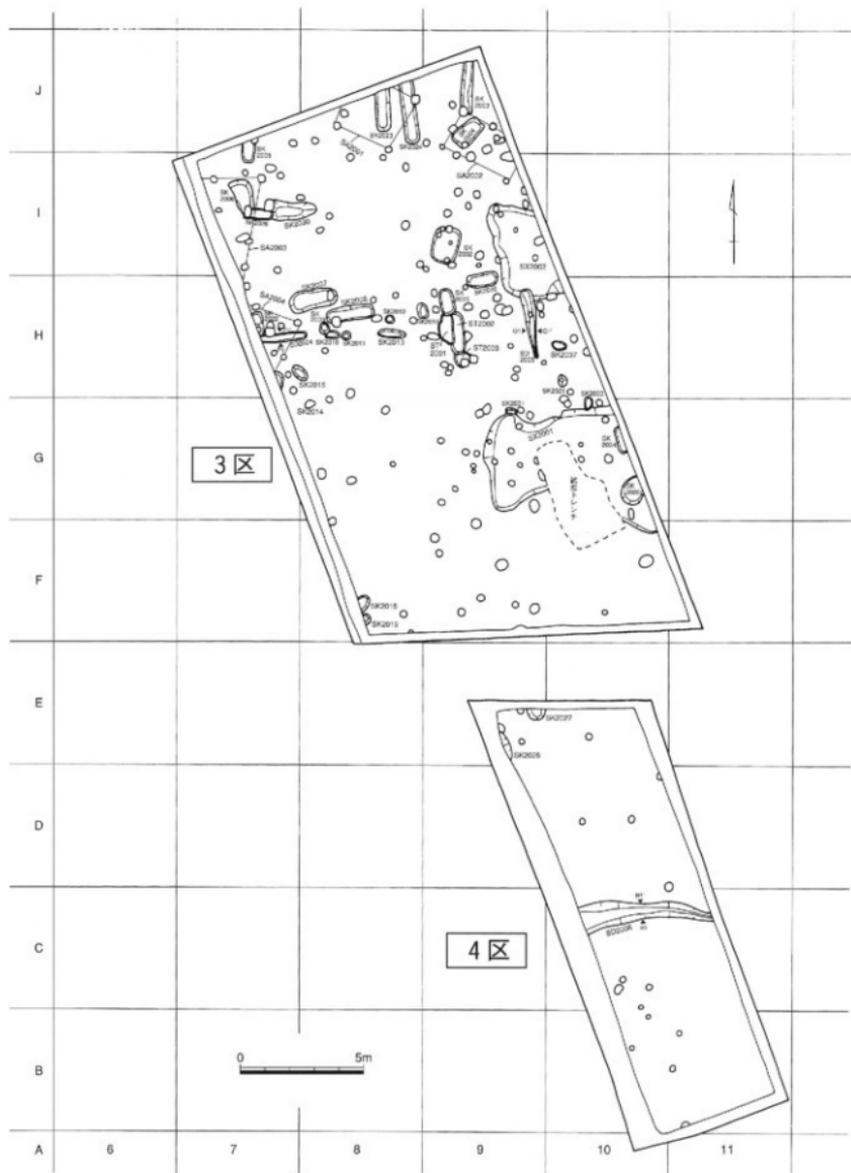
第124図 第2次(2001年度)調査区 1区・2区 第3遺構面遺構配置図



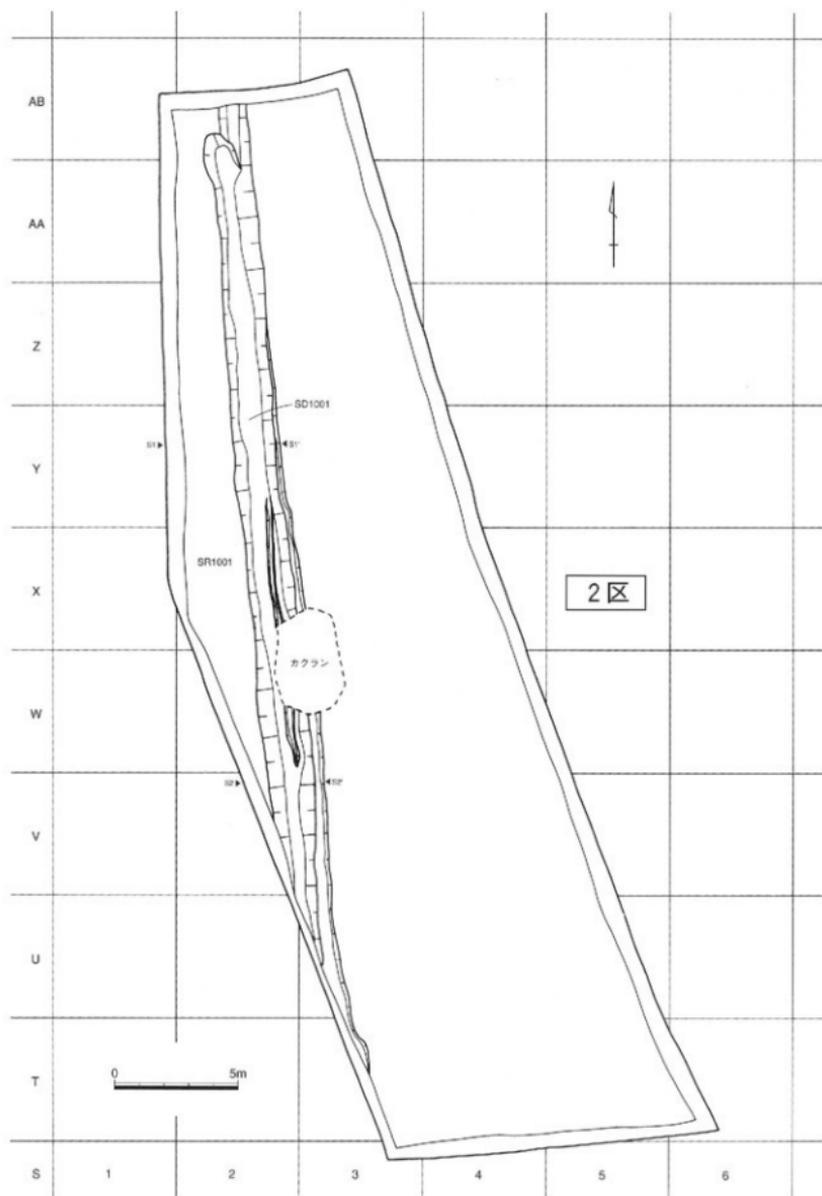
第125図 第2次(2001年度)調査区3区・4区 第3遺構面遺構配置図



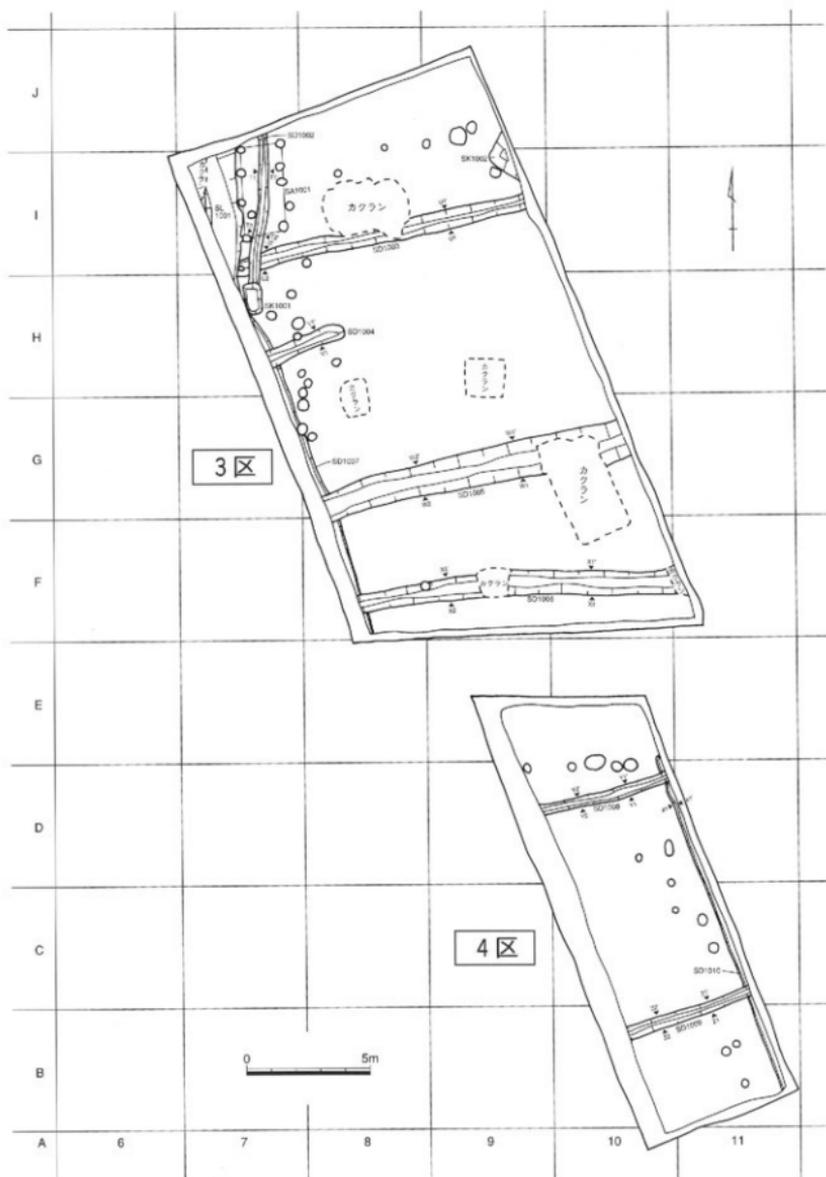
第126図 第2次(2001年度)調査区2区 第2遺構面遺構配置図



第127図 第2次(2001年度)調査区3区・4区 第2遺構面遺構配置図



第128図 第2次（2001年度）調査区2区 第1遺構面遺構配置図



第129図 第2次(2001年度)調査区3区・4区 第1遺構面遺構配置図

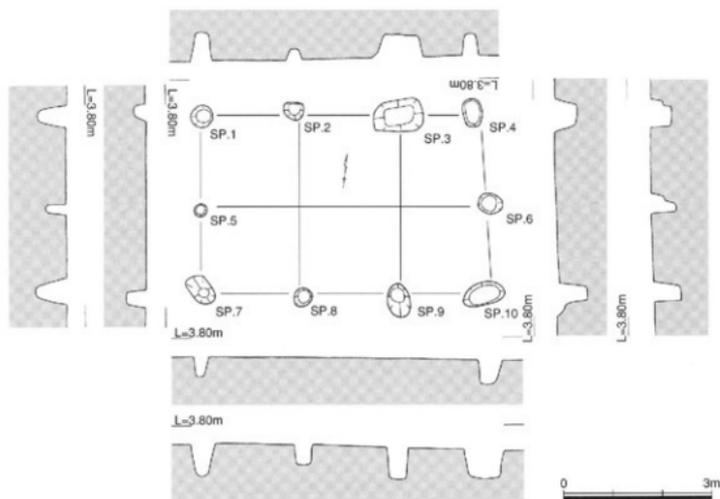
第2次調査（2001年度調査）・調査成果

2001年度調査区も、古代のものを中心として中世にかけて幅広く出土している。遺物の出土総点数は35000点を超え、すべての遺物や遺構をここで取り上げることも枚数の都合から不可能である。したがって、本遺跡の特徴を示す重要な遺構や実測遺物が出土した遺構に精選し、可能な限り詳細に述べたい。

(1) 奈良・平安時代の遺構と遺物

掘立柱建物

掘立柱建物 SA3001（第130図）



第130図 SA3001実測図

01年度2区の北部Z-2・3、AA-2・3グリッドに位置し、10基の柱穴から構成され、規模は桁行3間×梁間2間（5.7m×3.7m）、床面積21.09㎡を測り、棟方向はN-85°-Eである。柱穴は円形、楕円形を呈し、直径37～105cm、深さ24～62cmを測り、埋土は主に炭化物を含む灰オリブ色シルトを基調としている。柱穴SK3004内部からは土師器、黒色土器、SP3004内部からは土師器、SP3011内部からは土師器が出土している。その他の柱穴からも土師器等が出土しているが、いずれも細片のみであった。

出土遺物（第131図）

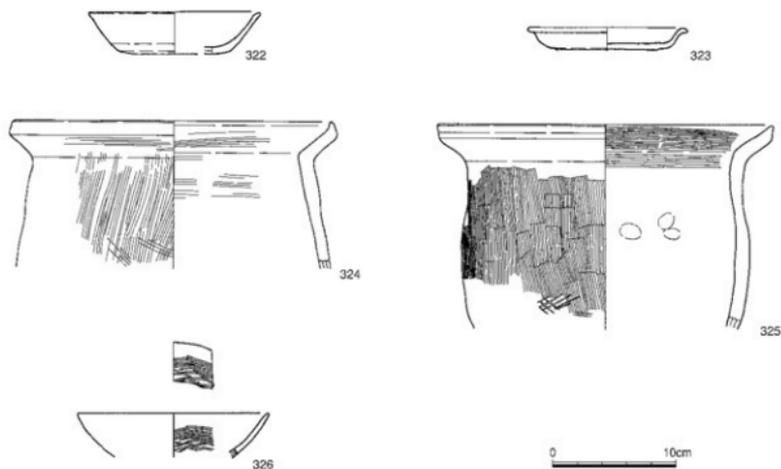
326はSK3004の出土遺物である。326は黒色土器A類碗である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり端部丸くおさめる。内面はミガキ調整である。

322, 323, 324はSP3004の遺物である。322は土師器杯である。口径13.8cmで口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部付近で僅かに外反し先端は丸くおさめる。底部は回転ヘラ切で、内外面に赤色塗彩が施されている。

323は土師器皿である。口縁部やや内彎ぎみにゆるやかに立ち上がり、端部付近で外反し先端は丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。

324は土師器甕である。口縁部直線的に立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。端部上方に拡張し先端は丸くおさめる。内外面ハケ調整である。

325はSP3011の遺物である。325は土師器甕である。口縁部直線的に立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。端部上方にやや拡張し先端は丸くおさめる。内外面ハケ調整で、外面はタタキも見られる。

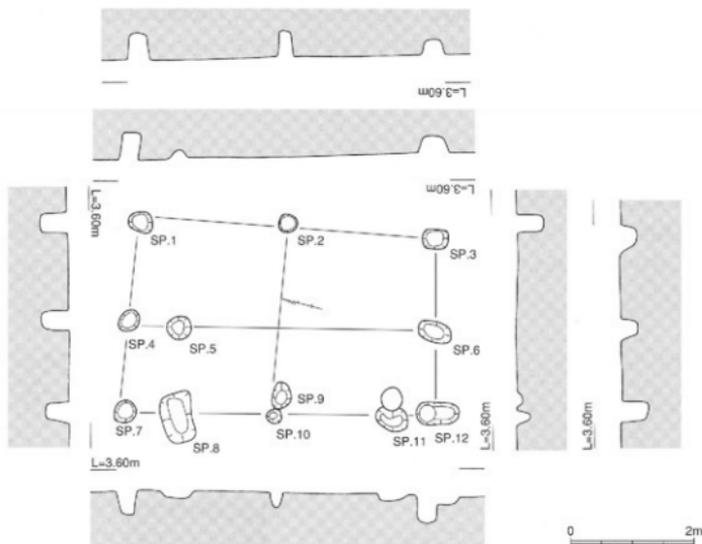


第131図 SA3001各柱穴出土遺物実測図

掘立柱建物 SA3002 (第132図)

01年度2区の北部、X-3, Y-3グリッドに位置し、12基の柱穴から構成され、規模は桁行3間×梁間2間 (3.1m×5.0m)、床面積15.50㎡を測り、棟方向はN-15°-Wである。柱穴は隅丸長方形、円形、楕円形を呈し、直径24~80cm、深さ10~46cmを測り、埋土は主に炭化物を含む灰色シルト、灰オリーブ色シルト等である。

各柱穴内からは土師器、須恵器等が出土しているが、いずれも細片のみで実測可能なものはなかった。



第132図 SA3002実測図

溝

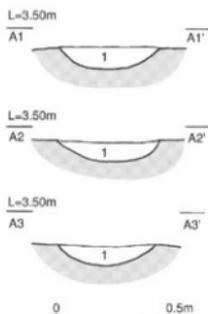
溝 SD3001 (第133図)

01年度2区の第3遺構面北部に位置する、南北方向の溝である。一部が別の溝や土坑に切られるものの残存長8.4m、幅35～60cm、深さ8cmを測る。断面はレンズ状であり、土層は炭化物を含んだ灰オリブシルト1層のみである。出土遺物は土師器、陶器である。

出土遺物 (第134図)

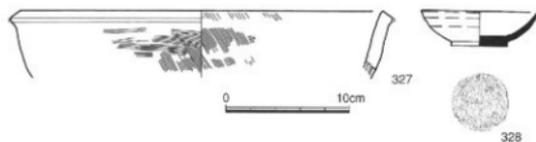
327は土師器鉢である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部尖りきみにおさめ下方に拡張する。内外面ハケ調整である。

328は灰軸陶器高台付皿である。口径9.6cm、高台部径4.6cmを測り、形態は口縁部内彎ぎみに立ち上がり端部丸くおさめる。底部は回転糸切である。



1. 灰オリブ色 5Y5/2 シルト炭化物を含む

第133図 SD3001
土層断面実測図



第134図 SD3001出土遺物実測図

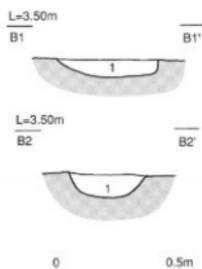
溝 SD3004 (第135図)

01年度2区の第3遺構面北部に位置する、南北方向の溝である。一部が別の溝や土坑に切られるが、残存長5.05m、幅35～45cm、深さ8～10cmを測る。断面はレンズ状であり、埋土は炭化物を含む灰オリブシルト1層のみである。出土遺物は土師器、須恵器であるが、実測可能な遺物は2点のみであった。

出土遺物 (第136図)

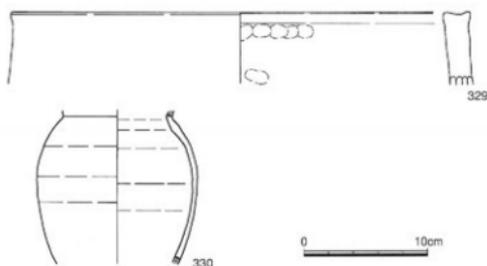
329は土師器竈である。口径37.0cmで、口縁端部は凹面状である。内面にユビオサエがある。

330は須恵器壺である。頸部9.0cmで、体部内彎して立ち上がり頸部で外反する。



1. 灰オリブ色 5Y5/2 シルト
炭化物を含む

第135図 SD3004
土層断面実測図

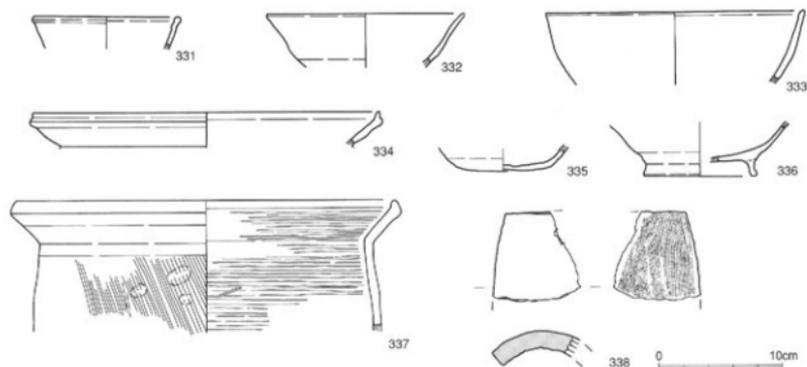


第136図 SD3004出土遺物実測図

溝 SD3009 (第138図)

01年度2区の第3遺構面中央西部に位置する、「コ」の字形に曲がった形状の溝である。残存長15.8m、幅35～75cm、深さ10～22cmを測り、断面はレンズ状である。埋土は炭化物を含んだ灰オリブシルトを基調に2層に分かれる。

出土遺物は土師器の杯、甕等と丸瓦である。



第137図 SD3009出土遺物実測図

出土遺物 (第137図)

331～335は土師器杯である。331は口径12.0cmで、口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。332は口径16.0cmで口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部手前で僅かに外反し先端丸くおさめる。333は口径21.0cmで内外面に赤色塗彩が施されている。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。335は底径7.4cmで、体部外上方にやや内彎ぎみに立ち上がる。

336は土師器高台付杯である。高台部径は9.0cmで体部外やや内彎ぎみに立ち上がる。断面方形状の高めの高台が貼り付けられている。

334, 337は土師器壺である。334は口径28.0cmで口縁部直線的に立ち上がり、端部は尖りぎみにおさめ上方に拡張する。337は口径30.6cmで口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。先端は尖りぎみにおさめ、上方に拡張する。

338は須恵質丸瓦である。厚さ1.4cmで凹面は布日痕である。

溝 SD3010 (第139図)

01年度2区の第3遺構面中央部に位置する、2区をほぼ縦断する南北方向の溝である。残存長32.5m、幅30～120cm、深さ7～18cmを測る。断面は逆台形状であり、南端は調査区外にかかる。埋土は炭化物を含む灰オリブシルト、炭化物を含む灰シルトである。出土遺物は土師器、黒色土器、須恵器、土製品、鉄器等である。数多くの遺物が出土した。実測できた物も多かった。

出土遺物 (第140～141図)

339は土師器杯である。口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部手前で僅かに外反し先端丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。

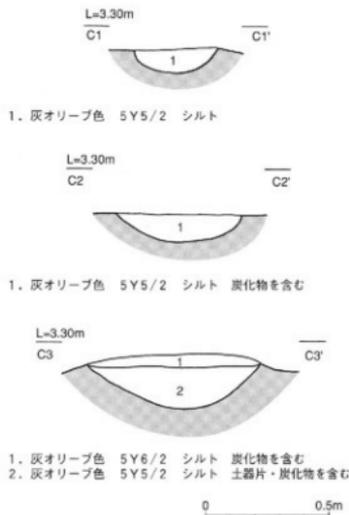
340～342は土師器碗である。340は口縁部内彎ぎみに立ち上がり端部丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。341は体部外上方に立ち上がる。「ハ」の字形で断面U字形の高台が貼り付けられている。342は体部外やや内彎ぎみに立ち上がる。「ハ」の字形で断面U字形の高めの高台が貼り付けられている。343は土師器壺である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり端部手前で「く」の字状に外反する。先端は尖りぎみにおさめ、上方に拡張する。

344は黒色土器A類碗である。口縁部僅かに内彎ぎみに立ち上がる。「ハ」の字形で断面U字形の高台が貼り付けられている。内面はミガキ(幅3mm)である。

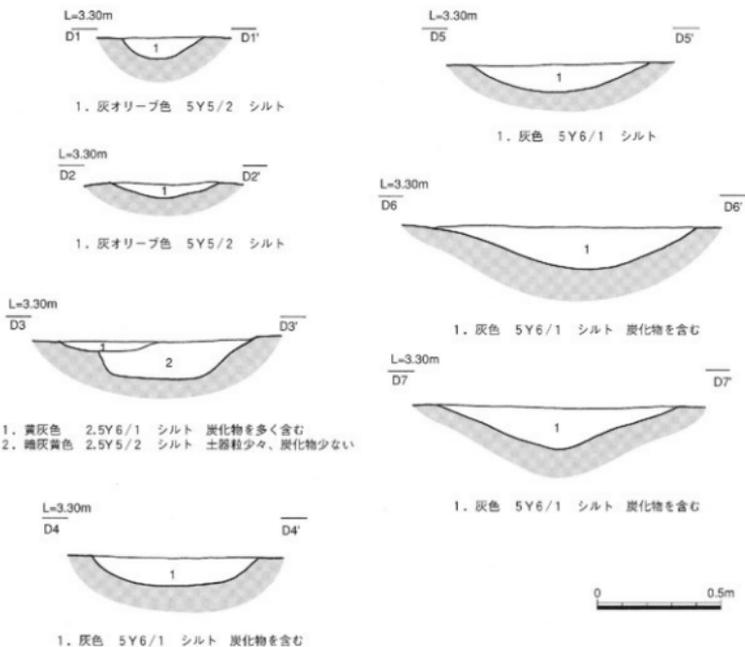
345は須恵器高台付壺である。体部外上方に直線的に立ち上がる。高台部径9.2cmであるが、高台部は欠損している。

346～360はすべて土師質紡錘状土錘である。全て長さ4.3～5.6cm、穿孔径は2.5～4.5mmを測る。

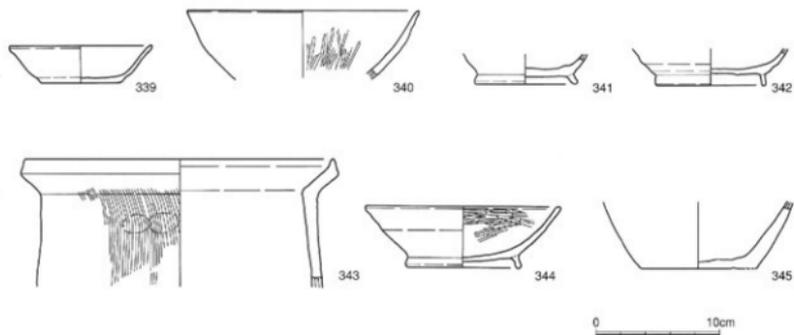
t 127, t 128は鉄器である。器種はt 127が釘、t 128が鉄鏝である。



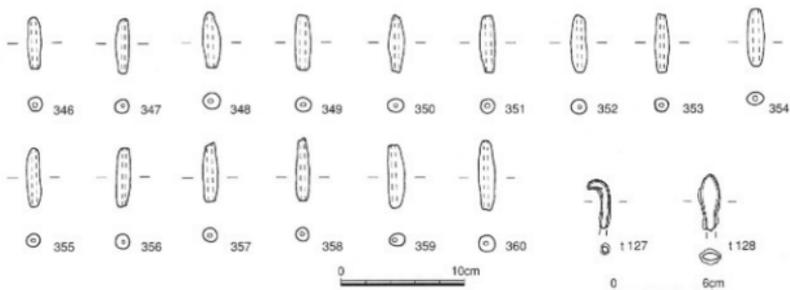
第138図 SD3009土層断面実測図



第139図 SD3010土層断面実測図



第140図 SD3010出土遺物実測図(1)



第141図 SD3010出土遺物実測図(2)

溝 SD3012 (第143図)

01年度2区の第3遺構面南部に位置する、南北方向の溝である。2区のちょうど中央部分を走り、南端は調査区外にかかる。残存長21.5m、幅55~85cm、深さ14~16cmを測る。断面はレンズ状であり、埋土は炭化物を含む灰オリブシルト1層のみである。

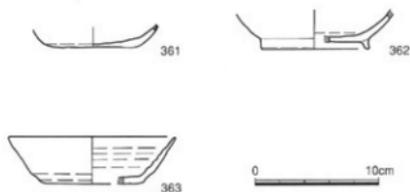
出土遺物は土師器、須恵器である。

出土遺物 (第142図)

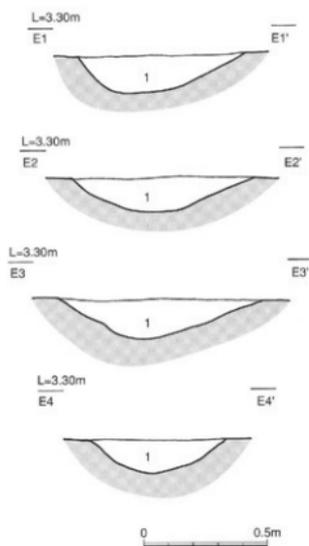
361は土師器杯である。体部外上方に直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ切で、内面に赤色塗彩が施されている。

362は土師器椀である。体部外上方に内彎ぎみに立ち上がる。断面U字形の高台が貼り付けられている。底部は回転ヘラ切で、内外面に赤色塗彩が施されている。

363は須恵器杯である。口縁部僅かに内彎して立ち上がり、端部丸くおさめる。



第142図 SD3012出土遺物実測図



1. 灰オリブ色 SY5/2 シルト 炭化物を含む

第143図 SD3012土層断面実測図

溝 SD3014 (第144図)

01年度3区北部に位置する、L字形にカーブした溝である。残存長10.8m、幅50~120cm、深さ22~24cmを測る。断面はU字形状であり、北端は調査区外にかかる。埋土は炭化物を少し含んだにぶい黄褐色シルト、炭化物を含んだ褐色シルト、オリーブ褐色シルト、灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、陶器、石器等である。数多くの遺物が出土した。実測できた物も多かった。

出土遺物 (第145図)

364~375は土師器杯である。367, 368, 371, 372, 375はいずれも、口縁部直線的に立ち上がり、端部近くで外反し先端丸くおさめるタイプの形状である。364, 365, 369, 370, 374, 378は端部で外反しないで先端丸くおさめる形状である。366は口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部付近で僅かに外反し先端丸くおさめる。366~369, 374は内外面に赤色塗彩が施されている。これらの土師器杯はいずれも口径が12.0cm~15.5cm、器高3.0cm~4.0cm、底径6.0~9.2cm前後である。

376, 377は土師器高台付杯である。376は口縁部直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。断面逆三角形形状の高台が貼り付けられている。377は口縁部外上方に直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。

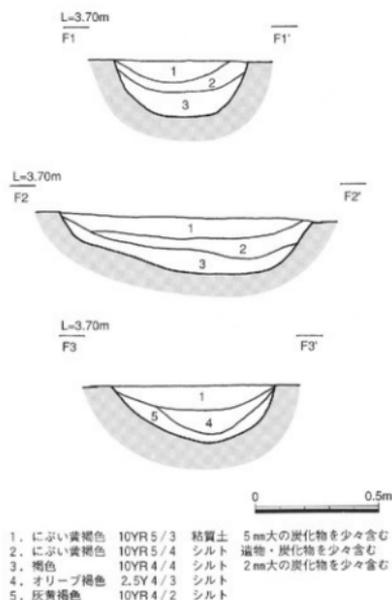
379, 380は土師器皿である。379は口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部付近で外反し先端丸くおさめる。口縁内面に凹線がある。380は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。

381~383は土師器碗である。381は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。382は体部外上方に立ち上がる。断面逆三角形形状の高台が貼り付けられている。ともに内外面に赤色塗彩が施されている。383は体部外上方に立ち上がる。断面U字形状の高台が貼り付けられている。

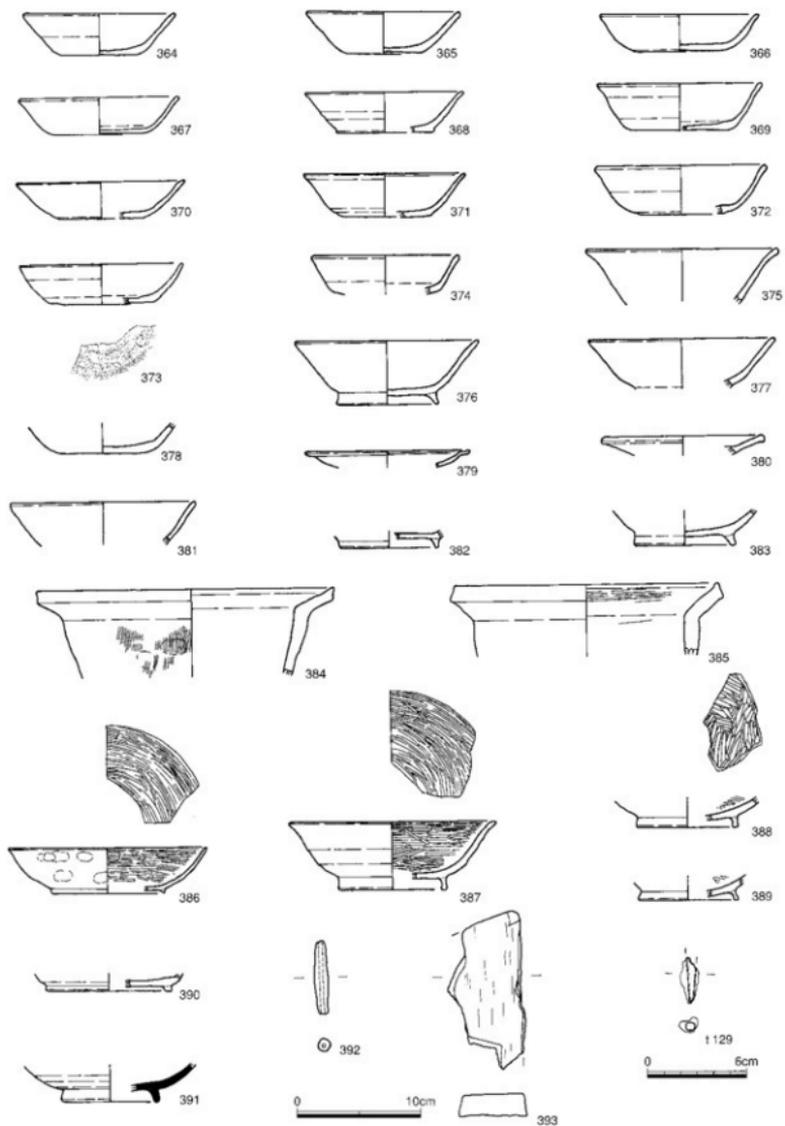
384, 385は土師器甕である。384は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。先端は尖りぎみにおさめ、上方に拡張する。内外面はハケ調整である。385は同様に口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。先端は尖りぎみにおさめ上下に拡張する。内面ハケ調整である。

387は黒色土器A類高台付杯である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部僅かに外反して丸くおさめる。「ハ」の字形で断面U字形状の高台が貼り付けられている。

386, 388, 389は黒色土器A類碗である。386は口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。断面逆三角形形状の高台が貼り付けられている。389は体部外上方に立ち上がる。断面U字形状の高台が貼り付けられている。388は体部外上方に内彎ぎみに立ち上がる。断面U字



第144図 SD3014土層断面実測図



第145图 SD3014出土遺物実測図

形状の高台が貼り付けられている。いずれも、内面はミガキ調整である。

390は須恵器高台付杯である。体部外上方に内彎ぎみに立ち上がる。断面方形の高台が貼り付けられている。

391は灰釉陶器椀である。体部外上方に内彎ぎみに立ち上がる。断面U字形の高台が貼り付けられている。

392は土師質の紡錘状土錘で、穿孔径は3.0mmである。

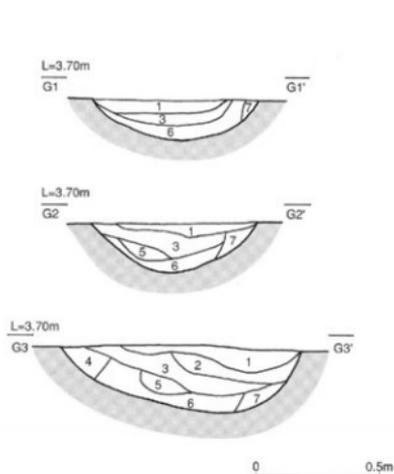
393は砥石である。石材は砂岩である。

t129は鉄器である。器種は鉄鏃で、残存長は31.5mmである。

溝 SD3015 (第146図)

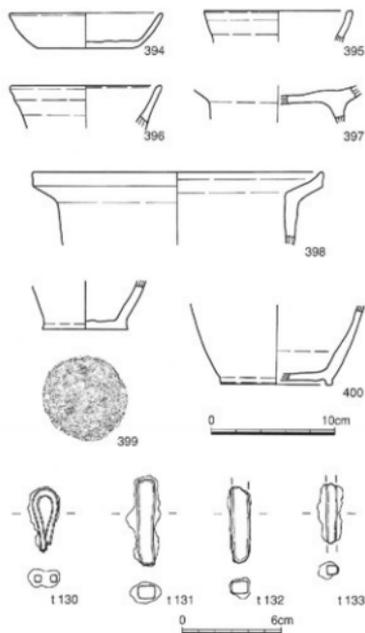
01年度3区北部に位置する、東西方向の溝である。残存長9.1m、幅50~80cm、深さ16~26cmを測る。断面はU字形であり、西端は調査区外にかかる。埋土は炭化物を多く含む褐灰色シルト、炭化物を多く含む灰黄褐色シルト、炭化物を含む暗灰黄色シルト、黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、オリーブ褐色シルトである。

出土遺物は土師器、鉄器である。実測できた物も多かった。



1. 褐灰色 7.5YR 4/1 シルト
5cm大の土器片あり、炭化物を多量に含む
2. 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト 炭化物多量に含む、焼土含む
3. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト
炭化物を含む(上2層より少ない) 土器類少量含む
4. にぶい黄褐色 10YR 4/3 シルト
炭化物は、ほとんど含まないが少量の土器粒を含む
5. 黄褐色 2.5Y 5/3 シルト 炭化物微量に含む
6. にぶい黄褐色 10YR 5/3 シルト 炭化物微量に含む
7. オリーブ褐色 2.5Y 4/3 シルト 微量の土器粒を含む

第146図 SD3015土層断面実測図



第147図 SD3015出土遺物実測図

出土遺物（第147図）

394～396は土師器杯である。いずれも、口縁部は直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。394の底部は回転ヘラ切である。

397は土師器高台付皿である。体部外上方に立ち上がる。高めの高台がつくが、欠損のため形状は不明である。

398は土師器甕である。口径23.4cmで、口縁部は直線的に立ち上がり端部手前で「く」の字状に外反する。先端は尖りぎみにおさめ、上方に拡張する。

399は須恵器壺である。体部外上方に直線的に立ち上がる。400は須恵器高台付壺である。体部外上方に直線的に立ち上がり、断面方形の高台がつく。

t 130～t 133は鉄器である。器種は t 130は不明、t 131と t 132がタガネ、t 133は釘である。

溝 SD3016（第148図）

01年度3区の第3遺構面中央北部に位置する、南北方向の溝である。残存長9.5m、幅40～94cm、深さ22～24cmを測る。断面はU字形状であり、北端はSD3014に切られる。埋土は炭化物を少し含む褐色シルト、炭化物を含む褐色シルト、にぶい黄褐色シルトである。出土遺物は土師器、黒色土器、須恵器、陶磁器、鉄器等である。

出土遺物（第149図）

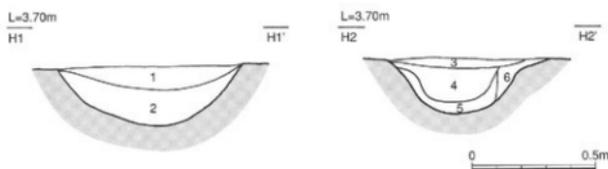
401, 402は土師器杯である。ともに口縁部は直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。401は内外面に赤色塗彩が施されている。403は高台付杯である。体部外上方に立ち上がる。断面方形の高台がつく。404は土師器皿である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部付近で僅かに外反し、先端丸くおさめる。底部は回転ヘラ切である。

406は黒色土器A類碗である。口縁部内縁ぎみに立ち上がり端部丸くおさめる。内面はミガキ調整である。

405は須恵器杯である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。407は須恵器高台付壺である。体部外上方に立ち上がるり、方形の高台がつく。外面に格子状タタキが施されている。

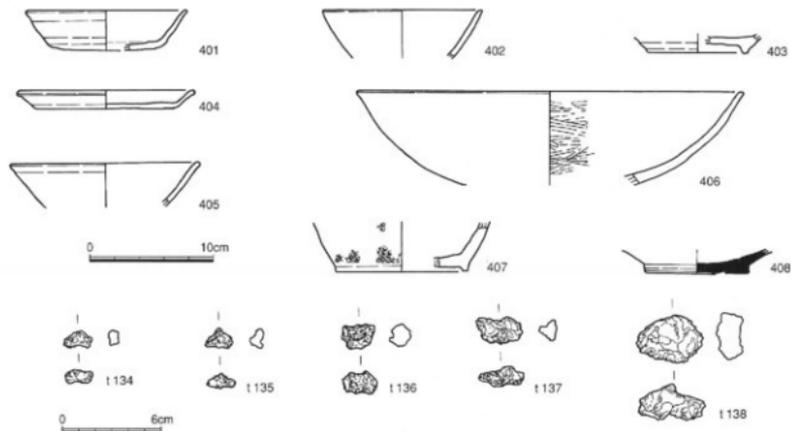
408は灰釉陶器椀である。体部外上方に立ち上がる。削り出しの高台がつく。

t 134～t 138は鉄滓・スラッグである。最大のものは幅39.5mmである。



- | | | | |
|-----------|----------|-----|-----------------------|
| 1. 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | 遺物・炭化物多く含む |
| 2. 褐色 | 10YR 4/4 | シルト | 遺物・炭化物ほとんど含まない |
| 3. 褐色 | 10YR 4/4 | シルト | 2mm大の炭化物を少量含む |
| 4. 褐灰色 | 10YR 5/1 | シルト | 5mm大の炭化物をやや多めに含む、遺物あり |
| 5. 褐灰色 | 10YR 6/1 | シルト | 遺物はほとんど含まない |
| 6. にぶい黄褐色 | 10YR 5/4 | シルト | |

第148図 SD3016土層断面実測図



第149図 SD3016出土遺物実測図

溝 SD3017 (第150図)

01年度3区の第3遺構面中央部に位置する、東西方向の溝である。残存長13.5m、幅60~80cm、深さ24cmを測る。断面はU字形状であり、西端は調査区外にかかる。埋土は炭化物を含んだ灰黄褐色シルト、暗灰黄色シルトを中心とした5層である。出土遺物は土師器、須恵器、土製品、鉄器等である。

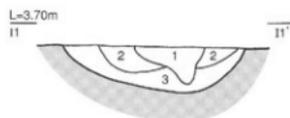
出土遺物 (第151図)

409~411は土師器杯である。411は口縁部僅かに内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。409は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。内外面に赤色塗彩が施されている。410は口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転糸切である。

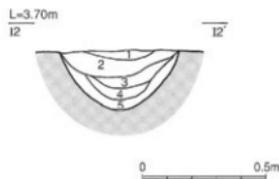
412は土師器皿である。口縁部ほぼ直線的にゆるやかに立ち上がり、端部丸くおさめる。底部は回転ヘラ切後ナブである。

413は土師器甕である。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。先端は尖りさみにおさめ、上方に拡張する。内外面ハケ調整である。

414は須恵器高台付杯である。体部内彎して立ち上がる。断面方形状の高台が貼り付けられている。415、416は須恵器杯蓋である。416は天井部平坦で口縁部下方に若干屈曲

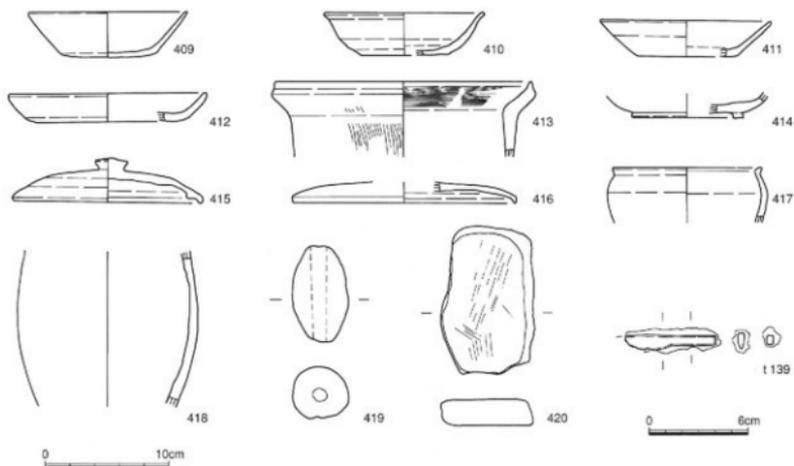


- | | | | | |
|----|--------|----------|-----|--------|
| 1. | にぶい黄褐色 | 10YR 5/3 | シルト | 炭化物を含む |
| 2. | にぶい黄褐色 | 10YR 6/3 | シルト | 炭化物を含む |
| 3. | にぶい黄褐色 | 10YR 5/4 | シルト | 炭化物を含む |



- | | | | | |
|----|--------|----------|-----|---------------|
| 1. | 灰黄褐色 | 10YR 5/2 | シルト | 1cm大の炭化物を含む |
| 2. | 暗灰黄色 | 2.5Y 5/2 | シルト | 濃物・炭化物ともに少量含む |
| 3. | 灰黄色 | 2.5Y 6/2 | シルト | 炭化物を少量含む |
| 4. | 黄褐色 | 2.5Y 5/3 | シルト | |
| 5. | にぶい黄褐色 | 10YR 5/4 | シルト | 1mm大の炭化物を含む |

第150図 SD3017土層断面実測図



第151図 SD3017出土遺物実測図

し、端部下方に拡張し丸くおさめる。415は天井部平坦で口縁部下方に若干屈曲し、端部丸くおさめる。断面偏平な逆台形状のつまみがつく。

418は須恵器壺である。体部外上方に内彎して立ち上がる。417は須恵器鉢である。口縁部内彎して立ち上がり、端部付近で外反し先端丸くおさめる。419は土師質の紡錘状土錘で、穿孔径は12mmである。

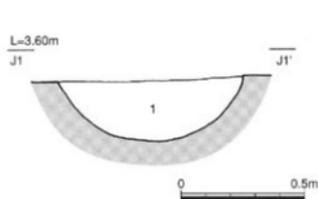
420は砥石で、石材は砂岩である。

t139は鉄器である。器種は鉄鏃である。

溝 SD3018 (第152図)

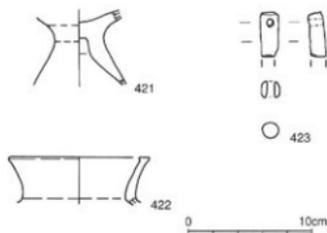
01年度3区の第3遺構面中央部に位置する、東西方向の溝である。残存長4.1m、幅60~78cm、深さ15cmを測る。断面はレンズ状であり、東端は調査区外にかかる。埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色シルト、炭化物を含む灰黄褐色シルトの2層である。

出土遺物は土師器、須恵器、土製品等である。



1. 褐色 10YR4/4 シルト
1cm大の土器片、5mm大の炭化物を含む

第152図 SD3018土層断面実測図



第153図 SD3018出土遺物実測図

出土遺物（第153図）

421は土師器高杯である。高杯脚部の一部分で、円錐形に広がる。弥生または古墳時代の物の混入と思われる。

422は須恵器壺である。口縁部外反して立ち上がり、端部は方形状を呈し僅かに内部に拡張する。外面に自然釉がかかる。

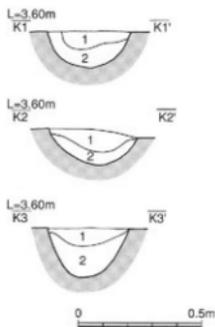
423は土師質の有孔土錘で、穿孔径は6.0mmである。

溝 SD3020（第154図）

01年度3区の第3遺構面南部端に位置する、東西方向の溝である。残存長12.7m、幅25～50cm、深さ20cmを測る。断面はU字形状であり、西端は調査区外にかかる。埋土は褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土の2層である。出土遺物は土師器、須恵器である。

出土遺物（第155図）

424は須恵器椀である。口縁部内彎して立ち上がり、端部丸くおさめる。断面方形の高台が貼り付けられている。



1. 褐色 10YR 4/4 粘質土
2. にぶい黄褐色 10YR 5/4 粘質土

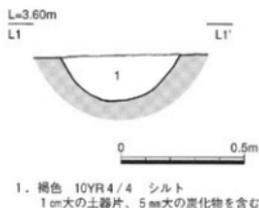
第154図 SD3020土層断面実測図



第155図 SD3020出土遺物実測図

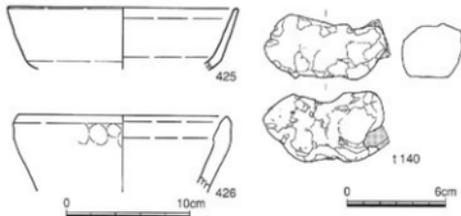
溝 SD3021（第156図）

01年度3区の第3遺構面中央東部に位置する、南北方向の溝である。残存長1.76m、幅40～54cm、深さ20cmを測る。断面はU字形状であり、南端は攪乱によって切られる。埋土は炭化物を含む褐色シルトの1層のみである。出土遺物は土師器、鉄器である。



1. 褐色 10YR 4/4 シルト
1 cm大の土器片、5 mm大の炭化物を含む

第156図 SD3021土層断面実測図



第157図 SD3021出土遺物実測図

出土遺物（第157図）

425は土師器杯である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。

426は製塩土器である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部尖りぎみにおさめる。

t 140は鉄滓・スラッグであり、須恵器が付着している。（網目ドットの部分）

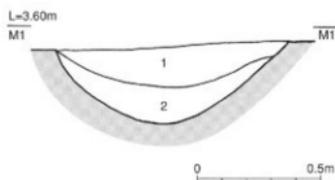
溝 SD3023（第158図）

01年度3区の第3遺構面中央東部に位置する、カーブした形の溝である。残存長5.0m、幅90～100cm、深さ22cmを測る。断面は逆台形状であり、東端は調査区外にかかる。埋土は炭化物を含むいぶい黄褐色シルト、炭化物を含む灰黄褐色シルトの2層である。出土遺物は土師器である。

出土遺物（第159図）

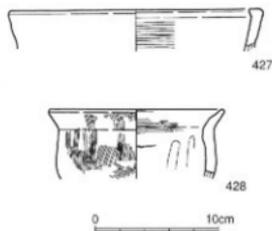
427は土師器鉢である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部方形状で内部に拡張する。内面ハケ調整である。

428は土師器甕である。口縁部やや内彎ぎみに立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。先端は丸くおさめる。内外面ハケ調整である。



1. いぶい黄褐色 10VR 5/3 シルト 炭化物を含む
2. 灰黄褐色 10VR 5/2 シルト 1cm大の炭化物を含む

第158図 SD3023土層断面実測図



第159図 SD3023出土遺物実測図

土坑

土坑 SK3002（第160図）

01年度2区の北部、AB-2グリッドで検出された遺構である。長軸70cm、短軸45cm、深さ30cmを測り、平面形が楕円形状を呈する。埋土は炭化物を含む灰色シルト、炭化物を含む灰オリブシルトの2層である。出土遺物は土師器、黒色土器である。

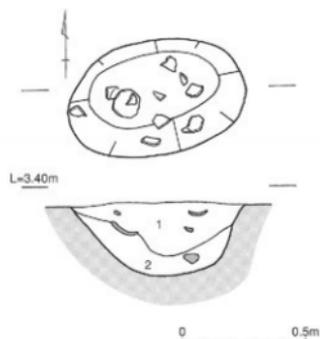
出土遺物（第162図）

429は土師器碗である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部丸くおさめる。「ハ」の字形で断面U字形の高台が貼り付けられている。内外面に赤色塗彩が施されている。

430は黒色土器A類甕である。口縁部内彎ぎみに立ち上がり、端部手前で「く」の字状に外反する。先端は丸くおさめる。外面ハケ、内面はミガキ調整である。

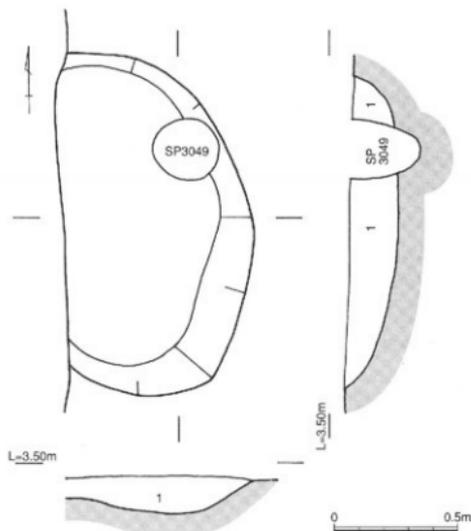
土坑 SK3009（第161図）

01年度2区の北部、AA-1・2グリッドで検出された遺構である。長軸145cm、短軸75cm、深さ20cmを測り、平面形が半楕円形状を呈する。埋土は炭化物を含む灰色シルト1層のみである。



1. 灰色 5Y5/1 シルト
炭化物・土器片を含む
2. 灰オリーブ色 5Y5/2 シルト
5cm次の炭化物を含む

第160図 SK3002実測図



1. 灰色 5Y6/1 シルト 土器片・炭化物を含む

第161図 SK3009実測図



429



430



第162図 SK3002出土遺物実測図



431

432



第163図 SK3009出土遺物実測図

出土遺物は須恵器であるが、実測可能なものは2点のみである。

出土遺物 (第163図)

431は須恵器杯である。体部外上方に直線的に立ち上がり、底部は回転ヘラ切である。

432は須恵器高台付壺である。体部外上方に直線的に立ち上がる。高台部径8.8cmで、断面方形の高台が貼り付けられている。